

児島虎次郎日記 1920年(大正9年)

Kojima Torajiro's Diary for 1920 (Taisho 9)

吉川あゆみ(公益財団法人大原芸術財団特命上席研究員)

YOSHIKAWA Ayumi (Senior Curator, Ohara Art Foundation)

要旨

明治末から昭和初頭、即ち、1900年代の終わりから1920年代にかけて活躍した洋画家児島虎次郎(1881-1929)は、フランスの国民美術協会展を主な発表の舞台とし、評価を得た人物である。同時に児島は、実業家・社会事業家である大原孫三郎(1880-1943)の賛同と出資により、ヨーロッパ近代絵画やオリент古美術を収集し、日本に招来したことで知られる。「日本の芸術界のために」という公益を目的に掲げて収集された美術品は、日本に到着して間もなく一般公開され、1930年の大原美術館開館以降は同館で常設展示されることとなる。児島は画家としての業績とともに、日本におけるヨーロッパ近代およびオリент美術の受容という点でも重要な業績を残したのであった。

本稿は、児島虎次郎の日記を翻刻・紹介するものである。本誌前号では、児島の第二次滞欧初年となる1919年の日記を取り上げたが、今号ではこれに続く1920年の日記を取り上げる。スペインやベルギーへの制作旅行、サロンへの出品準備、新たな大作への挑戦など、精力的な制作活動の傍ら、来仏した日本人の世話や、エドモン＝フランソワ・アマン＝ジャンとの間で持ち上がった現代日本絵画展構想への対応、そして、後の大原コレクションの収集活動と、制作以外でも多忙な児島の滞欧生活が続られている。

児島の日記は、そこに記された情報自体の重要性はもちろん、今後、児島に関連する諸資料が持つ情報をつなぎ、編み上げていくにあたって、核としての役割が期待されるという点でも、重要性の高い資料である。しかし、極めて難読な資料でもあり、現時点の翻刻は残念ながら十分な精度に達しているとはいえない。児島日記の解読には多くの情報を参照することが必要である。現時点での成果を公開することが新たな情報につながる契機となることを期待するものである。

The *yoga* (Western-style painting) artist Kojima Torajiro (1881-1929), who was active from the end of the Meiji era to the beginning of the Showa era, i.e., from the end of the 1900s to the 1920s, presented his works mainly at the Salon de la Société Nationale des Beaux-Arts in France and earned a reputation there. At the same time, having received approval and funds from the businessman and entrepreneur Ohara Magosaburo (1880-1943), he collected modern European paintings and Middle Eastern antiquities, and brought them back to Japan. These artworks collected in the interests of the public, “for the Japanese art world,” were put on public view soon after they arrived in Japan. Once the Ohara Museum of Art was opened in 1930, they were put on permanent view there. Together with his achievements as a painter, Kojima’s accomplishments from the point of view of the reception of modern European art and Middle Eastern art in Japan were significant too.

This article is a transcription and introduction of Kojima Torajiro’s diary. In the previous issue of this Bulletin, the diary Kojima wrote in 1919, the first year of his second stay in Europe, was introduced. In this issue, the diary he wrote the following year, in 1920, is introduced. It describes his travels and work in Spain and Belgium, preparation to submit works to the Salon, attempts at creating new large works, etc. While working hard to produce his own art, he was also kept busy looking after Japanese visitors to France, working on a plan drawn up together with Edmond-François Aman-Jean to organize an exhibition of contemporary Japanese paintings, and gathering works for the Ohara collection.

Needless to say, the information written in Kojima’s diary is important. Furthermore, in order to hereafter connect and compile the various pieces of information in the diverse reference materials related to Kojima, his diary is expected to play a pivotal role as a principal document. Nevertheless, this diary is extremely difficult to decipher, and, at present, the transcription is unfortunately not yet fully accurate. The deciphering of Kojima’s diary requires cross-references to a vast amount of information. By publicizing our findings to date, we hope that it might lead to new information.

本稿は、前稿¹に引き続き、大原美術館の礎となる美術品の収集にあたった洋画家児島虎次郎(1881-1929)の日記(個人蔵。以下、「児島日記」とする。)を翻刻し紹介するものである。大原美術館は、児島が没した翌年の1930(昭和5)年、彼の業績を記念する美術館として設立された。大原美術館にとって児島虎次郎は、創立者大原孫三郎(1880-1943)と並ぶ生みの親であり、その足あとを物語る日記の翻刻は長年の課題でもある。この課題に対する取り組みの現時点での成果を、本誌を通じて順次紹介していくこととし、その手始めとなった前稿では、児島の第二次滞欧の初年である1919(大正8)年の日記を取り上げた。本稿ではそれに続く1920(大正9)年の日記を取り上げる³。

なお、児島日記を含む児島虎次郎関係資料の概要、および児島日記研究の現状と課題については、前稿⁴をご参照頂きたい。

1920年の児島虎次郎

1920年の児島日記は、表紙に「Agenda 1920」、扉に「AGENDA DE BUREAU POUR 1920」と印字されたフランス版の卓上予定帳(縦22.3×横14.0×厚さ1.7cm、総ページ数248)を用いて記されている。ただし、児島は前年の12月中旬からスペイン旅行に出かけ、旅先で年を越したため、1920年の1月1日から21日までの日記⁵には、引き続き前年の日記帳が用いられている。

児島は1920年の幕開けをスペインで迎えた。1月の日記には、グラナダで過ごした半月間を中心に、朝に夕にと精力的にスケッチに取り組む児島の様子とともに、旅の充実感が記されている。ひと月半にわたるスペイン旅行を終え、1月下旬にパリに戻ると、児島は早速グラナダでの取材をもとにタブロー制作に取り組んだ。この制作と並行して、4月開催の国民美術協会展に向けて、日本から持参した出品予定作の修正が進められていった。

季節が春を迎えると、児島は春景色を求めてパリ郊外にたびたび写生に出かけた。夏には、延び延びとなっていたベルギー旅行がようやく実現する。ブリュージュとアントワープで過ごしたこのひと月半の成果は、夏の終わりから秋にかけて、パリのアトリエでそれぞれ100号の大作にまとめられることとなる⁶。第一次滞欧時の約2年間をベルギーで

過ごした児島にとって、この旅のもうひとつの成果は、恩師や旧友たちとの再会であった。第一次世界大戦を経験した彼らにとって、それは言葉に尽せぬ重みをもった再会だったことだろう。

詳細な時期は明らかでないが、児島は遅くとも前年の秋頃までに、大原に対してフランス絵画をはじめとする美術品の収集を提案していたと考えられる⁷。ベルギー滞在中も終わりに近づいた8月の半ば、大原がようやくこの提案を受け容れたという知らせが児島のもとに届く。美術品の収集という大仕事⁷が加わることによって、パリに戻ってからの児島の毎日は以前に増して多忙になった。それでも児島は制作の手を緩めず、むしろより精力的にカンヴァスに向かった。残された滞在期間の中で、できるだけのことを成し遂げようという児島の気概が感じられよう。

10月に入ると、児島は本格的に美術品収集に動き出す。画廊やオークションハウス、そしてアーティストたちのもとへ何度も足を運び、フランス現代絵画を買い集めていった。作品の同定が難しいものの、オリエントの陶器類も一定数購入していることが確認できる。これらの美術品が収集され、日本に招来されたことの意義は言うまでもないが、これらの収集が児島個人にもたらした意義にも注目しておきたい。様々な画家に直接会い、その作品とともに制作現場—アトリエ—や暮らしの様子を目にした経験は、画家児島の自己形成にとって少なからぬ意義を持つものであったに違いない。児島は、ジョルジュ・デヴァリエール(Georges Desvallières, 1861-1950)を訪ねた際のことを、「Devallier 訪問記」と題して特別に紙数を割いて記している。その美しい文体からは、デヴァリエール訪問が児島の心を震わせる体験であったことを感じ取ることができる。

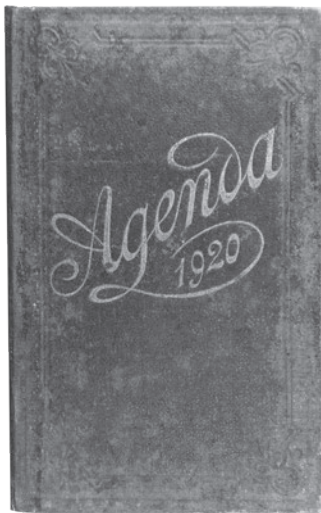
制作、収集、人付き合い、帰国に向けた荷造りや手続きと、多忙で濃密な毎日を過ごす中、1920年は終わりへと近づいていった。12月27日、児島はパリをあとにし、マルセイユ港で船の入港を待ちながら新年を迎えた。1921年1月2日、児島と収集作品を乗せた三島丸は日本に向けてマルセイユ港を出発することとなる。

日記帳の限られた記入スペース内の記述ではあるが、1920年の日記に記された事柄は実に多岐多

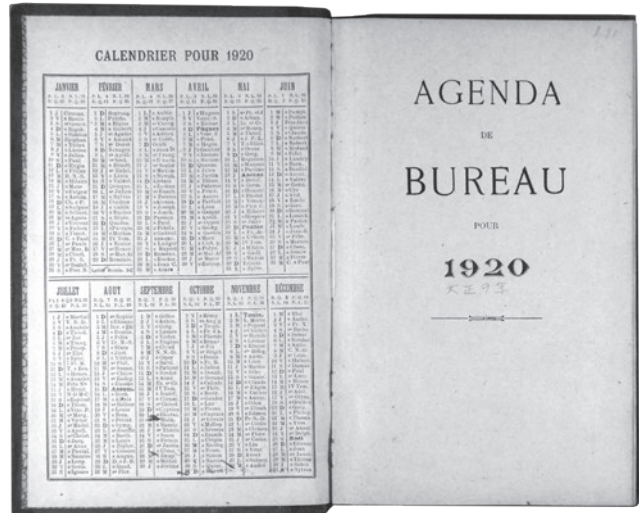
様である。訪れた場所、登場する人物の人数も他の年に比べて格段に多いように感じられる。1920

年という年は、児島にとって非常に動的な一年であったということであろう。

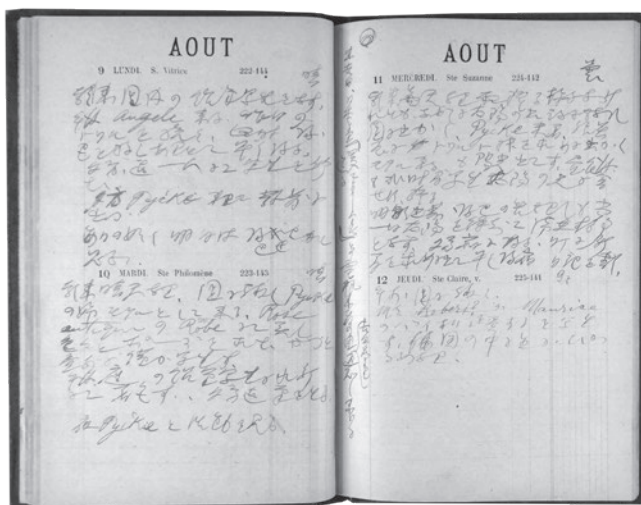
- 1 吉川あゆみ「資料紹介 児島虎次郎日記1919年（大正8年）」『大原芸術研究所紀要』第1号、公益財団法人大原芸術財団、pp.(57)-(169)
- 2 児島は、1919年6月27日にイギリスのサウサンプトンに着港後、7月1日にル・アーヴルよりフランス入りし、およそ1年半後の1921年1月2日にマルセイユを出港し帰国の途についた。児島の第二次滞欧は以上の期間に相当し、主な滞在地はパリである。なお、第一次滞欧は1908年3月より1912年10月まで、主な滞在地はフランスのパリおよびグレ＝シュル＝ロワン、ベルギーのアントワープ、第三次滞欧は1922年6月より1923年3月まで、主な滞在地はパリである。
- 3 児島日記は、1908年から1928年まで（ただし、1911年、1917年を除く。）のものが確認されている。本来なら年を追って順に紹介すべきではあるが、第二次滞欧期の児島の動向を明らかにすることは大原コレクションの形成過程を知る上で重要であり、そのため、この時期の児島日記を先に取り上げることとした。
- 4 前掲書（注1）、pp.(58)-(60)
- 5 児島は、1919年12月11日にパリを出発してスペインに向かった。フランスに再入国したのは1920年1月25日、パリに帰着したのは同月27日であった。1920年1月1日から21日の日記は前年の日記帳の補遺欄に記され、22日以降の日記は1920年の日記帳に記されている。フランス再入国あるいはパリ帰着の日と、1920年の日記帳の使用開始の日が一致しないが、これは児島が数日分を振り返って日記を記したためと考えられる。同様に、後日、数日ないし数週間分を振り返って日記を書いた形跡が、児島日記においてはしばしば確認される。
- 6 前掲注2参照
- 7 児島直平『児島虎次郎略伝』児島虎次郎伝記編纂室、1967年、p.118
1919年12月5日発信の児島発三橋玉見宛書簡が引用されており、その中で大原孫三郎に対して現代フランス絵画の収集を提案していることが述べられている。
- 8 正しくは「Desvallières」



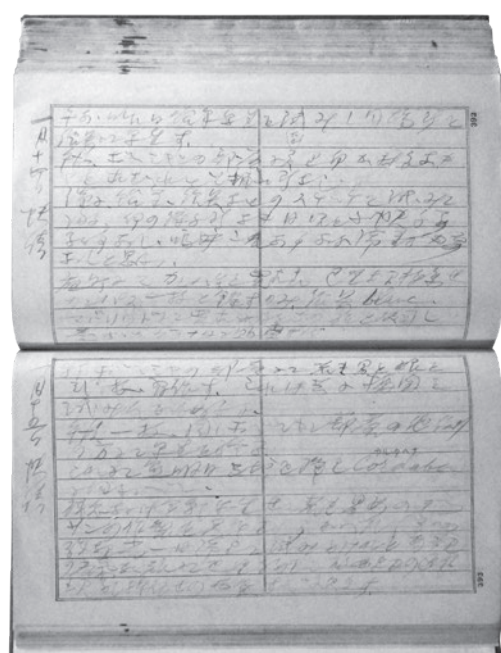
児島虎次郎日記 1920年 表紙



同 扉



同 8月9、10、11、12日欄



1月14、15日欄（児島虎次郎日記 1919年 巻末補遺欄）

挿図は全て公益財団法人大原芸術財団撮影

【凡例】

1. 収録内容について

- 本稿は、児島虎次郎の日記のうち1920（大正9）年の日記（個人蔵）を翻刻収録したものである。
- 児島が日記に使用した1920年版卓上予定帳（以下、「1920年日記帳」とする。）には、1920年分の日記以外に、12月備忘欄に1921（大正10）年1月1日の日記、出納記録欄に1920年1月22日から12月末までの出納記録が記されているが、本稿ではこれを対象としない。
- 1920年1月1日から21日までの日記は、1919（大正8）年の日記帳（以下、「1919年日記帳」とする。）の補遺欄に記されたものである。

2. 記入欄について

- 1920年日記帳は、1ページに2日分の記入欄が設定され、日付・曜日などの他に出納記録を想定した縦横の罫線が印刷されている。本稿では、印刷された日付の下のスペースを「本文欄」と呼ぶこととし、それ以外のスペースは「欄外右上」「欄外左側」のように、本文欄との位置関係で表した。これらの記入スペースを「【本文欄】」のように【 】内に示し、これに続けて当該スペースに記された本文を掲載した。
- 1920年1月1日から21日までの日記は、本来縦書き用の1919年日記帳を反時計回りに90度転倒させた上で横書きで記されている。本稿では、枠で囲われた罫線内を「本文欄」と呼ぶこととし、それ以外の記入スペースは横書き状態を正位置とした本文欄との位置関係で示した。
- 原文が欄をまたいで記入されている場合は、「【欄外上側・本文欄】」のように、記入されている欄を「・」でつないで示した。また、異なる欄に文が続く場合は、「【本文欄～欄外右側】」のように、「～」を用いて記入順を示した。
- 空欄となっている日にについては、日付・曜日のあとに「（記入なし）」と記した。

3. 書式等について

- 1920年の日記は基本的に横書きで記されており、本稿は原文に準じて横書きのレイアウトとした。例外的に縦書きで記されている箇所については、その旨を【 】内または脚注に示した。
- 改行は原則として原文に従った。本誌誌面の都合上、原文にない改行が生じた場合は、その箇所を「↵」で示した。
- 原文において、内容を区切る意図や空白を残す意図をもって行間や文字間を空けていることが明らか場合は、これを反映した。

- 原文において、明らかに内容の区切りにあたるが、間を空けることなく文字が続けられている場合は、句読点の有無に関わらず、原文と同様文字間や行間を空けていない。これによって誤解が生じると判断した箇所については、5の③のとおり補足情報を付した。
- 原文の字下げは一部の例外を除き原則的に反映していない。

4. 文字および文字列について

- 文字および文字列については、引き続き翻刻の精査を進めることを前提に、その便を考慮して次のように扱った。
 - ①漢字の旧字、異体字等は、可能な限り原文のとおり掲載し、新字体への置き換えは行わないこととした。ただし、文字コードの制約等によりパソコンでの使用が難しい文字は、同意の近似する文字で代替した。
 - ②変体仮名は現代仮名に置き換えた。
 - ③判読できなかった文字は□で示した。
 - ④児島本人によって、取り消しや訂正が加えられた文字は、「赤青」のように二重取り消し線で示した。ただし、重ね書きによる訂正を除く。
 - ⑤挿入線などを用いて追加された文字は、指示された箇所を追加した。
 - ⑥児島以外の筆跡による書き込みは本文として扱わず、注にその内容を示した。

5. 翻刻者による補足情報について

- 読みやすさを考慮し、次のとおり情報を補った。
 - ①明らかな誤字については、適宜（ ）内に正しい文字を示した。
 - ②明らかな誤字であるが、正しい文字を補わない場合は、「ママ」を付した。
 - ③本文で示された名称等がわかりづらいものについては、今日一般的に用いられる名称・呼称などを適宜〔 〕内に示した。ただし、同日内に繰り返し登場する名称については、初出のみにこれを示した。
 - ④翻刻に疑いの残る文字については、「？」を付した。
- 外国語のカナ表記の誤りや揺れは、言語による発音の違い、時代による一般的外来語表記や呼称の違い、また、児島による外国語の文法・つづり・発音の誤り、さらには単純なカナの誤りなど、様々な要因が混在・複合して引き起こされている。これを踏まえて、次のように取り扱うこととする。
 - ⑤欧文の単純なスペルミスや文法の誤り、カナの

誤りについては、正しい文字・つづり等を適宜（ ）内に示した。なお、原則的にフランス語表記を正として扱った。

- ⑥ 欧文のアクセント記号や連結記号の欠落については、煩雑を避けるためこれを修正しない。対して、不必要なアクセント記号や連結記号が付いている場合は、（ ）内に正しいつづりを示した。
- ⑦ カナ表記の元となる欧文や、その日本語訳、今日の一般的呼称などの補足情報を適宜（ ）内に示した。
- ⑧ 補足情報として地名を取り上げる場合は、煩雑を避けるため、日本で一般的に用いられている表記を採用した。現地での呼称や発音と異なる場合があることをご了承いただきたい。
- ・ 児島に特有の用字・用語については、次のように情報を補った。
- ⑨ 原文では、仮名の濁点は殆どの場合省略されているが、原文のまま掲載することとした。濁点の省略は誤字として扱わず、濁点の省略によって理解が損なわれると判断した箇所については、「〔エジプト〕」のように、〔 〕内に濁点を補った単語、または一般的名称・呼称を示した。ただし、児島は「す」に相当する変体仮名「須」を打ち消しの助動詞「ず」に限って用いていることから、変体仮名「須」が用いられた箇所には「ず」を付した。
- ⑩ 「額椽（額縁）」など、当時比較的一般であった用字、「カンパス（カンヴァス）」など、児島が日常的に用いていた用語は誤字・誤記として扱わない。ただし、誤解を避けるために、適宜〔 〕内に一般的用字・呼称などを示した。
- ⑪ 児島は「寝」「憩」を常に独自の文字（誤字）で表す。これらについては、正しい文字に置き換え、その傍に「*」を付した。
- ⑫ 児島は、いわゆる「くの字点」（二字以上の文字列の繰り返しを表す記号）を横書きでも用いており、縦書きの場合と同様に縦位置で配置している。本稿ではこれを実際の字形に近い「く」に置き換え、その傍に「*」を付した。
- ・ 以上①～⑫の補足情報および記号は、本文当該箇所の上に配置した。

- ・（ ）および〔 〕内に示した補足情報自体に疑いが残る場合は、（ ）または〔 〕内に補足情報に続けて「？」を付した。
- ・ その他の補足情報を脚注に示した。
- ・ 文中に登場する人物の特定・推定が可能な場合は、初出のみ、極簡単な人物情報を脚注に示した。初出以外については、200～211ページの人名索引を参照されたい。なお、これらは前後の日記や関係資料などから現時点で得られた情報をもとに人物の特定・推定を試みたものであり、更なる精査を要する段階のものであることをご了承いただきたい。
- ・ 脚注中、人物の特定・推定に用いた資料として、「児島の住所録」がたびたび出てくる。児島が使用した住所録としては、手のひらサイズのアドレス帳が5冊（ただし、そのうち2冊は主にメモとして使用されている。）、1922（大正11）年および1923（大正12）年の日記帳巻末の住所録が確認されており（いずれも個人蔵）、本稿ではこれらを参照した。
- ・ 脚注中で児島作の特定の油彩画作品に言及する場合は、「児島油彩画総目録No.」として、公益財団法人大原芸術財団「児島虎次郎 油彩画総目録（ウェブ版）」https://www.ohara.or.jp/collection/kojima_reisonne/（2025年12月31日現在）掲載の作品番号を示した。
- ・ 様々な分野から情報提供とご協力を賜りたいと考え、美術分野においては基本的ともいえる情報をあえて補った箇所が多くある。煩雑の嫌いがあることは承知しているが、意図をご理解の上ご容赦いただければ幸いである。

6. その他

- ・ 一部、現代の社会通念や人権意識においては不適切と思われる用語・表現、またはプライバシーに関わる内容を含むが、当時の社会的背景や本資料の学術的意義を鑑み、原文のまま掲載した。本稿を活用される場合は、多様性の尊重、個人の権利への配慮をもって活用されるようお願いしたい。

本稿をまとめるにあたり、児島虎次郎の孫である児島塊太郎氏に格別なるご高配とご助言を賜りました。ここに記して、感謝の意を表します。

1月1日 木曜¹

【欄外左側（縦書き）】

一月一日 晴

【本文欄～欄外下側】

空は朝来快晴なり、絵具箱を携へて海岸傳にて
東進す、市外に出て、砦の跡らしきものある丘に上る、
海濱の人家を眼下に眺み打寄する地中海の^{〔のぞみ〕}
波と共に写生す、小雨ありたれとも快晴に復す
Sevilla^{〔セビリア〕}にて入浴したるためなるか感冒の氣味
ありて体だるし、昼食後、市中の店頭閉しられ
て何となく日曜の如なるに日記を取出して探れば
今日は元旦なり大正九年にして1920なり余生れ
て四十年に未たかつて今年の如く元旦の来りしを知さりし
年なし今年の生に幸あれ！！ 午後町の中央に聳ゆる丘に
登り阪道^{〔坂〕}の写生をなす風強く吹荒れて砂礫を昇す、

1月2日 金曜

【欄外左側（縦書き）】

一月二日 発信大原²

【本文欄】

午前十時^{〔マラガ〕3} Malaga 発^{〔グラナダ〕4} Granada に向ふ途中
^{〔ボバディージャ〕}
^{〔Bobadilla〕} Badabile 迄式時間余の沿道は実に絶
景とも称すべし流れ沿たる田園^{〔蜜〕}の密柑畑
には柿の熟したる如く密柑^{〔蜜〕}の熟して今此の
快晴の天空の下に数多の野人梯子に上して
密柑の採集中なり、遠き連山はオリブ^{〔オリーブ〕}の畑
に彩られ往年ナホリ^{〔ナホリ〕}の旅を思ふ、
^{〔Bobadilla〕} Badable に近く岩質の高峯聳へ墜道多く^{〔陸〕}
谷深くして水走り観光に價するものあり、
式間^{〔式時間〕5}の延着にて六時過 Granada 着、
Pension Carmona に就く⁶（アルハンブラ）

1月3日 土曜

【欄外左側（縦書き）】

一月三日 新年はかきを数多

書く

【本文欄】

朝先づアルハンブラ⁷を参観す、建築壮美を欠くと
一度廃タイしたるを修復せし所非常に多く比較的
巧妙に修繕され居るも其の修繕の場所の面積
多きと殆ど原状に復し居らざる様の所ありて
何となく変な氣持する箇所尠ならず⁸

- 1 1月1日より21日までの日記は、1919年の日記帳巻末の「大正八年当用日記補遺」欄に記されている。
- 2 大原孫三郎（おおはら・まごさぶろう、1880-1943）。実業家・社会事業家。倉敷紡績社長ほか。見島の制作活動を支援し、のちに見島を記念するために大原美術館を設立した。
- 3 鉛筆にて「マラガ」と書き添えられている。見島本人の筆跡ではない。
- 4 鉛筆にて「グラナダ」と書き添えられている。見島本人の筆跡ではない。
- 5 鉛筆にて「時」と書き加えられている。見島本人の筆跡ではない。
- 6 正しくは「Villa-Carmona」。同日分宿泊料の請求書兼領収書が現存しており（個人蔵）、これによりホテル名が確認できる。
- 7 鉛筆にて「アルハンブラ」と書き添えられている。見島本人の筆跡ではない。

欧州のローマンルネサンス⁸などの大建築を見
てこのアラブ建築に對せは如何にも小細工
にして貧弱たるを□れず然し何所となしに建物
に親しみのあるは不思議なり、午後 Alcazaba^{〔アルカサバ〕}
を見る、夕方、Jitanoi^{〔ロマ、ジプシー〕}
^(Gitanos)の部落に散歩した、
〔マラガ〕
Malagaの暖かさに比して此地の寒き事
はトレド^{〔トレド〕}以上である、夜ストーブを燃て貰たか
なかに燃へない^{*}

1月4日 日曜

【欄外左側（縦書き）】

一月四日 夜新年のはかきを
書く

【本文欄】

午前 Generalifa^{〔ヘネラリフエ〕}
^(Generalifa)に趣く空曇りてあまり陰気な
る感しす、暑の烈光の日訪れて見たき心地す、
谷^{〔ロマ、ジプシー〕}
^(Gitanos)に下り Jitanoiの部落を散歩す、此の
部落の様子は全く夢に見るか昔話に聞く様の
所なり、
午後アルハンブラに写生に趣く中庭の噴水
の辺[?]を描く、描きかけて曇りとなり只デッサン
のみ描きて帰る、
夕方、アルハンブラの門前より向⁹ふのアラブ
の部落を眺めて写生す、

1月5日 月曜

【欄外左側（縦書き）】

一月五日 夜はかきを書く

【本文欄】

朝宿の前の Moseque^{〔モスク〕}
^(Mosquée)
の側にて十五号
の写生を始む途中日曇り来りたれば
昼前中止す、
午後アルハンブラに趣き昨日の續きを描
く天明に晴れず、^す

1月6日 火曜

【欄外左側（縦書き）】

一月六日

【欄外上側】

午後曇り Alhambraに趣かす向^すか丘なる Sacro^{〔サクロ〕}
^(Sacro)
mote^{モンテ)}
monite) 10
moteに行き丘の上にて子供と野羊を描く

- 8 鉛筆にて「ルネサンス」と書き添えられて
いる。児島本人の筆跡ではない。
- 9 鉛筆にて「向」と書き添えられている。
児島本人の筆跡ではない。
- 10 次の作品について述べたものと考えられ
る。
児島油彩画総目録No.423 《(グラナダ郊
外)》26.7×34.3cm、個人蔵
なお、スペインでの児島の制作について
は次に詳しい。
孝岡睦子「児島虎次郎 西班牙の旅」
『生誕130年 児島虎次郎—あなたを知
りたい』図録、大原美術館、2011年、pp.
171-181

【本文欄】

^(モスク)
(Mosquée)
午前 Moseque の写生を續け午後^日は
Alhambra の写生を續る事昨日の如^し
朝日光のよく当る場所に画架を据へて居る
ので暖かすぎる位で少しも寒を感じる事はない、
それでも此辺朝は霜と地は凍て固まつて
^(アルハンブラ)
居る、Alhambra の庭は日の当らぬ場所
あるか仕事して居る間は寒を感じる様の事は
ない、日か暮れは下町に趣く散歩と
^(カフェ)
カツエに寄る宿で夕食の八時頃帰る
この間寒くな^し。宿の室のストーブ煙突か
壊れ居るのでなか^{*}く^(抵)コークスか^{*}燃焼へぬ大^抵一^時
間位で黒く消へて終ふ 十時就床

1月7日 水曜

【欄外左側（縦書き）】

一月七日 快晴

【本文欄】

^(モスク)
(Mosquée) ^(アルハンブラ)
午前 Moseque に午後 Alhambra に趣
き式枚共描き終る三日つゝ費したり、
Alhambra の庭の噴水から描て居る間に
太い水が噴出して来た実に嬉しい心地
かした、¹¹
今日は終日快晴で昨日一昨日の
如く曇り勝ちて写生の不便であつた
様の事ハ無かつた、¹²
下町にL□□ho de Paris か来て居る此頃
巴里は毎日雨で^(セーヌ川)
Sein^(Seine)に出水甚しく若し
数日続けは又前年の洪水を現出するらしい

1月8日 木曜

【欄外左側（縦書き）】

一月八日 快晴

【本文欄】

^(インファンタスの塔)
(la Tour des Infantes) ¹³
朝 tour Inphanta を観る（宿の裏なり）、十時より其附
近にて写生を始む（十五号）寺の塔と、向の丘を遠く
眺めたる所、¹⁴ 午後、大急きて^(サクロモンテ)
Sacromote の下
路の古寺に趣き石の十字架を前に遠くアラブの町を
見たる所を写生す（十五号）¹⁵ 今日一日にて描き終る
積なりしも日脚短かく山端にかくれ、僅か
二時間不足にて日没す、五時半宿に帰り夕食

- 11 1月4日より7日にかけてアルハンブラで制作した作品は次に該当すると考えられる。
児島油彩画総目録No.419《アルハンブラ宮殿》68.5×56.5cm、大原芸術財団 大原美術館蔵（所蔵品登録No.4068）
- 12 鉛筆にて「不」と書き添えられている。
児島本人の筆跡ではない。
- 13 スペイン語の「Infanta」によつたものか。以下同。
- 14 次の作品について述べたものと考えられる。
児島油彩画総目録No.425《スペインの村》56.5×68.0cm、大原芸術財団 大原美術館蔵（所蔵品登録No.4099）
- 15 サクロモンテの聖墳墓礼拝堂からの眺めを描いた油彩画（個人蔵、児島油彩画総目録未収録）が確認されており、これに該当するものと思われる。

迄は毎の如下町を散歩す、
宿の室には寒くしてとても居たまらず、写生を
終りて夕食迄は二三時間あれ此間なにか日記
旅行記様のもの書て見る積てあつたかとても寒い
のて在室不可能なり

1月9日 金曜

【欄外左側（縦書き）】

一月九日 快晴

【本文欄～欄外下側】

昨日の如く朝来快晴無風、春の如く
夏の如し 終日寒さ感する事少しもなし日光
冬なるも尚猛し 北に皚々たる雪山脈を
眺むるは此所は殆と兩三日冬を忘れてたり
午前、Inphanta〔インファンタスの塔〕
〔Infantes〕に午後Sacromote〔サクロモンテ〕
〔Sacromonte〕
の下に昨日の如く仕事して忒枚を
終る、尚滞在して、写生すべき哉
明日出発して帰る途中何所か適當の場所に
留て写生を試むべきかにつき色々考へた仕事す
るには非常によい所である宿は氣樂にして夜寒い
他何のうれいなし殆と他郷に淋しくあるの心地
せず、然し明日当地を辞せんと決す、朝は
七時頃宿を出発せねはならず、たまゝ宿の主人今日不在
明日の出発不可能となる

1月10日 土曜

【欄外左側（縦書き）】

一月十日 午後快晴

【本文欄】

尚今日一日滞在する事となり Hotel Wasington
の前の廣路を上りて Cimitiere の手前にて右
に折れ坂道をたれば、板〔スケッチ〕のスケッチ板箱を携へて
Alhambra の lion の Fountain の写生
を試む朝霧深し、午後スケッチに Hotel
Washington Irving の前の廣路を上りて
数町、Cimitier〔共同墓地〕
〔cimetière〕に裏より雪山を望み
て夕方写生す、噫、雪は何所にて何時
見ても美しきものまして暮の雪春の雪は
最も美しき哉明日の出発と今日昼宿の主人
に告けたるも尚滞在してこの雪の写生を紀念
としたし往年アルプスの旅を思ふ？深し

1月11日 日曜

【欄外左側（縦書き）】

一月十一日

【本文欄】

(共同墓地)
(cimetière)

朝 Cimetier の前を横に坂道の下□

行けば左方にこの辺のボヘミヤン^[ロマ、ジプシー]部落の寺院

あり彼等の居宅と同しく穴造りなり内部諸

室を穿つ、其の傍らにて一枚写生を終る、¹⁶

午後より暮迄、昨日スケッチせし雪の山

の写生をなす、日脚斜[?]にして暮近し

今日一日に終るべかりし写生も中途にし

て宿に帰る、

1月12日 月曜

【欄外左側（縦書き）】

一月十二日 快晴

【本文欄】

(ロマ、ジプシー)

午前ボヘミヤンの部落にてスケツ^[スケッチ]をなす、

穴屋の前に驢馬の繫ある傍にて主婦子供

の髪を揃る、¹⁷

午後雪山の写生をつゞく大急きにて描

きたれとも、尚時間の不足をうらむ、[?]

1月13日 火曜

【欄外左側（縦書き）】

一月十三日 快晴

【本文欄～欄外下側】

(ロマ、ジプシー)

午前ボヘミヤンの部落より Granada^{[グラナダ]18}の

市街を□下したる、鉛筆の写生を昼迄つゝ

く、

Granadaにて描きたるもの数枚、然し皆風

景の写生にして製作の資料となるべきも

の一もなし、巴里或は酒津に帰りて何か習[?]

作を試むべきものを少し試作して帰りたく、

このボヘミヤン部落にて何かエチ<sup>[習作]
(エチュード)</sup>ードを試む

る希望を起す、

午後昨日終りたるべき雪の写生を携

へて三度修作を試む、

山と眼下の村落の位置をコンポー<sup>(composer 構成)
(コンポーゼ?)</sup>せしたるため

調子の不和を生じたるためなり¹⁹

16 次の作品とその関連作品について述べたものと考えられる。

児島油彩画総目録No.415《ジプシー地下寺院》57.5×67.0cm、大原芸術財団 大原美術館蔵（所蔵品登録No.4067）

同目録No.416《(スペイン風景)》

92.5×117.5cm、倉敷紡績株式会社蔵

17 次の作品について述べたものと考えられる。

児島油彩画総目録No.421《スペインの村》25.5×33.2cm、大原芸術財団 大原美術館蔵（所蔵品登録No.4082）

18 鉛筆にて「グラナダ」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

19 1月10日より13日にかけて雪山を題材に描いた作品は次に該当すると考えられる。

児島油彩画総目録No.417《スペインの風景》57.5×79.8cm、大原芸術財団 大原美術館蔵（所蔵品登録No.4069）

1月14日 水曜

【欄外左側（縦書き）】

一月十四日 快晴

【本文欄】

午前昨日鉛筆写生を試みし同場所を
絵具にて写生す、
午後、^{〔ロマ、ジプシー〕}ボヘミヤンの部落²⁰に^{〔料〕}至り何か材良なき
やと求むれとも捕ふ所なし、
僅に、鉛筆、絵具などのスケッチを試みて
帰る、何の得る所なき日ほと不快不安
なる事なし、嗚呼こんな事なら滞まる必要
なしと思ふ、
夜町にて^{〔カンヴァス〕}カンパスを買求む^{ママ}巴里より持参せ
カンパス一枚を餘すのみ、^{〔白〕}絵具 blanc、
^{〔マドリッド〕}マドリッドにて^{ママ}甲斐求めたるもの殆ど使用し
盡すもグラナダに販賣せず

1月15日 木曜

【欄外左側（縦書き）】

一月十五日 快晴

【本文欄】

^{〔ロマ、ジプシー〕}朝ボヘミヤの部落にて若き男と娘を
式枚習作す、これは共に構図を
試みんかためなり、
午後一枚、^{〔ロマ、ジプシー〕}同じボヘミヤン部落の他側
の方にて写生を終る、²¹
これにて愈^{〔コルドバ〕}明日^{〔Córdoba〕}当地を降り Cordaba²²
に向ふべし、
残念なるは今朝写生せし若き男女のデッ
サンの作製を見さりし事かへす^{*}も心
残なり尚一日滞りて試みたけれとあまり
の呑氣なる旅にて巴里に帰りて故国よりの通信
も見たし持合せの西貨すでに欠乏す、

1月16日 金曜

【欄外左側（縦書き）】

十六日 快晴

【本文欄】

午前七時^{〔グラナダ〕}Granada宿を出発、^{〔コルドバ〕}Cordobaに^{〔Córdoba〕}着したるは
午後七時着、
グラナダにては毎日快晴つゝきにてよく働
けたり働きたり、かなり描きたり、其の
作品の佳なるもの悉無なりとしても余は

- 20 鉛筆にて「至」と書き添えられている。見島本人の筆跡ではない。
- 21 ロマ（ジプシー）の集落にて描かれた「若き男と娘」の絵、およびその関連作は次に該当すると考えられる。
- 〈a〉見島油彩画総目録No.431《スペイン人》66.7×51.5cm、所蔵不明
- 〈b〉同目録No.430《習作—スペインの少女》66.5×51.5cm、大原芸術財団 大原美術館蔵（所蔵品登録No.4090）
- 〈c〉同目録No.429《スペインの丘》87.5×114.0cm、同所蔵（同登録No.4102）
- 〈c〉については後掲注38参照。
- 22 鉛筆にて「カルタヘナ」と書き添えられている。見島本人の筆跡ではない。

この十数日の働きか今旅の中にて最も
愉快なり^{ママ} 紀念たらむ？ 日にも焼けたり
少しは^{ママ} 労れも覚へたり、
然し巴里の天候を思て巴里の寒さと
比せよ、何と云ふ幸福なる旅であろう
去て後この^(グラナダ) 半月²³の客たりしを
感謝する事深からむ

1月17日 土曜

【欄外左側（縦書き）】

一月十七日快晴

【本文欄～欄外下側】

^(大聖堂)
(cathédrale)
朝、catedraleを^{ママ} 観る、世界にて第二位に
置かれたる大寺院なると云ふなるほど廣大
なものなり建築の美は^{ママ} 完き所なきも岩と
壮との美は^{ママ} 尠からず、堂奥のアラブ時代
^(モザイク)
モザイクの尚□□として残り其の光と
色の壮美優麗は^{ママ} 余をして其前を去る事を
得さらしみ尚午後再ひ此の前に^{ママ} 佇む事を
し^(為さし) 為さめたるほど実に美しきものなり
古代朱と深藍と金色の調和の完き
事は実に何れの時代の装飾比してもこれ
ほどの美しき調和せしものはあるまし然し
其の壮と重みある事の最もな□は得□き遺品たらむ
か、午後市中を散歩す、夜^{ママ} 十時の列車にて
^(アルカサル)
(Alcazar)
Alcazarに向ふ、

1月18日 日曜

【欄外左側（縦書き）】

一月十八日快晴

【本文欄】

^(アルカサル)
(Alcazar)
Alcazarに着したるは朝の九時なり三時間
延着、^(バレンシア)²⁴ Valenciaに向ふ^{ママ} 汽車は今夜
十一時発のもの、^(なし) 外なり、其の間この寒村に
て時を送る観る所も写生するものもなし、
停車場の^(レストラン) Restaurantにて時を待つ

1月19日 月曜

【欄外左側（縦書き）】

一月十九日快晴

【本文欄～欄外下側】

昨夜駅の宿の主人に余の^(バレンシア) Valenciaに向ふ事

- 23 鉛筆にて「茂」(ただし消字されている)、「楽」と書き添えられている。兎島本人の筆跡ではない。
- 24 鉛筆にて「バレンシア」と書き添えられている。兎島本人の筆跡ではない。

を告げ Valencia 迄は乗換のなき事を
 たしかめ置たるに正午過車掌の切符を検
(アリカンテ)
(Alicante)
 □□事 Alicante に向ひつゝありて
 乗換を要すべき所なりし一時間ほど
 前過し駅に帰る必要ありとて換越賃を
 拂さる、幸にして引返したる余の過ぎし時發
 すべかりし Valencia 行の汽車は尚停
 車しあ□てつまり Valencia 着は少しも遅
(なかり?) (ベセタ)
 延したる所はなりしも□ 63pts 支拂と
 □れたり、午後三時半 Valencia 着、
(クレディ・リヨネ銀行)
(Crédit Lyonnais)
 Hotel Oriente 泊 Credi Lionais にて
 佛貨を西貨に換ふ、夕方市中散歩、
(フラン?)
 700f □ s

1月20日 火曜

【欄外左側 (縦書き)】

一月二十日晴

【本文欄 (横書き) ~ 欄外右側 (天地逆さに縦書き)】

(地方博物館 (バレンシア美術館))
 朝、Musee Provincial に趣く、
 * (ベセタ) (か) ず (Velázquez) 26
 なかゝ見るものもの尠□らず、Velasques の
 自像小品なれとも力あり、
(Sorolla?) 27 (習作)
 Zorala の etudes あれと優れ□□もの
 なし Goya の作品数多ありて□に
 或画家の肖像あり□最も優れ□作
 たり、他に Degrain の式室に満ち
(なかなか?) ?
 たるコレクションなか不思議なる作品なり
(サグント)
(Sagunto)
 正午□の列車□□ Segunto に向ふ
(停車場)
 三時頃着駅 停車場前のホテルに荷物を
(ローマ時代の劇場遺跡)
(la ruine du théâtre romain)
 運び置きて直に Ruin Theatre Roman
 及アラブの城砦を觀る夜この見物の途出會せし
 バリトン音楽家の独奏を
(カフェ)
 カツフェに聞く

1月21日 水曜

【欄外左側 (縦書き)】

一月二十一日

【本文欄】

今朝、写生道具を携へてローマ劇場の傍に
 て方々位置を求めて終りに前に劇場の廢
 跡を□望に遠く丘の上に連々たる城砦
 を据し直前に目杏花と梨花の咲き
 盛りたる園ある民家の一角を写す、³⁰

- 25 1920年1月20日付の請求書兼領収書(1月19~20日宿泊分)が現存する(個人蔵)。それによれば、ホテル名は「Gran Hotel y Restaurant de Oriente」。
- 26 ディエゴ・ベラスケス(Diego Velázquez, 1599-1660)。スペインの画家。
- 27 ホアキン・ソローリャ(Joaquín Sorolla, 1863-1923)か。スペインの画家。
- 28 フランシスコ・デ・ゴヤ(Francisco de Goya, 1746-1828)。スペインの画家。
- 29 アントニオ・ムニョス・デグライン(Antonio Muñoz Degrain, 1840-1924)。スペインの画家。なお、鉛筆にて「スルバラン」と書き添えられているが、児島本人の筆跡ではない。
- 30 次の作品について述べたものと考えられる。児島油彩画総目録No.424《スペイン風景》68.0×56.0cm、大原芸術財団 大原美術館蔵(所蔵品登録No.4093)。同作には「au mois de janvier à Sagunto」の裏書きがある。

午後も位置探りに時を過し夕方大急
きにて丘上より寺院を瞰下したる写生
をなす夜散歩す静かにして淋しき
町なり、セレノの呼声暗に美しく響く
静かなる床に就く、

【欄外下側】

一月二十二日より日大正九年、1920の日記帳に写す、

1月22日 木曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

今一日尚滞在せむかと種々思定めたれと、
巴里に帰る事のなんとなく心忙しきまゝ此地
を去る事となす、朝早起窓外の丘と
町街を小さく写生す、
午前十時発車、午後四時過
(タラゴナ)
(Tarragone)
Taragone 着、Hotel de Paris
に泊す、
夕方散歩に出づなんとなく面白
そふな古き町なり海岸に望みて
見晴よし此地にも羅馬朝の遺跡
なかゝに見るものあり
夜、活動を観る

1月23日 金曜

【欄外右上】

快晴

【本文欄】

早朝より写生帳を携へて遺跡訪問
〔考古学博物館〕
(musée archéologique)
にかけ廻る、此地のmusee archeoragic
見るもの多し
(タラゴナ)
(Tarragone)
午後Taragonaの市街の周囲は、
非常に美しい所計りてある写生
する積りなれば幾日でも滞在か
出来よう
(バルセロナ)
(Barcelona) 32
午後、五時過発車Balacelona
に向ふ八時過着？
Hôtel Oriente 33
に泊す、
夜散歩寄席に入る、

- 31 次の作品について述べたものと考えられる。
児島油彩画総目録No.426《風景》57.0×68.0cm、所蔵不明。同作品は城砦の丘よりサグントの聖母生誕教会を描いたもの。
- 32 鉛筆にて「バルセロナ」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
- 33 1920年1月23日から26日利用分のホテルの請求書兼領収書が現存する（個人蔵）。それによれば、ホテル名は「Gran Hotel de Oriente」。

1月24日 土曜

【欄外右上】

快晴

【本文欄】

(博物館・美術館)
早朝より Musée 見物に出かく
絵画の新旧のコレクション
なか*豊富なり 考古品の陳列
(ローマ時代の
Roman)
中、Roman のもの最も多数
にして見るものあり、
午後市中を散歩す
此の都は現今(スペイン) 西班牙第一の
盛繁なる府にして首都(マドリッド) マドリット
を駕するものあり
港に多く見る雑騒の感あれとも
其の盛なる事は慥に南欧の首都の
如し、

1月25日 日曜

【欄外右上】

晴

【本文欄～翌日欄外右上】

午前九時発、愈々今一ヶ月余の(スベ
イン) 西班牙の旅を去りて佛国に入らむとす、
(ポール=ヴァンドル
Port-Vendres)
午後四時頃？ Port Vendre
に下車す、国境税関の荷物
検査も甚た無事て済む
(Port-Vendres)
Port Vendre は佛国の西南
端の都なり(ミモザ) ミモザ咲き満つ
小山を背にして静かなる地中
海の青波に影したる貧村なり、
ホテルに荷物を托して隣村なる、
(コリウール)
Collioure に散歩す燈の頃にて港の水
美し

1月26日 月曜

【欄外左上】

晴

【本文欄】

(画布) (コリウール)
朝式枚のトワルを携へて Collioure
の隣村に写生に趣く、式里足らず
の道なり、午前と午後に各一枚の写生
(ポール=ヴァンドル
Port-Vendres)
をやつと終り點燈後、Port Vendre

に帰る、Collioureの港は案内
(絵になる)
(pittoresque)
書によりてPitoresquの港村
なる事を知り下車を望みたれと
汽車の直行なるもの停車せずPort
(Port-Vendres)
Vendreに泊所を定めたるなり
静かなる気持にて日を過す、旅も
終りに近づきて頃は春の盛なり
南欧に遊子か旅情なかに^{*}に思出
深し

1月27日 火曜

【欄外右上】

晴

【本文欄～欄外左側（縦書き）】

午後三時Port Vendre^(ポール=ヴァンドル)
^(Port-Vendres) 発愈々巴
里の帰途に就く、Perpinang^(ペルピニャン)
^(Perpignan) 34
にて日暮る。
明日は巴里の寓に帰る得らるゝ[?]
と思へはこの長旅の労れも
慰め得られむ？
殆と旅行中雨にも出會せず、まし
て南方にて写生に過せし[?]日³⁵月³⁵は
快晴のみつゝきて空に雲さへ
なく都合よし携へたる布も使用し尽し
たり苦しかりし旅の忙しさも過ぎてみれば○³⁶
○又^{ママ}楽しみ^{ママ}の浅からずもの
なる哉³⁷

1月28日 水曜（記入なし）

1月29日 木曜（記入なし）

1月30日 金曜（記入なし）

1月31日 土曜（記入なし）

2月1日 日曜（記入なし）

2月2日 月曜（記入なし）

2月3日 火曜（記入なし）

- 34 鉛筆にて「ペルピニャン」と書き添えられている。兎島本人の筆跡ではない。
35 鉛筆にて二重取り消し線が引かれ、右下に「44日」と書き添えられている。兎島本人の筆跡ではない。
36 ○印から○印へ文章が続くという意。
37 以上2行は縦書きとなっている。

2月4日 水曜 (記入なし)

2月5日 木曜 (記入なし)

2月6日 金曜

【本文欄】

暁頃より腹痛を催し醒む痛み軽からず
便所に三度通たれと便通さほとなし
朝のシヨコラ(ココア)を喫して後再び便通を催す、
氣持あしく頭重し、
終日ホヘミアンの絵を描く空腹を堪38
へて夕方に至り少し食をとる、
夜に来るも快よからず終日懷爐を
用ゆ、夕食に外出する事さへ退氣なり
遂に出でず
夕方より夜にかけて手紙数通を
かく、

発信青の39、久保田、木村、都志、40 41

2月7日 土曜

【欄外左上】

快晴

【本文欄】

朝、gitanos(ロマ、ジプシー)の絵をつゝく昼前松永氏42
来室右眼に何か飛込て痛む事限りなしと
て小生眼瞼をかへして改むるも何物もなし
其後全く痛止たりとて昼食後二人連
立ルーブル(ルーヴル美術館)を觀る、伊太利初期ル
ネサンス、西班、佛蘭西初期及び
カーモンド(スペイン)のコレクションの各室先月
末頃より開館さる、未だ全般の画堂43
の開くる迄には尚かなりの時日を要
する事ならむ、夕方、帰宿、留守中、日本
より来佛のKawaguchi氏44来訪夜宿を訪問す、

2月8日 日曜

【欄外左上】

快晴

【本文欄】

Kawaguchi氏、朝来訪、青山君45の宿を
訪る不在、中川氏46の宿を訪れ昼食

- 38 前掲注21参照。パリに戻って後、サクロモンテでの取材をもとに児島油彩画総目録No.429《スペインの丘》の制作を進めているものと考えられる。本作品即ち「ボヘミアン」「Gitanois (Gitanos)」の絵の制作に関する記述は、3月16日まで確認できる。
- 39 青野俊一郎。児島と同郷の親友で、倉敷紡績に勤めていた。
- 40 木村半蔵。2月12日欄参照。1919年に児島が渡欧する際、同じ船に乗船していた人物。児島の住所録に名前がみえ、パリの住所とともに、連絡先として「Agence Inabata & Co」と記されている。
- 41 都志太郎であろう。大原孫三郎が経営する倉敷銀行で取締役をつとめた人物。児島の近所に住んでおり、家族ぐるみの付き合いがあった。
- 42 松永津志馬(まつなが・つしま、1893-1966)。洋画家。
- 43 第一次世界大戦の影響により閉室となっていたギャラリーが再開したことを述べている。
- 44 川口軌外(かわぐち・きがい、1892-1966)であろう。洋画家。
- 45 青山熊治(あおやま・くまじ、1886-1932)。洋画家。
- 46 中川紀元(なかがわ・きげん、1892-1972)か。洋画家。

を共にして帰る

(ロマ、ジプシー)
(gitanos)
午後、gitanos を続く

五時には室内点燈を要する位の
暗となる、数日来気温寒からず
快晴続き春の気持して室内
に在る事の馬鹿らしき感しす、

【欄外下側】

発信長尾⁴⁷、自宅、井川、原、□島⁴⁸

2月9日 月曜

【本文欄】

(ロマ、ジプシー)
(gitanos)
午前中、修作、gitanos
午後、青山岡田⁴⁹、松永、山口の諸
君と同伴して Aman Jean 氏⁵⁰
の画室を訪問す、
夕方カフェと夕食を諸氏と共
に夜半迄再カフェに語る

2月10日 火曜

【本文欄】

終日外出せず修作す、

2月11日 水曜

【欄外右上 (縦書き)】

来電

大原、

来信

加藤⁵¹

【本文欄】

殆と終日外出せず修作
夕方夕食に支那飯に趣く、

2月12日 木曜

【欄外右上 (右から左へ)】

来信小林⁵²

【本文欄】

朝より午後すき迄修製、支那劇と

(ロマ、ジプシー)
(gitanos)
gitanos 昼めしの菜殆となし

(リエージュ通り)
(Rue de Liège)
四時 Rue Liège に木村氏を

訪れ為替の保証人の事を

依頼せん事を相談す、

夕方久し振りに入浴す、

47 額縁店磯谷商店の長尾建吉 (ながお・けんきち、1860-1938)、またはその息子長尾一平 (ながお・いつべい、1886-1978)。4月27日の記述から、この頃額縁見本に関して一平とのやりとりがあったことが確認できるため、一平の可能性が高いと考えられる。

48 原澄治 (はら・すみじ、1878-1968) であろう。大原孫三郎の右腕として倉敷紡績などで活躍。のち、倉敷町長。社会事業も多く手がけた。

49 岡田毅 (おかだ・みのる) か。洋画家。

50 エドモン=フランソワ・アマン=ジャン (Edmond-François Aman-Jean, 1858-1936)。フランスの洋画家。児島と親交が深く、児島に制作上の助言を与えたほか、大原と児島によるフランス絵画収集に協力した。

51 御木本真珠の加藤虎之助。1919年に児島が渡欧する際、同じ船に乗船していた。

52 小林寿美太 (こばやし・すみた)。児島と同郷の友人。大阪で菓子店を営んでいた。

一ヶ月振以上なり、
(クローズリー・デ・リラ)
(Café Lilas)⁵³
夜 Café Lira の會合に夜
を深して帰る

2月13日 金曜

【欄外右上（縦書き）】

発信
大原、加藤、

【欄外左上（縦書き）】

来信
久保田、
小林
遠山⁵⁴

【本文欄】

朝より支那劇⁵⁵の修製をつゝくモデル
なしにて随分長い間改修をつゝけたる
ものなりこれも一つの経験となす
べきか冠の女の顔を少し描き改め
マ マ (ロマ、ジプシー)
てて見た、午後Gitanoisの五十
(カンヴァス)
号のキャンパス先日より只かきつゝけた
のみにて全体の調子とゝのわす、夕方
迄少しつゝ筆を加へた、
夕方、遠山君を訪れ佐々木氏を訪ふ
遠山君は兩三日前アメリカより来佛、
美術学校出身にて巴里に留学の目的なり

2月14日 土曜

【欄外左側（縦書き）】

発信、太田、⁵⁷ 齊藤、⁵⁸

2月15日 日曜（記入なし）

2月16日 月曜（記入なし）

2月17日 火曜（記入なし）

2月18日 水曜

【欄外左側（縦書き）】

発信
書留大原柿原へ手紙着次第学資
(アマン=ジャン)
アマンジャン作品代送金を
申送る

- 53 モンパルナスのカフェ、クローズリー・デ・リラ (La Closerie des Lilas) で毎週木曜日に日本人の会合が開かれていた。児島は頻繁にこの会合に参加している。
- 54 遠山五郎 (とおやま・ごろう、1888-1928)。洋画家。
- 55 「支那劇」は次の作品を指している。児島油彩画総目録No.349《小放牛》196.2×113.8cm、大原芸術財団 大原美術館蔵 (所蔵品登録No.4127)
本作は、1918年の中国旅行での取材をもとに日本で制作を進め、1919年の渡欧にあたってパリに持参された。パリ到着後も修正が続けられており、国民美術協会展出品前の3月5日まで本作品の修正についての記述が確認できる。
- 56 佐々木信造か。児島の住所録に名前がみえ、住所はパリおよび大阪となっている。
- 57 太田喜二郎 (おおた・きじろう、1883-1951)。洋画家。児島と共にゲントの王立美術アカデミーで学んだ。
- 58 斎藤豊作 (さいとう・とよさく、1880-1951)。洋画家。児島の東京美術学校時代の友人。

2月19日 木曜

【欄外上側】

ラモレル⁵⁹へ注文、サロン出品作品枠寸法

1.m14×2.m ____

1.m36×2.m ____

{ 1.m36×2.m3
1.m36×2.m3

【本文欄】

午前ラモレルへ^(額縁)枠、椽(出品画の分)注文、

午後加藤氏来訪、両三時して同道、

加藤氏の宿に趣き今夕マルセー

ユに発せらるべく、リヨン停車場

に送る、八時二十五分発、

帰途^(クローズリー・デ・リラ)カッフエリラの會合に寄り

夜半帰寓、

非常に温暖にして外套を要せ

さる位なり、

2月20日 金曜

【本文欄】

午前中修作、

2月21日 土曜

【欄外右上(縦書き)】

来信、

小笠原⁶⁰

2月22日 日曜

【欄外右上】

曇

【本文欄】

午前中小^(放)牧牛を修作、

午後松永氏と連立ちて散歩

かたゝ^(鏡売場?)Hotel V□□dに下見
* (hôtel de ventes?)

に出かく買て見たきものなし、

夜早く帰りて又久し振りに

松永と合奏を試む、

【欄外左側(縦書き)】

来信、吉田⁶¹、矩一⁶²、乙骨⁶³

- 59 ラモレル (A. Lamorelle)。パリの画材店。作品輸送や出品の手配なども行っていた。
- 60 小笠原長丞(おがさわら・ながまさ、1891-1968)。子爵。1919年に見島が渡欧する際、同じ船に乗船していた。
- 61 吉田苞(よしだ・しげる、1883-1953)。洋画家。現岡山市出身。見島と最も親交の深い画家のひとり。
- 62 見島矩一(こじま・くいち、1896-1934)。見島虎次郎の甥。彫刻家。
- 63 乙骨安昌であろう。見島の住所録に名前があり、住所は岡山国富五百羅漢となっている。「五百羅漢」は国富山少林寺(岡山市)を指すと考えられる。

2月23日 木曜

【欄外右上（縦書き）】

来信

加藤、切山⁶⁴

藤島、⁶⁵

近藤

西村⁶⁶

「黒田、満谷⁶⁷ ⁶⁸

より為替来る、

【欄外左上（縦書き）】

晴

発信

小笠原

【本文欄】

午前新聞来る通読、

昼過迄、小放牛の画面に金箔を置く

昨夜深く就眠、今朝□に郵便

夫に醒せられ睡気強し

午後、サロンに出品すべき四点に

記名を終る

夕方支那食に趣き直に帰寓、

夜深く迄日本への返信をかく

2月24日 火曜

【欄外右上（縦書き）】

来信

柳井⁶⁹

【欄外右上】

快晴

【本文欄】

朝十時頃、岡田君来訪

昼食後、ふらゝ Port Royale の

通を歩て、Gar de Lyon に向た、
* (ボール=ロワイヤル)
(リヨン 駅)
(Gare de Lyon)

加藤君、午後三時帰着の出迎

である、汽車一時間ほど遅延

加藤君と Grand Hotel に趣て

小憩、支那飯へ夕食を共にし

た 午後夜十時頃帰寓、

両三日又再び寒さが増して

来た様であつたか今日は又

非常に暖かくなつて来た

【欄外左側（縦書き）】

64 切山篤太郎か。児島の友人。岡山県矢掛町出身。朝鮮総督府で判事をつとめていた。

65 藤島武二（ふじしま・たけじ、1867-1943）。洋画家。児島の東京美術学校時代の恩師。

66 西村磯右衛門であろう。江商株式会社の重役で、1919年に児島が渡欧する際、同じ船に乗船していた。

67 黒田清輝（くろだ・せいき、1866-1924）。洋画家。児島の東京美術学校時代の恩師。

68 満谷国四郎（みつたに・くにしろ、1874-1936）。洋画家。現岡山県総社市出身。

69 柳井新太郎。児島と同郷の友人で、郷里成羽で呉服商を営んでいた。

発信、⁷⁰妻、黒田、満谷、近藤、藤島
切山、吉田

2月25日 水曜

【欄外右上（縦書き）】

来信
遠藤、
青の、

【欄外左上】

快晴
夕方より雨

【本文欄】

サロン出品の小放牛の修作も一両日前
にて全く終り、今日は加藤君商用にて
別に案内の労を要せずとの事にて
朝より快晴なるまゝ□□外出した
散髪をして古道具屋へ一式軒
廻た ^(エジプト) エジプトの小さなものを
数点買ったか其中に目如何にして
も模造品らしいものかあつたので
主人へ返した、
夜早く帰つた少し頭か痛む

2月26日 木曜

【欄外右上】

快晴

【本文欄】

午前、^(マラガ) Malagaの写生を
二十五号に描くべく始筆す、
午後加藤氏来寓
昼食後、ルクサンブール公
園しより其附近の装身具店
を廻り、^(シャトレ座) ^(Châtelet) て夜 Chatellet
を観る ^(マリココ) ^(Malikoko) 71 mari Koko
^(アルザス) アルザス目に於ける佛軍
□通の幕は非常に大規
模のものなり

【欄外左側（縦書き）】

◎発信小林、矩一
(小林君に矩一へ学資送金の事
を頼む

70 児島友(こじま・とも、1890-1971)。児島虎次郎の妻、岡山孤児院の創立者石井十次の娘。

71 アンドレ・ムエジ=エオン(André Mouëzy-Éon, 1880-1967) 脚本による喜劇『マリココ、黒人の王(Malikoko, roi nègre)』。

2月27日 金曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前午後 Malaga^{〔マラガ〕}のスケッチを
二十五号に引延して描た、
夕食を松永氏と支那飯に
趣く隣席に支那人数名ありて
流暢なる日本語にて軽[?]くの
會話を試み終に朝鮮問題
の及[?]はす、彼れには只□□
なる理解のみありてアメリカの野心[?]
などにつきては少しの注意も拂ひ居
らざる如し、

2月28日 土曜

【欄外右上】

快晴

【本文欄】

午前中、Malaga^{〔マラガ〕}の絵を描く
午後加藤氏の宿を訪ひ
同道して magasins du Louvre<sup>〔ルーヴル百貨店〕
(Grands Magasins du Louvre)</sup>
及 Bon marche^{〔ボン・マルシェ百貨店〕}を一覧
す、
夜支那□に加藤氏及、
目加藤氏^{ママ}に取引先の人と
會食す、
夜手紙をかく

2月29日 日曜

【欄外右上（縦書き）】

発信、

妻、

乙骨

青の、

【欄外右上（横書き）】

快晴

【本文欄】

朝加藤氏を訪問、
午後 Salon Independent<sup>〔アン・デ・バナン展〕
(Salon des indépendants)</sup>
を觀て Effert 塔<sup>〔エッフェル塔〕
(Eiffel)</sup>に
昇る、夕方 Toracadero<sup>〔トロカデロ〕
(Trocadero)</sup>

を廻り、日本倶楽部に
夕食す、長岡外史⁷²などあ
り、

【2月備忘欄外左側（縦書き）】

来信、直平⁷³、矩一、

3月1日 月曜

【欄外右上】

快晴

【本文欄】

午前中 Malaga^(マラガ)を描く、
午後松永氏と^{(marchand}
□ Marchand
des Tableaux^商に^{展覧会}を参
観す、
夕食後帰寓、留守中に加
藤君来訪、明日戦場見物
にて不在の由報し置かる、

3月2日 火曜

【欄外右上】

快晴

【本文欄】

午前中 Malaga^{(マラガ) ?}を描く
昼食後、散歩、
夜加藤君を訪問不在

【欄外左側（縦書き）】

来信三橋⁷⁴、岡崎⁷⁵

3月3日 水曜

【欄外右上】

快晴

【欄外左上（縦書き）】

来信
山田⁷⁶穆

【本文欄】

午前速達郵便にて河原君⁷⁷より紹介
されたる大阪、綿花専務の山田氏⁷⁸
来訪の旨報せらる、正午前来訪、
佛国当代作家の作品購画
の希望なれば相当の人撰擇
されたとの事、早速アマンシアン氏^(アマン=ジャン)
の宅を訪れ先つ氏の作品式枚を

- 72 長岡外史(ながおか・がいし、1858-1933)。陸軍軍人。
- 73 児島直平。児島虎次郎の甥、山陽新聞記者。のちに、『児島虎次郎略伝』(児島虎次郎伝記編纂室、1967年)を著した。
- 74 三橋玉見(みはし・たまみ、1882-1939)。大原家の主治医で、大原孫三郎の文化面でのブレンでもあった。
- 75 岡崎常太郎(おかざき・つねたろう、1880-1977)か。現岡山県高梁市出身の教育者・生物学者。学習院教授。児島の住所録に名前がみえ、東京の住所のほかに連絡先として「四谷学習院」と記されている。
- 76 日本綿花副社長の山田穆(やまだ・あつし)か。同日本欄参照。
- 77 河原賀市であろう。倉敷紡績で重役を務めた人物。
- 78 鉛筆書きにて「専」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

求めらる、後氏より紹介を得て
Simon⁷⁹を訪る Simon は直接賣
渡しを断らる、後、Menard⁸⁰を訪れ
忒枚を求めらる
(オペラ座)
(Opéra)
夜加藤氏と Opera に Fhaise を観る

3月4日 木曜

【欄外右上】

快晴

【本文欄】

(グランド・ホテル)
朝 Grand Hotel に加藤氏を訪
問同氏正午12.0の汽車にてロン
(北 駅)
(Gare du Nord)
ドンに帰途につかる、Gard Nord
(ジョルジュ・)
(Georges)
午後山田氏を同道して George
(ブレイ画廊) (ベルネーム画廊?)
Petit) (Bernheim)
Petit 及 Bernehaime に立
(ドクトル・)
(rue)
寄り、Blanche (rue
(フランシユ通り)
du Docteur Blanche)
docteur Blanche) の閉店を
(オートウイユ)
(Auteuil)
Autouil に訪る
作品多数あれと肖像画のみにし
て山田氏の意に適せず
花の静物のもの一枚を
求めらる、夕方 Simon の高弟の
某氏の所に立寄るも購ふほどのものなし
(クロズリー・デ・リラ)
(Café Lilas)
夜、Café Lira に會す、

3月5日 金曜

【欄外右上】

快晴

【本文欄】

一度修製を終りたるべき小放牛
の作品又今朝加筆す、
(ルーヴル美術館)
午後松永氏とルーブルと
(装飾美術館)
(Musée des Arts Décoratifs)
Musée art decotative を観
(ルーヴル美術館)
る Louvre は英国及佛十九
世紀の作品の假陳列あり (装飾)
(Musée des Arts Décoratifs) (Salon de)
Musée art decotative には Salon
(芸術家協会展)
la Société des artistes décorateurs)
artiste decorateur 開会さる
夕食後帰宅、夜松永氏と語る、

- 79 リュシアン・シモン (Lucien Simon, 1861-1945)。フランスの画家。
80 エミール＝ルネ・メナール (Émile-René Ménard, 1862-1930)。フランスの画家。

3月6日 土曜

【本文欄】

午前在宅

(ギメ美術館)
(Musée Guimet)

午後Musée Guimeに趣

久しく留守宅より来信なし、
三橋氏より先日中廣子⁸¹流行性
感冒にて高熱なりしも其後全
快したる旨報し来る

あまり手紙来たらねば国元の
事共懸念に堪^ず

【欄外左側（縦書き）】

発信、三橋、自宅

3月7日 日曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

(マラガ)
午前中Malagaの絵を描く

午後、遠山氏来訪、夕方迄

話さる、

四五日前より蟲下しを服用、^(ママ)

し今日下[?]日[?]剤を服す、

夕方一寸外出したるのみにて

籠屋す、

3月8日 月曜

【欄外右上】

晴曇

【本文欄】

朝中川氏来訪

伊太利ナポリにて重患なりし

廣瀬勝平⁸²氏薬石効なく

終に去る一日逝去されたる

報都鳥⁸³氏より来信に旨

傳へらる、同氏は昨年三月来

巴殆と一ヶ年を過し伊太利

旅行を終へられて早々帰朝の

途に就かるべかりしに終に不帰

の客となる故国の遺族達の心

情察するに堪へざるものあり

(アマンシヤン)
午後アマンシヤン氏を訪問す、

【欄外左側（縦書き）】

- 81 児島（のち木村）廣子。児島虎次郎・友の第二子。1916年生まれ。
- 82 広瀬勝平（ひろせ・かつべい、1877-1920）。洋画家。
- 83 都鳥英喜（ととり・えいき、1873-1943）。洋画家。

来信加藤、太田、長尾、

3月9日 火曜

【欄外右上】

半晴

【本文欄】

朝ラモレルに趣く、
昨日よりの寒さ今日もなか^{*}
強し、
午後、在宅
夕方、夕食に出て、帰る、
夜松永氏来談
夜半一時過青山君来り
宿に戸を明け呉れされはとて
一泊を乞はる、

【欄外左側（縦書き）】

発加藤

3月10日 水曜

【欄外右上】

曇

【本文欄】

朝、ラモレルよりサロン出品絵
を受取に来る
〔朝顔〕
Belle-de-matin a }
Belle-de-matin b } 〔二連画〕
〔秋〕 dyptique
Automne
〔小放牛〕〔明時代の歌劇〕⁸⁴
Chohannue (Opera dynastie Ming)
〔ジョルジュ・プティ画廊〕〔Société〕
〔Société〕
午後シヨザプチに Societe
nationale des beaux-arts 国民美術協会
nationale)
Nationaleの幹部達の展覧會
を觀に行く
夕食後、松広瀬哲士⁸⁵氏の
所により夜半迄話す、

【欄外左側】

発信柳井、長尾[?]

3月11日 木曜

【欄外右上】

晴

【欄外上側】

〔四旬節の中日〕
ミカレム

【本文欄】

- 84 この年、児島が国民美術協会展に出品した作品は、次の4点と考えられる。
児島油彩画録目録No.301《朝顔》大原芸術財団 大原美術館蔵（所蔵品登録No.4050）、同目録No.366《朝顔》同所蔵（同登録No.4111）、同目録No.367《朝顔》同所蔵（同登録No.4112）のうちいずれか2点
同目録No.349《小放牛》同所蔵（同登録No.4127）
同目録No.365《秋》ポンピドゥー・センター/パリ国立近代美術館蔵
児島の国民美術協会展ほかサロンへの出品については次に詳しい。
サラ・デュルト「児島虎次郎のサロン出品について」『生誕130年 児島虎次郎—あなたを知りたい』図録、大原美術館、2011年、pp. 160-170
- 85 広瀬哲士（ひろせ・てつし、1883-1952）。フランス文学者。岡山県津山市出身。

午前在宅

午後松永氏とMusée ~~廻~~

~~母をなす~~ Musée Rodinに趣き、

(クロズリー・デ・リラ)

(Café Lilas)

夜cafe Liraの會合に趣く

(Bénédite)⁸⁶

Mr Beneditを訪れロダン⁸⁷

作品の價格の問合せをなす、

(山田氏のた目め)

(グラン・ブールヴァール)

夕方迄Grand Brdにミカレム

の景氣を觀る

【欄外左側 (縦書き)】

来、須田⁸⁸

発、須田

3月12日 金曜

【欄外右上】

曇

【本文欄】

数日前迄の暖氣急に失して

寒さ加る

(ロマ、ジプシー)

午前中Gitanoisを修作、

(競売場)

午後Hotel de Vendに支那及

日本品の入札を見物に行く

夕方松永氏と散歩して

(映画)

夜活動を觀る

夕方ラモレルのアトリエにてサロン

出品の自作四枚の額^(額縁)椽を見る

3月13日 土曜

【欄外右上】

半晴

【本文欄】

製作はとても出来ぬ、

旅行したいか何たか種々の事て

巴里に滞在して居らぬと心済ぬ

様な氣かする

日本から多数の人か来るので此等

のために色々の用事が生するのである

昼前モンマルトル迄遊ひに出かけ

(ルーヴル美術館)

た午後ルーブルに覗き夕方帰宅

日本への手紙数通をかく

夜松永氏来談、

86 レオンス・ベネディット (Léonce Bénédite, 1859-1925)。フランスの美術史家。リュクサンブール美術館館長、ロダン美術館館長をつとめた。

87 オーギュスト・ロダン (Auguste Rodin, 1840-1917)。フランスの彫刻家。

88 須田国太郎 (すだ・くにたろう, 1891-1961)。洋画家。

3月14日 日曜

【欄外右上】

午後雨

【本文欄】

午前午後室内のとりかたつけを

やつた

昼食に外出少し雨は止た様

か降そふてある、日曜て人

出か多くて散歩するのも面白く

ない

午後降雨となる、

◎太田君から絵具の事を依頼し来る、

自宅より一向返信なし

病人のあるにあらずやと懸念

に堪す

(ロマ、ジプシー)
(gitanos)

夕方 Gitanos の絵を加筆す

【欄外左側（縦書き）】

来太田

発兄上、妻、遠藤、金山、藤⁸⁹ ⁹⁰ ⁹¹

3月15日 月曜

【欄外右上】

曇

【本文欄】

(ロマ、ジプシー)
(gitanos)
午後在室、Gitanos を描く

(リュクサンブール公園)
午後珍ルクサンブールを散歩して

(アカデミー)
珍らしくアカデミにクロッキー

に寄る

3月16日 火曜

【欄外右上】

曇

【本文欄】

(ロマ、ジプシー)
(gitanos)
午前中 Gitanos を修作、

(クリュニー美術館)
午後 Musée Cluny を観る、

夕方少し散歩して寄寓、

一昨日頃より少し風邪の氣

味にて喉悪し、

夜久し振に一人 (ヴァイオリン)
Violon を奏す

【欄外左側（縦書き）】

来信、須田

- 89 兄島の兄兄島徳太郎（1874-1947）のこと。兄島の実家は徳太郎が継いだ。
- 90 金山平三（かなやま・へいぞう、1883-1964）であろう。洋画家。
- 91 藤彦衛（ふじ・ひこえ、1897-1968）か。洋画家。現岡山県高梁市出身。兄島の住所録に名前がみえる。

3月17日 水曜

【本文欄】

(クリュニー美術館)
(Musée Cluny)
午前Musée Clynieに皿絵の
模写に行く
午後クロッキにアカデミーに
過す、
国元の誰れからも一向音信かない
郵便の遅延なる哉 或は国元
に何か異変かありて発信を何れ
も見合せ居られるや音信のなきは
実に心細くて心配のものである
夜数多の日本への書信を書く

【欄外左側（縦書き）】

来信ラモレル

3月18日 木曜

【欄外右上】

曇

【本文欄】

(クリュニー美術館)
午前クリニーに皿絵の模写
(ルーヴル美術館)
午後松永氏とルーブル
(クロズリー・テリラ)
(Café Lila)
夜Café Lilaの會合に出席す
数日前よりの風邪かすかり
抜けぬ様である
少し暖かくなったら郊外にて
も出かけて写生か試み度、
或は田舎へ旅行して見た
くもある、

【欄外左側（縦書き）】

発、妻、柿原、林、石井、青の、
上田、小林

3月19日 金曜

【欄外右上】

半晴

【本文欄】

(クリュニー美術館)
(Musée Cluny)
朝十時Musée Clynieに趣く
ペルシャ皿の模写
昼岡田君の所による
午後帰宅、模写絵を修正、
夕方前ラモレルにより
(クロッキー)
(croquis) 95
AcademieにCroquis

- 92 林源十郎〔十一代源十郎、甫蔵〕（はやし・げんじゅうろう〔ほぞう〕、1865-1935）であろう。林源十郎は薬種商を営む倉敷の実業家・社会事業家。その息子桂二郎は倉敷紡績に勤め、1922-23年に実施された児島と大原による西洋美術の収集・公開活動に深く関わった。1921年の児島の日記では、桂二郎やその兄彪太郎を指す場合、「林桂二郎」「林桂」「林彪」などと記して個人を区別しており、このことから、1920年の日記に「林」姓のみが記される場合は、十一代源十郎（甫蔵）を指す可能性が高いと考えられる。
- 93 児島の妻友の実家である石井家のことであろう。
- 94 上田喜平か。児島の同郷の友人。児島の住所録に名前があり、兵庫県武庫川の住所のほか、連絡先として中外貿易神戸支店、ニューヨークの「KONGO SHOKWAI」が記されている。
- 95 鉛筆にて「クロッキー」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

に行く夕方散歩して帰る
夜バイオリンを少し練習
した

【欄外左側】

(アマン=ジャン)
来信アマンジャン

3月20日 土曜

【欄外右上】

快晴

【本文欄】

(フォントネー)⁹⁶
午後松永氏と Fontenay

に写生に趣く

(スケッチ)
スケツ忒枚して帰る

夕食後シネマ

3月21日 日曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

(競売
hôtel des
場 ?)
ventes?)
昼前モンマルトル迄出かく Hotel

Vendに立寄るも閉門

(オテル・デ・グランゾム)
Hotel des Grands Hommes

により、目京都羽田氏の在宿

の否やを尋ぬ、ロンドン直行

されたる由、後廣瀬氏の所にて

聞く、夕方迄同氏の所にて話

し夕方ルクサンプルを散

(リュクサンプル公園)
歩して帰る、

3月22日 月曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

(フォントネー)
早く昼食を終へて Fontenay

に写生に出づ

(都会)
電車直通にて都よし

終点の附近の梨花の庭を描

く夕方五時過迄にて終る

帰宅後少し散して夕食後

帰宅す、

【欄外左側 (縦書き)】

98
来中原

- 96 3月26日欄に、「フォントネー」からパリに向かう途中シャティヨンに立ち寄ったことが書かれている。このことから、この時期児島が頻繁に訪れている「フォントネー」とは、フォントネー=オウ=ローズのことであると推測できる。
- 97 羽田亨 (はねだ・とおる、1882-1955)。東洋史学者。
- 98 中原實 (なかほら・みのる、1893-1990)。洋画家、歯科医師。

3月23日 火曜

【欄外右上】

快晴

【本文欄】

午前ラモレルに趣く、
昼食を正午に済してFontenay^(フォントネー)
に写生に出かく
昨日描きたる直傍の所にて
梨花の園を描く
夕方迄日光輝絶へず^ず五時
半写生を終り帰宅、夕方散歩
夜支那飯

【欄外左側】

発妻、

3月24日 水曜

【欄外右上】

曇、

【本文欄】

午前十一時写生にFontenay^(フォントネー)
に出かく
昼食もせず^ず午後四時半迄写
生をつゝく、二十号、
五時過帰宅、飯を炊きて食事す、
夕方、Lamorelle^{(ラモレル(画材店)99)}にトワルを^(画布)
求に行き松永氏と散歩
夕食を共にして九時過帰る、
日本より沢山の書信来る、
妻より広子、発熱にて苦心せしと
貯金絶へたる由申来る、

【欄外左側】

来信、妻、柿原、石井、青の、日本倶楽部
^(武内、矩一)
武内矩一¹⁰⁰

3月25日 木曜

【本文欄】

昼前在宅、
午後Fontenay^(フォントネー)に趣く
写生の場所見出せず^ず、暫時
附近を歩む、
先日中の近くの場所にて
梨杏の園を描き始む

- 99 鉛筆書きにて「ラモレル」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
- 100 武内潔真(たけうち・きよみ、1888-1981)であろう。倉敷紡績で電気技師などを務め、のちに大原美術館初代館長となった。

急雨来りてとても写生
を終りそふになし
只デッサンのみ試みて
帰途につく

【欄外左側】

発信妻

3月26日 金曜

【本文欄】

午前九時過^(フォントネー)Fontenay
に写生に出かく
昨日描きかけし写生をつ
く曇天の凶なるもよく太陽
輝き時々雲を散のみ[?]
午後二時頃写生を終す
持参の味パンを食す、
四時前^(シャティヨン)Chatillonの附近の丘
より巴里を望みて写生を
始む終り頃小雨降る
七時前写生を終て巴里に
帰る今日一日よく勤めたり

【欄外左側】

太田君より為替^(フラン)千法¹⁰¹
藤島先生より金百法来着

3月27日 土曜

【本文欄】

朝ラモレルに趣き太田君より
依頼されし油絵具の
注文をなす、^{(リュクサンブール}
^{?) (Musée}
午後松永氏と Musee
^{美術館)}
Luxanbeulに出かく
夕食後直に帰宅、
昨日少し無理をして写生
をつけたるためにや身体
腰部少し痛むを覚ゆ

3月28日 日曜

【本文欄】

午前中在宅^(フォントネー)Fontenayの写生な
と修作す、
^(ギメ美術館)
^(Musée Guimet)
午後Musée Guiméを観

101 日記巻末の4月出納欄欄外に「太田君より千法絵具代来る別途／藤島先生より百法マンシヤン作品送料来る、」と記されている。また、前年12月8日の日記には、アマン＝ジャンが藤島・児島に自作を贈っていること、同月10日の日記にはその作品を藤島宛に送付することについて、児島がラモレルに相談していることが記されている。これらのことから、「マンシヤン作品」は「アマン＝ジャン作品」の誤記であり、藤島から送金された100フランは、アマン＝ジャン作品の輸送料であると推測できる。

る、夕方散歩を終へルグ^(リュク)
サンブール公園^(サンブール公園)
サブルに一時間ほど憩ふ^{*}
暮色清雅にして藪しの間
に黒き梢は新緑の若葉に
化し終れり
夕食後帰寓

【欄外左側（縦書き）】

発信太田、鈴木、山下、武内¹⁰²
石井来長谷川¹⁰³

3月29日 月曜

【本文欄】

午前絵具箱を携へてルグ^(リュク)
サンブール公園^(サンブール公園)
サンブールに散歩す、
写生せず憩ふ事一時間帰^ず
宅昼食、
午後モデル来る^(モデル) 十号にクロツ
キーを始む
ホテルは先日アカデミーにて
雇ひ置たるもの、
然し来て見ればさほど美
しくもなし、

【欄外左側（縦書き）】

発信石井、矩一、大原、林
長谷川

3月30日 火曜

【本文欄】

午前チュリップの花を写生す、
卓上に辰砂の壺に挿入す、
このチュリップはオルタンシヤ^(Hortensia アジサイ?)
との合種らしくローズにして
花瓣八重にて花輪大なり、
香もオルタンシヤの如し
午後モデル来る^(モデル) 五十号に写
生を始む
立ちて読書しつつある所、
折角描きたれとデッサンに
不慥の所藪からず、^ず 104
夕食外出、

【欄外左側（縦書き）】

発信原、
来信三宅

- 102 山下新太郎（やました・しんたろう、1881-1966）か。洋画家。児島とは、東京美術学校の同期卒業。
- 103 長谷川潔（はせがわ・きよし、1891-1980）。版画家。
- 104 この日制作にかかったのは、次の作品と考えられる。
児島油彩画総目録No.408《読書》116.7×90.8cm、大原芸術財団 大原美術館蔵（所蔵品登録No.4101）
以降、4月22日までに見られる「チューリップ」「周囲の家具」「五十号」「赤きコルサージュ」「Corsage Rose」などの記述も同作品、またはその関連作である次の作品に関するものと考えられる。
児島油彩画総目録No.409《(婦人像)》45.7×38.0cm、個人蔵

小包にて太田君よりの
菓子来着、

3月31日 水曜

【本文欄】

午前中チューリップを描く
午後(モデル)モデル写生、
夕食外出直に帰宅、

昨日小包にて、太田君より菓子
三箱来着
マルセーユ上陸の筈なりし京大
羽田亨氏の来欧に托されしもの
同氏直行ロンドンに向れしためマルセ
ーユルママより郵送されしなり、

【欄外左側（縦書き）】

来信、吉田、金沢¹⁰⁵、矩一、
岡崎、足立¹⁰⁶

4月1日 木曜

【欄外右上】

曇

【本文欄】

午前今朝来着の為替金受取の
ため日佛銀行に趣かんとする
時、都鳥氏来訪、午前中在室
廣瀬氏の永眠の事につき
物語らる、¹⁰⁷
午後(モデル)モデル来る 夕方迄写生
夕食方ラモレルに行き太田君
の絵具代支拂、
夕食後(クロズリー・デリラ)
(Café Lilas) Café Lelaの會合
に趣く、

【欄外（縦書き）】

発金沢
◎来柿原為替五、六〇〇〇来る

4月2日 金曜

【欄外右上】

曇

【本文欄】

午前中、(モデル)モデルの周囲の家具を

- 105 金沢巖であろう。児島と同郷の人物で、東京で薬局を経営。岡山県人会の世話人をしていた。
- 106 足立桂次か。岡山孤児院出身者で、中国天津で薬店および雑貨店を経営していた。
- 107 3月8日欄参照

描く

午後、ホテル写生夕方迄、
夕食に外出して帰る

柳井君より余か忠告し送りたるに
より、四十一日間すてに禁酒
しありと報し来る、

【欄外左側（縦書き）】

来信、柳井、林、
発信、矩一、岡崎、太田、

4月3日 土曜

【欄外右上】

曇

【本文欄】

午前五十号に〔モデル〕ホテルの周囲を
描く午後ホテル写生
一先づ描き終りたるもモデル
の〔デッサン〕何となく不正確
にて今一度描き正すの要あ
り、
夕方外出夕食後帰宅、

【欄外左側（縦書）】

発信大原、

4月4日 日曜

【欄外右上】

雨曇

【本文欄】

午前早起 左耳と頭の左方
少し痛む、
午前中何事もせず吉田君へ
の手紙をかく
吉田君渡佛希望にて其〔準〕隼
備に要する諸注意
午後松永氏とルクサンプー
ル〔リュクサンブール美術館〕のミユゼを観る数日前
より全部開館されたる由、
大分新旧の差換られて陳列
されたるものあり、¹⁰⁸
夕方散歩、夕食後帰寓、

【欄外左側（縦書き）】

発吉田、

108 第一次世界大戦の影響により閉室となっていたギャラリーが再開室したことに
ついて述べたものと思われる。

4月5日 月曜

【欄外右上】

曇

【本文欄】

午前室内の取かたづけをなす、
午後、小倉 青山、遠山氏など
来訪、
夕食外出

【欄外左側（縦書き）】

発信柿原、原、

4月6日 火曜

【欄外右上】

快晴

【本文欄】

朝日佛銀行に日本よりの為替金の受取
に趣く5,6000
午後^{〔アマンシヤン〕}アマンシヤン氏を訪問不在、
久し振りに古道具屋を廻る、
書籍店にてペルシヤ美術[□]及、
^{〔シャヴァンヌ〕}109
シヤバンヌの支那彫刻[□]を
購ふ、
留守中、伊、独の旅行中なり
し山田氏来訪さる

【欄外左側（縦書き）】

来信、金沢、加藤、中原

4月7日 水曜

【欄外右上】

快晴

【本文欄～翌日欄外右上】

^{〔ホテル・ラ・ペルーズ〕}
昨夜Hotel La Perouseの山田
氏に今朝訪問の事を約し居りたる
ため午前九時過訪問、
山田氏は明朝帰朝の途に発せらるゝ
由、^{〔アマンシヤン〕}
アマンシヤン氏へ作品代金支拂
れ尚、ロダンの作品購入の事を
約せらる、午後アマンシヤン氏を訪
ひ大原よりの作品購入金1,2000
^{〔フラン〕}
法を渡す、
アマンシヤン氏に導かれて^{〔グラン・パレー〕}
グランパレー¹¹⁰
に趣く、殆と陳列済なり 夕方より廣瀬氏

109 エドゥアール・シャヴァンヌ (Édouard Chavannes, 1865-1918)。フランスの東洋史学者。

110 国民美術協会展の展示のことを述べている。同展は同年4月14日よりグラン・パレーで開催された。

4月8日 木曜

【欄外左上】

晴

【本文欄】

午前外出書籍店に趣く、
午後^(シャティヨン)Chalillonに写生具を
携へて出かけたれと少し眠
氣催して何となく氣進ます
二三時間散歩して帰る、
郊外は今桜花の満開
にて菜種も花盛にて美しき
事限りなし

夕方帰宅、壺の修繕をなす、
夜^(クローズリー・デ・リラ)カッフェLilasに趣くも誰も
會集なし

【欄外左側（縦書き）】

来信、羽田亨堀久
^(アマン＝ジャン)
アマンジャン

4月9日 金曜

【欄外右上】

雨

【本文欄】

午前中手紙を書く、
午後、堀久（縣人）をHôtel
に訪ふ
夕方帰宅

【欄外左側（縦書き）】

発信、加藤、山中、木村、羽田

4月10日 土曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前中在室、
午後^(シャティヨン)Chatillonに写生に趣く丘上
桜花の咲き満ちて芳香の
優れたるものあり、
巴里を望て一枚写生を終る、

夕方帰宅
夕食に出で活動〔映画〕を観る
【欄外左側（縦書き）】
来鈴木、三宅、

4月11日 日曜

【本文欄】
午前廣瀬氏を訪問不在、
靴を求む、
午後五十号の絵の描き足
らぬ所を画き続く、
【欄外左側（縦書き）】
発信足立、金沢、柳井、三宅
林、自宅、日妻、兄

4月12日 月曜

【本文欄】
午前在室、
午後モテル〔モデル〕来る、
クローキー〔クローキー〕を僅か試みし
のみにてモテル帰る、
夕方外出散歩
【欄外左側（縦書き）】
発三宅、須田、

4月13日 火曜

【本文欄】
Mlle Poulette
〔セバストポール通り〕
〔Bd Sébastopol〕
94, Bd Sébastopol,
〔グラン・パレ〕
午前Grand Palaisに
〔内覧会〕
〔vernissage〕¹¹²
Vernis日ageに趣く
本年は陳列作尠少にて非
常に静かなり、余の作三点は
〔階〕
階段つき当りの大なる室の
一隅によき光線に對して陳列
されたり、他の支那〔女優〕優の作は隣
室に置れたり、クロー113ース〔クラウス〕先生114に場
内にて面會す、午後モテル〔モデル〕

4月14日 水曜

【欄外右上】
晴

- 112 国民美術協会展の内覧会。前掲注110参照。
113 児島の「支那（女）優の作」は《小放牛》を指す。前掲注55および84参照。
114 エミール・クラウス（Emile Claus, 1849-1924）。ベルギーの画家。児島は第一次滞欧時、クラウスに制作の助言を受けていた。

【本文欄】

朝少し寒氣を覚ゆ
絵具箱を携へてルクサンブー
ル公園)に写生に出かけ寒冷にて
(風邪) (美術館)
風を引そうふなりミュージゼに入る
(モデル)
午後モデル来り夕方迄描く、
岡田君、松永君来室九時過
迄談合す、

【欄外左側 (縦書き)】

発鈴木、三宅
来小野田¹¹⁵、疋田¹¹⁶、
Duthu¹¹⁷

4月15日 木曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前外出、
(モデル)
午後モデル写生、
(ルクサンブール公園)
夕方ルクサンブルに写生
に趣く、
(クローズリー・デ・リラ)
夜 liras に會合、

【欄外左側 (縦書き)】

来信 来信鈴木

4月16日 金曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

(グラン・パレ)
午前クランパレーにて Claus 氏
と會遇の事先日約しありしたため
早朝出かく、Claus 氏に會し
たるに急に帰国の事となりたれば、
今日面會出来ずと思ひ一昨日
発信して置きたりと
(モデル)
午後モデル写生、
何か少し大なものを描て
(クローキー)
見たくクローキー数枚を
試む

【欄外左側 (縦書き)】

(クラウス)¹¹⁸
来信クローズ、平塚、廣瀬、羽田、
発信、疋田、

- 115 小野田鉄弥 (おのだ・てつや、1864-1948) か。児島の岳父石井十次とともに岡山孤児院の運営にあたった人物。
- 116 疋田直太郎であろう。児島の従兄で医師。岡山県高梁市で眼科医院を営んだのち九州帝国大学医学部助教授。その後、福岡市で開業した。
- 117 ローラン・デュトゥ (Laurent Duthu, 1865-1932)。パリ外国宣教会の宣教師として来日し、岡山ほか西日本で活動。児島はデュトゥのもとでフランス語を学んでいた。
- 118 平塚英吉 (ひらつか・えいきち、1888-1984) であろう。農学・蚕糸学者。1919年に児島が渡欧する際、同じ船に乗船していた。

4月17日 土曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

朝絵具屋に趣く、

午後(モデル)モテル写生

○夕方アマンジャン氏来訪、サロン出

品中の同氏の作品は大原氏の購入の

ものなるに他に懇望?の人あれば他の

ものと変換し呉れとの依頼、承諾す

夕方シモン氏の宅を訪ふ、

サロン出品評に関する新聞切抜数

種、Le Lynx 及、

Argus de la Presse¹¹⁹

より送付し来る、

4月18日 日曜

【曇雨】

曇雨

【本文欄】

午前中殆ど何事もせず消過

昼前少し五十号の先般中描

きしものを修製す、壁の色を暗

く更めた、大分全体の調和

を得る様になりかけた

午後松永氏と Parc Monceau^(モンソー公園)

の傍の musée^(美術館)120 に出かけるか

尚閉館中であつた

方々散歩して夕方帰宅した

夜バイオリンを試奏

天候不定この頃雨多し、

4月19日 木曜

【欄外右上】

晴

【欄外上側】

△

【本文欄～翌日欄外右側】

先日アマンジャン氏より今日サロンの會

場に大統領デシヤネル氏か1□□□ glation^{121 (開會式?) (inauguration?)}

に来場さるべければ来れよとの事

なりしたため午前同会場に趣く余はバル

119 「Le Lynx」「L'Argus de la Presse」ともに新聞切り抜きサービスの会社。

120 セルヌスキ美術館か。

121 ポール・デシヤネル (Paul Deschanel, 1855-1922)。第10代フランス大統領。

トロメ¹²²氏に面會して御無沙汰を謝せん
ものと出かけしか余はわさと、一行
の十時頃入場せしを避けて他室に在
りしに^(フランドラン)_(Flandrin)¹²³の室に於て一行
と會しアマンジャン氏によりデシヤネル氏に紹
介され握手を求められたり氏に余の
作を賞賛されて^(derrière) derière votre tableau ^(J'aime) J'aim une ^(violette) petite violet
と語られたる様聞へたり
午後、^(モデル)モテル習作 夕方羽田氏の用事にて書籍店に趣く13,^ノ
^(ジャコブ通り)Rue Jacob

4月20日 火曜

【欄外右上】

晴曇

【本文欄】

午前赤き^(corsage 胸衣)コルサージの五十号

を修作

午後^(モデル)モテルを五十号に写生

を始む

夕方再び羽田氏用事にて

^{(ポール・ゴートナー 東洋学出版) 124}Librairie Paul Geuthner に

趣く

夕食後帰宅書信をかく

晴天なるに吹寒く冷氣

を覚ゆ

【欄外左側 (縦書き)】

来羽田、須田、奥村 La Revue ^(Moderne?) Mo□□□□

発、羽田、妻、青の、三橋 Duthu

4月21日 水曜

【本文欄】

此の頃の天候は晴雨不定日勝

ちてある^(抵)大低毎日少しつゝの降雨

はある然し霽れて日の出る事も

珍らしくない

午前赤い^(胸衣)コルサージの絵を改

めた、

午後^(モデル)モテル来り少し写生した、

夕食かてら外出して夜新聞を読

む、

【欄外左側 (縦書き)】

○発信羽田、小野田、大原

122 ポール＝アルベール・バルトロメ (Paul-Albert Bartholomé, 1848-1928)。フランスの画家・彫刻家。児島が出品していた国民美術協会の会長をつとめていた。

123 ジュール・フランドラン (Jules Flandrin, 1871-1947)。フランスの画家。

124 Librairie orientaliste Paul Geuthner。東洋学専門の出版社・書店。

4月22日 木曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

(バラ色の胴衣)
午前 Corsage rose の修作、
(モデル)
午後 モデル 来る、
掃除日 五時外出
(クローズリー・デ・リラ)
(Café Lilas)
夜 cofé Lilas の集會に趣
く、

【欄外左側 (縦書き)】

来信、小林、直平

4月23日 金曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

昨夜 都鳥氏とサロン同行する事を
約したため朝出かけ午前
中在館、昼食を共にして帰る、
午後モデル写生
夕方散歩外出、

【欄外左側 (縦書き)】

来信妻、直平 一へ写真を
送る

4月24日 土曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前 日佛銀行に金の引出に趣く
(モデル)
午後 モデル 来りて写生
夕方 夕食かたゝ散歩す
此週 描きし五十号は小女
若き女か机の前椅子に
よりて茶碗と tasse を
(カップ)
手にしたる側面より
最始より少し面倒なる構
図なりしたためなかゝにまと
まり難し 背後に花
瓶に花を盛りて写生す¹²⁵

125 次の作品について述べたものと考えられる。
児島油彩画総目録No.532《コーヒーを飲む婦人》116.5×91.0cm、高梁市成羽美術館蔵
4月20日の「午後モデルを五十号に写生を始む」は本作の着手について述べたものであろう。以降、4月28日まで本作の制作に関するものと思われる記述が確認できる。

4月25日 日曜

【欄外右上】

曇

【本文欄】

五十号の昨日描た部分はとうも
何となく変て画面の調和を
害したる事甚たし 心痛に止
ます、午前中、□調の技の不能
なるを嘆す
午後ルーヴル(ルーヴル美術館)に趣く、都山君
と會遇同君の宅に立寄り
作品を一覧す、
支那飯より帰りて松永氏と
直傍(foire 緑日)のホアルの曲馬を観る

4月26日 月曜

【本文欄】

午前外出ペルシャの鉢を求む110
午後モテル(モデル)来る、
顔面の改作に勉む、
光□の調子を強く改めたる
ため何となく之までのものよ
り力強きものとなりこれなれ
は纏たるものと終るべく思はれ
来る
夜近所(foire 緑日)のホアルにて曲馬
Cirque(サーカス)にスケッチに趣く

【欄外左側 (縦書き)】

来信青の、~~本~~生余の餞別として小林
上田、柳井、青の、吉田氏より千法
来る、

4月27日 火曜

【欄外右上】

半晴

【本文欄】

午後製作
夕方外出散歩

長尾一平氏より額縁(額縁)見本
全部到着の由報し来る

【欄外左側（縦書き）】

来信矩一、青の
長尾

4月28日 水曜

【欄外右上】

曇

【本文欄】

午前外出、
午後製作今日は手の辺デッ
サン不慥なりしを改む
曇天にて都合悪し
夕方外出散歩

【欄外左側（縦書き）】

来信小笠原

4月29日 木曜

【欄外右上】

曇

【本文欄】

午前外出、
〔モデル〕
午後モデル写生、
〔クロズリー・デ・リラ〕
夜リラの會合に趣く

【欄外左側（縦書き）】

発信、長尾、小笠原、
平塚

4月30日 金曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前外出書籍店に趣く
〔リュクサンプル公園〕
ルクサンプルの園樹新緑尚
鮮快碧空の下に陽光
明く初夏を偲ふ如し
〔モデル〕
午後モデル写生
夕食外出、

5月1日 土曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

今日の五月一日を期して各方面〔ス〕に同

トライキ
盟罷工を起すべく予報あり
先つ各新聞共休刊にて、電燈
瓦斯は、支給を中止されさりし
も交通機関は(篇)総特志家によ
りて夕方迄運転されたり
午前景況を見るへく外出、(ルーヴル美術館)Louvre
に至るも閉館せらる、
午後(モデル)モテル写生、
八号に顔を描く

5月2日 日曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

(フランス芸術家協会展)
(Salon des artistes français)
午前Salon Artists Francais
を観る、殆と平年の如し、出品数
もあり巨作も尠からず
(国民美術協会)
(Société nationale des beaux-arts)
Société Nationaleに寄り日本
倶楽部の昼食、
(裝飾美術館)
(Musée des Arts Décoratifs)
Musée art Decorativeに手
(チェコスロバキア) (民衆美術)
Tchéco-Slovaqueのart
populaireの展覧會を観る、
家具服装に非常に趣味
あるもの多し、
夕方より雷雨あり、

5月3日 月曜

【欄外右上】

曇

【本文欄】

(リュクサンブール公園)
午前外出ルクサンブールの公園を
散歩す、
午後(モデル)モテル来る、
十五号に横りて読書し
つゝある所を写生す

【欄外左側 (縦書き)】

発信、妻、青の

5月4日 火曜

【欄外右上】

晴曇

【本文欄】

午前外出、静物を描んとて
花果を購ひ帰る、
午後(モデル)モテル来る七八才の
女子を依頼し置きたれば連
来る、
二人を(階)階段の傍に佇して
十二号に写生を試む
夕方迄に描く、¹²⁷
夕食に外出する迄静物
のデッサンを造る

【欄外左側（縦書き）】

来吉田、

5月5日 水曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

朝来机上のペルシヤ壺に插花
して井に果物を盛れる静物
を描く午後二時迄つゝく
(モデル)
モテル来る五時迄デッ
サンを試む
五時より八時頃迄静物
をつゝけ描き終る、二十五号¹²⁸
今日は朝より外出せず筆を
とりたるため何たか労れた様
なり夕食外出散歩して帰る

【欄外左側（縦書き）】

来信、直平、伊藤、近藤
Pycke¹²⁹

5月6日 木曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前中昨日描きし静
物の写生を修作す、
午後(モデル)モテル来る、子供の方
すてに嫌氣のさしたるや
なかゝ*静かにポーズ
せず
夕方迄写生、
夕方紙に静物（花）の

- 127 次の作品について述べたものと考えられる。
児島油彩画総目録No.395《厨房 習作》
60.5×50.1cm、大原芸術財団 大原美術
館蔵（所蔵品登録No. 4095）
以降、6月24日まで、同作品および関連
作品（100号大）の制作に関する記述が
みられる。関連作品（100号大）につい
ては、11月1日に手直しを加えているこ
とが確認できる。
- 128 この日の朝から翌日にかけて取り組んで
いる25号の静物画は次の作品に該当する
と考えられる。
児島油彩画総目録No.438《鉢と盆》81.0
×65.5cm、個人蔵
- 129 フランソワ・バイク（Francois Pycke,
1890-1970）。ベルギーの画家。児島の第
一次滞欧時代からの友人。

写生を始む

130 下田将美(しもだ・まさみ、1890-1959)。
新聞記者・経済評論家・随筆家。

5月7日 金曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

(小笠原?) (ホテル・
朝早く小笠氏を Hôtel Lutetia リュテシア)
Lutetia に訪ふ、
(モデル)
午後ホテル来る 夕方迄写生、
小供欠勤、
夜新聞を読む

夕方、花の写生をつゝく、

【欄外左側(縦書き)】

来信、松永

5月8日 土曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

(小笠原?)
朝小笠氏をホテルに訪問す、
時事新聞の下田将美氏130と共に
同宿三人連立ちてサロン
(装飾美術館)
を観る、昼食後、Art decorative
(Musée des Arts Décoratifs)
を観夕方シネマに入り夕食
後帰宅

【欄外左側(縦書き)】

来信、松永、平塚、羽田、

5月9日 日曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

終日在宅、

5月10日 月曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

(ロンドン)
平塚氏ロンドンより来巴
(ホテル・ノルマンディ)
午前 Hôtel Normandi?
(パスツール研究所)
に訪れ Institut Pasteur

に案内し午後製作を据
へ居るため 昼食後、帰宅、
夕方迄写生、

夜半松永氏^{〔モンチニー〕}Montigny
より帰宅、^{ママ}し明朝再び
出かくる由語る

【欄外左側（縦書き）】

来信

5月11日 火曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前平塚氏を案内してサロン
見物に出かく昼食を日本
人倶楽部にして帰宅

子供病気にて来る不能とて
女一人来る、
松永氏のモンチニー行に
同行すべく急に写生の道
具を[？]支度して午後四時
の発車にてカールトリヨン^{〔Gare de Lyon リヨン駅〕}に
趣く夕食頃モンチニー着、

【欄外左側～翌日欄外左側（縦書き）】

平塚氏明朝リヨンに向けて出発の由

5月12日 水曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

中原氏女を連れて来村、
合計四人昨夜物語に
夜半を過く、
午前中、散歩して午後
水辺にて一枚の写生
を試む、
数日前より巴里に於て
肩の辺に何か小な
吹出物様のもの出来て
痛みを感す何か毒虫の
類に刺れたる様の心地し

て氣持悪し

今日は道首より□の辺に擴大す

5月13日 木曜

【欄外右上】

□晴雨

【本文欄】

午前松永君の庭前にて
写生しつゝあるを写生す、
午後、雨にて室にて、夜
晩く迄語合ふ

5月14日 金曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前庭の写生を鉛筆
にて試む人物を入れ
て描きたき構図なり
午後、十五位(少)の(モ)小女のモ
デル(デル)に来るべく先日約
し置きたれば向岸の
草原にて佇して描く、

5月15日 土曜

【欄外右上】

曇

【本文欄】

午前十時の汽車にて巴里
に帰るべく用意したれと
夕方七時の発車□のみ
なる由にて、
又写生道具をときて午前
午後向岸にて写生す、
午後七時の発車遅れて目
九時頃発、十二時前巴里
着、乗物なし荷物を携へて
歩み帰る、

5月16日 日曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

肩より首の辺の腫物
一層烈しく痛み目^て
〔モンティニー〕
Montigny 滞在中より
鬚をそる事不能、
朝薬店に趣て昇汞水¹³¹
と亜鉛華様の塗薬を求
む
食^(塩?)監湯を造りて
終[?]□療治に尽す、

【欄外左側（縦書き）】

来、林、奥村、吉田、柳井、小林、
矩一、直平、

5月17日 月曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午後^(モデル)ホテル来る、
夕方迄写生す、
腫物療治の効ありて
少し快方なり、

5月18日 火曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午後^(モデル)ホテル来る
夕方迄写生、

5月19日 水曜

【本文欄】

午後^(モデル)ホテル写生、

この数日療養のため
一^(切)斉^ず外出せず、
終日室にあり、
外物に接せされは
何の心の防もなく却
て製作に集中する事
を得、

131 昇汞（塩化水銀）の水溶液。消毒液として用いられた。

5月20日 木曜

【本文欄】

午前在室、
午後^(モデル)モデル写生、
夕食後外出
^(クローズリー・デ・リラ)
Cafe Lilasの會合
に趣く

5月21日 金曜

【本文欄】

午前在室、手紙をかく
午後^(モデル)モデル写生、
夕方松永氏と外出
絵具屋に趣く、
【欄外左側（縦書き）】
発信、林、青の、小林、
矩一

5月22日 土曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前^(ルーヴル美術館)ルーヴルに趣く、和蘭派
の開室ありて久し振り珍らし
午後子供^(モデル)のモデル来る、五才位
の女の子にて よく肥て愛
くるしあまり下層の家庭な
らずと見へさほと貧相なる
哀感なし
夕方迄、紙上へ写生をなす、

【欄外左側】

来
Revue
Moderne

5月23日 日曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前^(ルーヴル美術館)ルーヴルに趣く
夕方迄散歩して帰る、

【欄外左側（縦書き）～本文欄下側（横書き）】

5月24日 月曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前中百号の下部の写生をなす、
午後(モデル)モテル来らず(モンテイニール)Montugny
の写生を修作す、
四時頃モテル子供を連れ
ずして来る、姉の病氣進
みたるため病氣に見舞て
の帰りなりと、写生せず、
五時(アマンシヤン)アマンシヤンを久振にて
訪問朝鮮人を描きたるもの、
愈々政府に買上る事と定まりたる
由報せらる、¹³²
夕方中川君を訪れ夕食を共にす、

【欄外左側（縦書き）】

発信、妻、柳井、青の

5月25日 火曜

【欄外左側（縦書き）】

六月十三日記、

【本文欄】

モデルの姉病氣なりとて
午後來る事不能なる由なれ
は午前描く事としたり
今度描きつゝある百号の立
絵は構図に於て別に難
もなければとも非常になん
となく無理のある様の心
地して纏の一通の骨折
にては済ぬらし
目先日の子来る、先日描き
かけし残の写生す、

5月26日 水曜 ~ 6月2日 水曜¹³³

【5月26日欄の本文欄】

此頃は半日のみ描くのみにし
て他は外出或は修作な
とに費す、時々日本の新聞

132 国民美術協会展出品作（前掲注84参照）のうち、朝鮮の民族衣装を着た女性像《秋》がフランス政府買い上げとなったことを述べている。

133 この期間日記を書くことを怠っていたため、この頃の自身の状況や考えを後日（6月はじめか）この期間の欄に記している。

なと来るため読む事あれと
も此頃佛書をよむの暇
なし

日記をかく事のすてに十余
日忘りたりと日本への通信
なども忘りかちにて毎日
何となく氣かゝりなり
夜は仕事に勞れて早く眠
氣さし、朝は仕事に追れて

【5月27日欄の本文欄】

ゆる^{*}書筆とる事を得ず、その日^{*}
の感想を記せねはとても十
餘日前の思出は不可能なり
時に書置たき事からなと生せ
しもすべき過ぎたる思出を呼
起す事の不可能なり
先月末迄に白耳義^(ベルギー)に趣かん
と決せしもモデル^(モデル)のよく通
勤するまゝに今一枚この作を
終へて後にせんと思ひ今月
早々には終了[?]をすべき筈

【5月28日欄の本文欄】

なりしも一度始めて見れば
とても急にかたつける事出来
ず^ず今月もすてに終らむとして尚
仕事半に在り、
白耳義の旅は只の漫遊と
し趣くの□なれば一忒
週にて足らむ或は写生
にても試みんには短かくと
も一ヶ月を要すべし
早く出かけて歸らす^ずては夏
の仕事を得られざるべし
心の急きにな□それだけ

【5月29日欄の本文欄】

精力つゝかす、三日の仕事は一週
間に延ひてとても豫定通[?]
りに運ぶ事一つもなし、
然し製作のために日の延
るは仕方なし、
朝は四時には明けて夜は
九時半には尚ほ日暮れやら
ず^ず一日のなかきあき冬の倍

以上なり

其創合に氣持の□みにか仕事
なか^{*}につゝかす折角なかき

【5月30日欄の本文欄】

日も働く時間は僅にして
却て冬の方働^(働きばえ)栄のする様なり
此の夏には何か屋外の大作
を試み度し
何れに地を撰ふべきに哉
如何なる主題によりて作^{ママ}図て
試みんか
興の乗り其境に接する迄
只ほんやりとして時日を
過すにはあま短^マかき滞^マ欧
の期日は貴重に過くるなり

【5月30日欄の本文欄】

五月もすきたり
昨年の此頃は印度洋上に
する事なく毎日を船にゆられて
過せしと思へは一ヶ年[?]は長き
様にもあり、
一ヶ年の間に何事をなしたる
か胸中必然に我と我[?]へ
か霊を以て接したる何事
ありや時は過したり多くの事
もなしたり然しそれ何物
物ならむ

【5月備忘欄】

宜[?]く家郷を去って余今
此地に何をか夢む
歸去来歸去来、我か
愛と思の家郷の地に
天地榮あれ我心は
愛に情に眞と誠の境
に□□活きん哉
何を望み何を夢てこの
他郷に□日の生をか
試みん哉

【6月1日欄の本文欄】

日記の怠り長きにつゝき其日の
記載を思出す事不能、
モテルの写生によりての製
作百号は毎日^(怠)忘りなし日曜

さへも、休みなし
然し其の進化甚た遅々と
し誠に心細し
途中子供の病氣^(かゝ)にかりて
より何事もな□□全体□□
り纏□に不都合生して
遺憾なり

【6月2日欄の本文欄】

調子は以前考へたるより
一層強きものとなりたり
全体の色調緑、青と
黒味かゝりたる、藍の色
にて今度の図には、
赤紅の色味、甚た稀な
り、光は殆ど正面より受
けたれば画面の深味を
生ずる事の甚た、易からず、
子供の姿勢の比較的
困難ならざりしは幸なり¹³⁴

【6月1日・2日欄の欄外左側（縦書き）】

日記を十余日怠りたりこの間の手紙の往復
をなしたるものあれと今は記憶せず

5月31日 月曜¹³⁵

【欄外上側】

廣瀬哲士氏同道アマンジヤン氏を訪問
日本現作画サロン出陳の儀を再□
物語らる、¹³⁶

6月3日 木曜

【本文欄～翌4日本文欄】

午前中モテル来る、
今朝妻よりの来状にて媿一
郎先般中腹炎にて高熱¹³⁷
四十度を越へ遂に岡山より
醫を迎へ、日向の母に打
電して呼寄せたる迄の騒き
なりし由、幸に其後軽快
にして今は殆ど全快心配
なしとの事、前も廣子の重
症なりしあり又媿一郎の病
みしと妻もこれ等子供の
病氣にての心労と、諸費用

- 134 次の作品について述べたものと考えられる。
児島油彩画総目録No. 396《厨房》161.8
×113.7cm、大原芸術財団 大原美術館蔵
(所蔵品登録No. 4070)
この題材、即ち、台所の階段傍に立っ
ている女性と子どもを描いた作品に5月8日
から取り組んでいることが確認できる
(前掲注127参照)。以降6月24日まで同
作品制作に関する記述がみられ、その後
11月1日に同作品修正の記述がみられる。
- 135 本文欄への記入内容については前掲注
133参照。
- 136 国民美術協会展で日本人作品の特別陳
列を行う計画のこと。廣瀬哲士が帰国
するにあたり、廣瀬に黒田清輝へ同計画
を伝達するよう依頼したものと考えられ
る(6月6日欄参照)。なお、この特別陳
列計画については次に詳しい。
松岡智子「日仏文化交流展と児島虎次
郎」『児島虎次郎研究』中央公論美術出
版社、2004年、pp. 341-380
- 137 児嶋媿一郎(こじま・こういちろう、1914-
1992)。児島虎次郎・友夫妻の第一子。
戦後、祖父石井十次の児童福祉事業を再
興し、児童福祉家として活動。
- 138 石井辰子(いしい・たつこ、1863-1927)。
社会事業家。児島虎次郎の義母で石井
十次の妻。十次の没後、岡山孤児院の院
長をつとめた。

の多日出にて経済も不充分
勝にて何かと心労多ければ
出来るだけ早く帰朝せよとの
事、余も何時帰るとも定め
居らざりしも家郷を思ひ
妻の心労を察し子供の病
めるを思へはこの地に消日の
意義なきを思ふて帰朝の
期を決せんとす、

6月5日 土曜

【本文欄】

(モデル)
午前モデル

毎日三時間位の仕事の
外殆となす事をなして日
を暮すにや
(スペイン)
西班牙の旅にてもよく描き
たり帰春梨杏の花の頃も
郊外によく通ひ描きたり
この頃は大作に没頭する
とは云へ其の作の遅々た
る事甚しからず哉

【欄外左側（縦書き）】

発信、岡崎、近藤、金山、柳井、小林、
上田、三橋、妻、
◎林氏へ借金の事申送る、

6月6日 日曜

【本文欄】

(モデル)
午前モデル

午後廣瀬哲士氏の朝帰朝
マルセーユに向け出発せらるゝ
(Gare de Lyon) ヨン駅
をガールリヨンに送る、
廣瀬氏にアマンジヤン氏より
の明年或は明後年 (国民) Salon
(美術協会展) National に日本画の特別
陳列の事を帰来黒田先生に
語らるゝ様申付て送る、
夕食を福田氏の所に御馳走
に案内されたるため、松永氏
と同伴す、

139 前掲注136参照。黒田からの回答につい
ては、9月27日欄参照のこと。

6月7日 月曜

【本文欄】

^(モデル)
午前モデル写生、
午後アマンジヤン氏を訪問
松永中川氏同伴、
日本現代作品の特別陳
列につき
明年とては甚た急なれ
は或は明後年の事とな
りても差支なきものなる哉
に就て謀る、

6月8日 火曜

【本文欄】

午前モデル写生、
午後、辻永¹⁴⁰氏加藤静
兎君¹⁴¹と来訪、
両三日前巴里着との事、なり、
何れにか宿を見出して一時
心易く落付たしとの事、
^(オテル・デ・グラン・ゾム)
Hôtel Des Grands Hommes
に同導したるに幸に両室
の^(空)明きたるものありて
明日、辻君の宿よりこの宿に
轉宅の事と定めらる、

【欄外左側（縦書き）】

発藤島、黒田、

6月9日 水曜

【本文欄】

^(モデル)
午前中モデル百号殆と終了
午後松永氏来談
夕方より絵具屋及古道
具の辺を久振りにて散歩す
夕飯を都鳥氏、松永中
川の諸氏と共にす、
^(ラモレル)
ラモレに托し藤島先生パステル
運送料、残四十法を絵具を求め
て送付す、
^(フラン)¹⁴³
右パステル箱代30 fcs、マルセーユ迄運送料30fcs
日本迄は郵船マルセーユ支店員の好意により
廣瀬の荷物として送料不要

【欄外左側（縦書き）】

- 140 辻永（つじ・ひさし、1884-1974）。洋画家。
141 加藤青兎（かとう・せいじ、1887-1942）。洋画家。
142 前掲注101参照
143 兎島はフランスフランの略記としてしばしば「fcs」を用いる。

発、加藤、Beaux arts、
aux
Salon、

6月10日 木曜

【本文欄】

午前中^{〔モデル〕}モテル写生、今日にて久し
く描きつゝけし百号を一先
つ写生を終る事とす、
久し振りにて午後入浴に趣く、
夜^{〔クロズリー・デ・リラ〕}Café Lilasの會合に出
席す
百号の女と子供の図はすてに
一ヶ月以上を費したりこの間
専心筆をとりたれば他に何
の作品もなし、

6月11日 金曜

【本文欄】

午前^{〔モデル〕}モテル写生、
百号人物に女の^{〔ヴァイオリン〕}バキオ
リン持ちて□せる図
を描かんとし大体の構
図は数日前より毎日作り
たり、大体の形と色をほとこ
す、午後はモテルの周囲を
下描す、
午後夕方散歩かたゝ^{？*}外出、

【欄外左側（縦書き）】

来信、林、妻、矩一、吉田、青の
太田、石井、

【欄外右側（縦書き）】

発信、妻、林、^{〔矩一、直平〕}矩一直平

6月12日 土曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前^{〔モデル〕}モテル来るも体の都合
あしくして充分ポーズする
不能、十一時頃帰る、
午後松永¹⁴⁵ 藤岡、辻、加
藤の諸氏来訪

- 144 次の作品について述べたものと考えられる。
児島油彩画総目録No.412《萬戀》168.8
×132.0cm、大原芸術財団 大原美術館蔵
(所蔵品登録No. 4073)
以降、6月23日まで本作の制作に関する
ものと思われる記述がみられる。さら
に、9月18日から21日まで、本作の修正
に関するものと思われる記述がみられ
る。
- 145 藤岡昇（ふじおか・のぼる、1896-?）で
あろう。洋画家。

夕方外出

昨日と今日、吉田君より中

央美術来送さる

昨日大阪毎日沢山来着

通読するに忙し、

【欄外左側（縦書き）】

来信三宅

6月13日 日曜

【欄外右上】

曇雨

【本文欄】

午前〔モデル〕ホテル来る筈なりしも遂に

不参、午前中、百号の新らしきも

の、餘白の下塗をなす、

以前描きし百号の補修を

なす、

午後辻君来宅、同道して Menard¹⁴⁶

の宅を訪問せしも不在、

夕方□再び氏を同伴して帰る

夕食に外出す、

○加藤君より郵船の事返事ありて

一月始頃の三島丸に定めんかと考ふ

【欄外左側（縦書き）】

来加藤、都鳥

発、三宅、下田

6月14日 月曜

【欄外右上】

晴

朝九時頃〔モデル〕ホテル来る昨日は病院
にて注射をほどこしたるため終日発熱

にて就床せりと云ふ明日より入

院一週間ほと休みたければとの

事折角描きかけたるなれば今中

止されては如何もする不能白耳

〔ベルギー〕義に出かけるに恰度都合よけれと

午後辻都鳥両氏と Menard の宅

を訪問す、〔Cottet〕 147 Cotte 氏あり、〔ベル〕 Belle

ジャルディニエール百貨店 Jardiniere に洋服の假縫による

支那飯を共にして帰る

146 鉛筆にて「メナール」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

147 シャルル・コッテ (Charles Cottet, 1863-1924)。フランスの画家。

〔正会員〕
(Sociétaire) 148
サロンより Sociétaire の通知来る

【欄外左側（縦書き）】

来サロン

◎此日青野兄永眠の日

六月十九日

来電、¹⁴⁹

6月15日 火曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前午後モデル来らず病気の勢か
或は事情の生して来勤する事を望
まさるや
終日百号を描きつゝ、く幸に今始
めつゝあるこの百号は人物は全画面
の凡そ四五分の一位の大きにて
室内の写生する処大部分なれば
モデルの欠勤もさほと差支を生せず
尚両三日は周囲の写生をつゝけらる
べし夕方平瀬君来訪なか^{*}善
良なる性情の人なり、夕食に外出す、

【欄外左側】

発

Renée¹⁵⁰

6月16日 水曜

【本文欄】

朝製作に費す、先日メナール
の宅にて Cotte 氏¹⁵¹に面會今日
訪問の旨話し置きたれば午
食後訪問一時間余話合す、
画室の作品なか面白きもの^(なかなか?)
尠からず直接賣渡しをせ
ずとの事エッチング式枚を
買求む
午後帰宅を後れたるためモ
デル来りたるも不在なり<sup>(モ
デル)</sup>
したため帰る、

6月17日 木曜

【欄外右上】

旱[?]

- 148 鉛筆にて「ソシエテール」と書き添えられている。児島の筆跡ではない。
- 149 青野俊一郎死去の報に接し、後日、青野が死去した6月14日の欄に書き加えたものと考えられる。6月19日欄および6月備忘欄参照。
- 150 Renée Quinsiか。児島の住所録に名前がみえ、住所はパリとなっている。
- 151 鉛筆にて「コッテ」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

【本文欄】

^{〔モデル〕}
朝ホテル来る昼迄写生す、
午後、外出
夕方前吉[?]政氏来訪
午後製作に手を出せず、
夜、Lilasの會に趣^ずく

【欄外左側（縦書き）】

◎書留にて大原へ帰朝の事を申送る、

【欄外右側（縦書き）】

来信岡崎、原田瓊生、¹⁵²

6月18日 金曜

【本文欄】

^{〔モデル〕}
朝ホテル写生、
午後Grand Hôtelへ原田
氏を訪問す、不在明日
来訪を告置て帰る、
日佛銀行にて5000
受取る、
散歩後帰宅、

6月19日 土曜

【本文欄】

^{〔モデル〕}
午前中ホテル来らされは昨日
の部分なる白百合譜面
臺の辺を描く、
午後Grand Hôtelに
原田氏を訪れ同道して
サロンを觀夕食後
Olimpia^{〔オランピア〕}
〔L'Olympia〕
に寄る、
夜半帰宅、
◎青野兄^{〔青野〕}六月十四日永眠の
報来る 噫、

【欄外左側（縦書き）】

来電、青野兄の長逝を報し来る、国元、新井、加藤¹⁵³

6月20日 日曜

【本文欄】

朝、新井氏、来訪、昨日マルセ
ーユより今朝六時gard Lyon^{〔リヨン駅〕}
〔Gare de Lyon〕
着の旨と共に今朝来訪を電報
来らる、

- 152 原田瓊生（はらだ・たまお、1877-1960）。
大原孫三郎の幼なじみ。高田商会取締
役、日独貿易商会代表者などをつとめ
た。
- 153 新井完（あらい・たもつ、1885-1964）。
洋画家。

154
ロンドンより加藤君再遊
訪問を受く午後松永氏と
四人連にて外出、
夕食後原田氏の独逸発をGar
du Nordに送りも入場し不
得す遂に面會する事を不得、

6月21日 月曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午後モデル来る夕方迄描く、
夕方加藤氏来訪、
明日帰倫の筈、
夕方散歩して帰寓、

6月22日 火曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前中、製作—
午後辻氏とBelle Jardi
ニエール百貨店
nièreに趣く
夕食後帰寓

6月23日 水曜

【本文欄】

午前中製作 殆と百号の絵
を描き終る、
午後辻、新井氏と後れて
都鳥氏、西班牙よりの須田
氏を同導して来訪、
日本食を作りて夜を
深し語る、

6月24日 木曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前中、先日描きし臺所の絵の子供
の服の紫色にして全体の調子に
□さるため再應淡桃色の

154 鉛筆にて「静児」とかき加えられているが、児島本人の筆跡ではない。なお、この「加藤」は「ロンドンより」「再遊」していることから、御木本真珠の加藤虎之助であると考えられる。本誌前号所収「資料紹介 児島虎次郎日記 1919年(大正8年)」p. 102, 120参照。

服に改める事して午前中に
描き改む□以前より明部
の調子の整たると思ふ
午後須田氏の宿を訪れ
同導してサロン見物に出
かけて夕食を共にしCafé
デ・リラ)
Lilasの會に出づ

【欄外左側】

発
? ?
Hoffmann
Eugene

6月25日 金曜

【本文欄】

午前(モデル)ホテル来るも氣持悪しとて
早帰、
午後、大使館に旅行券の事
につき出かく
夕方散歩して歸寓、

【欄外右上（縦書き）】

来信
加藤

【欄外左側（縦書き）】

発近藤、妻、原、郡、岡崎¹⁵⁵
? ?
Hoffmann Eugène

6月26日 土曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前(モデル)ホテル写生、
午後Passyの活動館にて
日本のフィルム(映写?)の撮写ありと
て案内され、趣くFranco-
japonais)
Japonaisの催しなり
夜支那飯にて同食す

6月27日 日曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

朝須田氏を訪問し午後、

155 郡虎彦（こおり・とらひこ、1890-1924）
か。劇作家。兎島の住所録に名前がみ
え、住所はパリ近郊のムードンとなっ
ている。

{ シ ャ ン ゼ リ ゼ 座 }
(Théâtre des Champs-Élysées)

Theâtre Champs Éyseeés

156
に Isadora Duncan の

舞踏を観る、

(ラ・マルセイエーズ(フランス国家))
(La Marseillaise)

終りに Marseillais

の歌につれて彼の試み

たる動作はよく其の

歌意を語るものありたり

○此の夜夢に誰人か来りて姉¹⁵⁷の死

せるを告ぐ

6月28日 月曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

(ベルギー)
午前白耳義領事館に旅券
のため

午後、須田氏来訪、同導し

(アマン=ジャン)
てアマンシヤン氏を訪れ

夕方迄、カフェに語る、

(グラン・ブールヴァール)
夕食後 G^d B^d を散歩して

帰宅、

【欄外左側 (縦書き)】

来、矩一、林、原、金沢疋田

柿原

6月29日 火曜

【本文欄】

(モデル)
午後モデルにて百号を

修正

寝

6月30日 水曜

【本文欄】

半日百号修作

(カジノ・ド・
夜細田氏 Casino de

(パリ)
Paris を観る

【6月備忘欄】

六月十九日夜半原田瓊生氏の来巴にて案内を

終り帰寓卓上式通の電報来信、

一つはマルセーユより新井完氏の発

一つは日本の誰よりか、「青野、五六月

156 イサドラ・ダンカン (Isadora Duncan,
1878-1927)。アメリカの舞踊家。

157 谷田タキ。兄島の実姉。

十四日死」すの通知なり、
一ヶ月半ほど前の同兄よりの来信、に目下^{ママ}
健康不良元氣も衰へたる様にて
文中、今一度、君に遇^{ママ}いたしとの
文句あり、其の悲惨読むに
堪す、兄の文言は常に病者に
類す、壮にしてかるゝ文言の一度
たりとも書中に在りしを見ず、彼れ
終焉前今一度面會して心逝く
別辞を呈し度きは余の望く所なるも
余は如何にしても兄と永遠の離
別の余か帰朝迄に来るべき事^(来るべき事)るべから
ざる事^(ざる事)を確信せしか昨年五月初め
兄が令室の永眠の其日余の発途に
察し泣言其行を送られたるを思へ
は兄か終りの言葉を聞きしは実に
昨年^(昨年)の発途の其日に帰せし噫
彼に謝し彼に誓ふべきものは
余か今後の修養向上にのみ帰す
余か責は今一層の奮励を要す
べき哉

【六月備忘欄の欄外左側（縦書き）】

我最も愛する友よ静寂なる床と眠にあれ

7月1日 木曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

昼前須田氏来訪
午後同道してBon^(ボン・)
marche 及 Louvre に趣^{(マルシェ百貨店) (ルーヴル美術館)}
く、
夜Cafe Lilas^(クローズリー・デ・リラ)

7月2日 金曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

明日白耳義行のため荷造をなす、
午後Gard du Nord^{(ベルギー) (北 駅) (Gare du Nord)}にて
切符を求む
午後も荷造りをなす、

【欄外左側（縦書き）】

来、原田、疋田
加藤

7月3日 土曜

【本文欄～翌日本文欄内上部】

午前荷物など取纏のため
費す、
正午前〔北 駅〕停車場Nordに
向ふ
須田氏と同車して十二時
半発車、
途中検国境検の手續も至極
簡単にて延着七時過〔ブリュッセル〕ブル
クセル着Gard du Nordの
〔ホテル・セシル〕
近くのCecilに宿す、
北佛の戦場沿道に眺めて
其の惨状は白耳義〔ベルギー〕に入りてより
以上烈しきものあり

【欄外左側（縦書き）】

発石井、妻、矩一、林、原、太田
加藤、小笠原、疋田

7月4日 日曜

【本文欄】

〔サロン・デ・ブランタン〕
(Salon de printemps) 158
午後、Salon plintempsを観、
Musée見物新旧159を見る、
余は夕方五時過の列車に
〔ゲント〕
てガンに向ひ七時頃着、
停車場前?のIbiseに宿る、
〔バイク〕
(Pycke) 160
てPyke君の家を夕方訪問す、
〔オランダ〕
和蘭旅行中にて不在
失望深し
市中を一巡したれとも誰れ
一人知人に會遇せず
思へはガンの生活は八年前ママの昔に
に過ぎ去りたり

7月5日 月曜

【本文欄】

〔デルヴァン〕
午前テルバン先生を訪問
す、アカデミー休暇なるを

- 158 ベルギーの王立美術協会による第8回サロン・デ・ブランタンであろう。
159 「新旧」は、王立近代美術館と王立古美術館を指すと考えられる。
160 鉛筆にて「ピカ」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

知らず先づ^(アカデミー)アカデミーに
趣く後デルバン氏の宅を
訪る、先生画室に在りて
其所を訪る(大雨にてビシヨ濡れとなる)
近年喉を痛められて話す
事にも食事さるゝにも甚た不
自由なりと聞く発音明瞭
を欠く、或は咽頭癌の如
きものなるや? 氣の毒¹⁶¹千萬なり、
午後Hoffenbomeを訪る、

【欄外左側(縦書き)】

昨日より¹⁶¹急雨よく降る、

7月6日 火曜

【本文欄】

正午前の汽車にて^(アステネ)Astene^{(Astene) 162}
にClaus先生を訪問す、
先生相変らず元氣よし
四時先生同道にてMlle¹⁶³
Montinieを訪れ、
夕食の御馳走になりて
九時過^(ゲント)ガンに帰る、
日曜日より毎日の如く
雨にて降れ通しなり
「^(美術館)朝、Muséeを一覧す、先年
ガンの萬博に出品せし^(大きな)夫きFemme au
grand chapeau^(帽子の女)はデルバン先生に
贈り置[?]たるに先生よりこのMuséeに¹⁶⁵
寄附されてよき位置に出品され居れり

【本文左側(縦書き)】

小雨、発信、松永妻、大原、

7月7日 水曜

【本文欄】

朝^(ブリュッセル)Bruxelle^{(Bruxelles) 166}に向ふ、
須田氏の宿を訪ねたれと
不在、
午後^(サンカントネール美術館)Cinquantnair^{(Cinquantenaire) (エジプト)}に埃及
のCorect^(collection?)□□□を観る量に於
て甚たからさるもなかくに
観るべきもの^マ尠^マからず
夕方須田氏に¹⁶⁷會ひ

- 161 児島の住所録に「Ernest Hoffenbom」とあり、住所はゲントとなっている。画材店。7月29日欄参照。
- 162 鉛筆にて「アスタミー」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
- 163 鉛筆にて「クロース」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
- 164 ジュニー・モンチニー(Jenny Montigny, 1875-1937)であろう。ベルギーの画家で、エミール・クラウスの弟子。児島の住所録に「Melle J. Montigny」の名がみえ、住所はゲントとなっている。
- 165 次の作品を指している。
児島油彩画総目録No.193《大きな帽子をかぶる女》ゲント美術館蔵
同作は、1919年にジャン＝ジョゼフ・デルヴァンより同館に寄贈された。
- 166 鉛筆にて「ブルクセル」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
- 167 鉛筆にて「會」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

夕食後十時の□□にて^(ゲ)ガ
ン^(ント)に帰る、

【欄外左側（縦書き）】

小雨

7月8日 木曜

【本文欄】

^(ブリュージュ)
^{(Bruges) 168}
朝Brugeに向ふ、[?]沿道
戦禍の様見られず、
昼前と昼後一通り廻
り歩く
昔のまゝにて何の異変なし、
午後六時^(ゲント)ガンに帰る、
ガンを夕方など散歩しても町並も
店頭も殆ど八年前と何の異変なき
に何となくそれか変に感せられる事は
自分の境涯の差から生ずるのかそれ
とも、自分の周囲から来る種々の[?]事情
によりて自分の此の地か旅人として
取扱ふのであろうふか

【欄外左側（縦書き）】


小雨

7月9日 金曜

【欄外右上】

半晴

【本文欄】

朝九時頃須田氏^(ブリュッセル)ブルクセルより来訪殆
と秋日方々の見物をなす、^(博物館・美術館)昼前Musée
^(フランドル伯居城)
^(Château des comtes)
に過し昼食後Chateau des comte
^(聖バール大聖堂?)
^(Saint-Bavon?)
に入り、Sant Babo□□より、
^(サン=ピエール)
^(Saint-Pierre)
St Piereの郊外の辺を散歩す、
須田氏は午後夕方の列車にて^(ブリュッセル)ブル
セルに帰らる、Muséeの番人か
君は前に来て居た人てあろふとよく
自分の事を覚へて居ったのは不
思議な位[?]であつた

7月10日 土曜

【欄外右上】

晴、

【本文欄】

168 鉛筆にて「ブルージュ」と書き添えられて
いる。兎島本人の筆跡ではない。

朝七時四十幾分の列車にて^{(アントワープ) 169} Anvers
 に向ふ、今 Anvers に於て十八世紀
 より^(二十) 廿世紀迄の大家の作品陳列
 ありて見るべきもの^ず 藪からず (catalogue)
 年後、昼頃となりて^(美術館) Musée より^(エスコール・スヘルデ川) エスコ
 の川岸に出た、殆と十三番の日本郵船
 の船付の傍である、以前日本^(飯?) □屋の
 あつたのはこの辺なりしかと彷彿、
 戦争中、閉店したるも戦後新たに開かれ
 たりとて^(蒲) 久し振りに鰻の痛焼を味ふ
^(アントワープ三年展) 午後 Salon Triennale を観る、
^(Le Salon Triennial) Frederique の大作賞嘆を深ふす、
^{(Frédéric) 170} Carte 氏の一枚出品せるも^(ブリュッセル) Bruxelles
⁽¹⁷²⁾ の方、佳作とす、^(ゲント) 夕方ガンに帰る、

7月11日 日曜

【本文欄】

午前郊外の辺を散歩す^{(リス川(レイエ川)?)} Lise の辺なか
 *に静寂なり、
 午後デルバン先生を訪問す、画室をたゝ
 きたるも不在先生の宅にて面會す、半
 時余話合す、^{ママ} 久し話す事は先生を苦し
 めるのみなれば、と辞し帰る、
^{(サーカス) ママ} 夜 cirque に観る^(立ち見席) parterre にて二人
 の姉妹らしき若娘しきりに余に注目す
 後にて尋ねれば^(ゲント) 先年ガンにてよくモデル
 に雇ひし Angele なりと八年前の
 見覚殆となし

【欄外右上 (縦書き)】

¹⁷³ 発、成羽、宅
 太田岡崎
 金沢、辻
 妻、柳井、
 矩一、
 加藤、松永

7月12日 月曜

【本文欄】

午前中絵具箱を携へて町中を散歩
 す、描てみようと思ふ所藪からさるに
 なか^{*} 其描く場所を得ず、若し
 充分に何れなりと描く都合よき

- 169 鉛筆にて「アンベルス」と書き添えられて
 いる。児島本人の筆跡ではない。
 170 レオン・フレデリック (Léon Frédéric,
 1856-1940)。ベルギーの画家。
 171 アントワープ三年展に出品されていたレ
 オン・フレデリックの大作は次に該当す
 る。
 レオン・フレデリック《万有は死に帰
 す、されど神の愛は万有をしてよみがえ
 らしめん》大原芸術財団 大原美術館蔵
 (所蔵品登録No.1091)
 児島はのちの第三次滞欧 (1922~23年)
 の際、フレデリック本人より同作品を購
 入することとなる。
 172 アント・カルテ (Anto Carte, 1886-1954)。
 ベルギーの画家。
 173 成羽 (なりわ) は児島の故郷、現岡山県
 高梁市成羽町。ここでは、実家の児島家
 を指していると考えられる。

位置を求め得らるゝなれば、少しは
記念の製作も出来得べきにと思ふ
午後、散歩をつゝく、夕方迄、
(ゲント旧市街)
(Vieille Gand)
Vieu Gandに雨をさけ、
夕方、目目Angeleと其従姉と
宿の夕食を共にす、

7月13日 火曜

【欄外上側】

(ブリュージュ)
Brugesにて

【欄外右上】

晴

【本文欄～翌日欄の欄外左側（縦書き）～翌日本文欄内上部】

午前殆ど何事をもなさず、
正午頃の汽車にて(ゲント)ガンを引
揚174げBrugesに向ふ
先日この地来たる時、(魚)marche
(運河)
(canal)
aux poissonsの隅の所 canale
に面したる(カフェ)cafeにて(貸)chambre
(部屋)
(à louer)
a Loueの札かかり居りしたため
数日後に来るべき由話し置たり
れは直にこの画室の如く廣く
明るきしかも朝のカツフェ付て
(フラン)
3fcsと云破格の安價なり、に入る事を得
夕寿暮、(ベギン会修道院)ベギナーレの辺にて
スケッチをなす、
この夜何にも描かずす町の間を散歩
して暮す、

7月14日 水曜

【本文欄】

朝宿の室内より魚市場の写生を
始む非常に都合よき場
所を得たり、
暑さと日光に戦て困難なる
仕事をなさずしてこの宿の中
のみにて幾枚にても描く事
を得
午後宿の廻廊より向岸を
眺める□写生を始む
こはなか?く面白き構図を得られ
そふ175なり、

- 174 鉛筆にて「ブルージュ」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
- 175 児島油彩画総目録No.388《ブリュージュ舟宿》の関連作のうち次の作品について述べたものと考えられる。
児島油彩画総目録No.385《ブリュージュ舟宿 習作》65.2×50.2cm、個人蔵
翌日まで制作が続けられていることが確認できる。

7月15日 木曜

【本文欄】

朝は大低七時半頃起床鬚剃してカツ
フエを宿の臺所に飲みに下りると大低八時
半より九時頃となる、
昨日の魚市の画をつゝく、宿の奥部屋
は全明にて自分一人窓きわに立ちて
ガラス窓越しに窓外の人群を写生する誰
れも側に寄集まつて邪間するものもな
く非常に心静かに描く事が出来る、
午後は昨日の廻廊の描残りなる、向岸の
辺の写生をなして直に終る、
このスケッチに寄りて今少し大なるもの製作
して見たし、
夕方迄鉛筆に同じ場所の写生をなす、

7月16日 金曜

【本文欄】

(魚市場)
marche aux poissonsの絵は今日
一日描きつゝく要あり久しく筆を休
みたつためにや、なか^{*}く仕事はかと
らず、
式度の食事は(大広場)
Grand placeの側
(レストラン)
のrestaurantに通ふて居る、昼夕
□□、
午後廻廊の画の構図製作材良として
左方の柱の立並た所を至極大体
の色と形を写生す、其頃恰も宿の
(マドモワゼル)
Mademoiselleにて二十才位?の目
人この廻廊に來りて針仕事を始む¹⁷⁶
早速依頼して油にて単なる写生をなす、

7月17日 土曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前中宿の室より窓外を望みて
写生す、今日一日にて終了せず、
午後、廻廊目の習作を一枚
作る、右部の櫂など置き
たる方なり、¹⁷⁷
今日朝より日光強く暑さ烈

- 176 児島油彩画総目録No.388《ブリュージュ舟宿》の関連作のうち次の作品について述べたものと考えられる。
児島油彩画総目録No.386《ブリュージュ舟宿 習作》66.5×46.9cm、大原芸術財団 大原美術館蔵（所蔵品登録No.4097）
- 177 児島油彩画総目録No.388《ブリュージュ舟宿》の関連作のうち次の作品について述べたものと考えられる。
児島油彩画総目録No.384《ブリュージュ舟宿》65.3×53.0cm、個人蔵

し

夕食前宿のAnnaなる七才位
の女の子に日光照りたる正面の
顔を写生す、¹⁷⁸

【欄外左側（縦書き）】

発妻、井上、加藤、

7月18日 日曜

【欄外右上】

半晴

【本文欄】

今朝は早起して昨日より描きかけし窓
よりの画を描き終らむと希望せしも
朝来曇天にて如何ともなす様もなし
小さな写生箱を携へて附近を
散歩す、^{〔ノートルダム〕(の?)} Notre dameに寺の
裏の方の石橋の辺に出て物珍しく
^{〔スケッチ〕} スケツを始め数度雨に降られて
軒下に憩ふ、^{*} 正午頃より霽れて
明光鮮かし
午後、部屋の窓より写生を始む角岸の高い家と
樹木の式三本繁り聳ゆる辺り堀
割の水に向横岸の白垂、赤紅の家壁
美しく影したり[?]

【欄外左側（縦書き）】

此の夜、^{〔グラン・プラス、大広場〕} クランプラスにて奏楽ありて
沢山の人出なりし

7月19日 月曜

【欄外右上】

発

Renée

晴

【本文欄】

朝曇り勝なり、昨日描きかけし
^{〔鐘〕}
^(carillon) 窓より、caillonの塔を望みて描き
かけし画をつゝく、空の晴れたるを求め
しもとても雲の去る様子もなければ飛
雲の班々たる空に改む¹⁷⁹
午後宿の娘さんのデッサンを素描す、
これ位にして置てさへ尚帰つて画室で
製作するとすれはなかく^{*} うまく行かぬ

- 178 次の作品について述べたものと考えられる。
児島油彩画総目録No.397《少女の顔》
41.0×32.0cm、大原芸術財団 大原美術館蔵（所蔵品登録No.4078）
- 179 ブリュージュの塔を描いた次の作品について述べたものと考えられる。
児島油彩画総目録No.391《ブルージュ風景》66.6×57.6cm、所蔵不明

事であろう、
夕方、窓外の角岸を画きつゝく、午後と
なり窓全^(空?)く雲なく晴れたりこの夕方の画
には雲の必要なるに、

7月20日 火曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

今日此の地を去り^(ゲント)ガンに寄て和
蘭の旅行を終り然して直に巴
里に帰る必要なく、或はガンにて
何か一枚製作をなし得るの
機会をあれは、一週間滞在
して描て今月末か来月始め
巴里に帰ればよきかと数日来の考
へ中なりしかさて今日となれば
何たかこれ迄描かけの絵か今少
し^(コンポジション)改作して見たく、尚
の分の今少材料豊富にして帰らねは、
^(スペイン)西班牙の旅行の様な失敗を繰返
すやも知れず、
明日出立するとも、今日午前、午後前日の仕事
を□□□□

7月21日 水曜

【欄外右上】

曇

【本文欄】

午前何か一寸とりかたつけをなしたると
鉛筆のスケッチをなす、午後列車
にて^(ゲント)ガンに趣く、明朝は和蘭の
旅を試むべし、これにて少し
つゝ旅行の数は終て行くも製
作の方は一向望むほどのもの
出来ず然し飛歩行旅にてはと
てもこれ以上の定まりたる事出来ず
和蘭は四五日間の旅程の筈にし
て今月中には巴里に帰り得んか

【欄外左側～翌日欄の欄外左側（縦書き）】

来信巴里より廻送[?]
松永、原、妻、林、吉田、加藤 三宅、平塚 堀、柳井、小
林、柿原、須田

7月22日 木曜

【欄外右上】

雨曇

【本文欄】

午前七時過の列車にて^{(アントワープ)¹⁸⁰} Anvers 着、
同地十一時の列車にて^{(アムステルダム)¹⁸¹} Amsterdam

に向ふ、税関の面倒あまりに事
なし列車の^(後)除行なると国境乗換
などにて甚た手間とる、

午後五時半^(アムステルダム)着
駅前^(ヴィクトリア・ホテル)のHôtel Victoriaに泊す、

直に須田氏の宿を訪る、須田氏^{(ロッテルダム)^(Rotterdam)}
今日 Rotterdame に趣かれたる

由にて小生の電報は不在中に着し
たる由、夕食後散歩して宿に
つく、

7月23日 金曜

【欄外右上】

曇

【本文欄】

午前須田氏と^{(国立美術館?)^(Musée Etat?)} Musée éta を観
る、^{(Rembrandt)¹⁸²} Rembrant の作品は以前
の記憶に在るもの見当らず未成品
にて^(?)絵具の生なるもの盛に塗られたるも
の在りしと思ひしに一向に見当らざる
は如何なる次第なるか不思議千萬
にして夢の如し、^{(van Dyck)¹⁸³} Van Dyc と共に
この^(美術館) Musée にて見るべき只一つの
ものか新画の部に、^{(Segantini)¹⁸⁴} Segantiny
のデッサン?一枚あり、午後市の
Musée を見る此所にも観もの尠
からず⁽¹⁸⁵⁾ゴツホ等、

7月24日 土曜

【欄外右上】

雨

【本文欄】

朝^(ビザ) Visa のため^(ベルギー)雨中白耳義
領事館門前に佇つ、大雨小
雨止みなし余は帽子より靴

- 180 鉛筆にて「アンベルス」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
- 181 鉛筆にて「アムステルダム」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
- 182 レンブラント・ファン・レイン (Rembrandt van Rijn, 1606-1669)。オランダの画家。
- 183 アンソニー・ヴァン・ダイク (Anthony van Dyck, 1599-1641)。フランドルの画家。イングランドで活動。
- 184 ジョヴァンニ・セガンティーニ (Giovanni Segantini, 1858-1899)。イタリアの画家。スイスで活動。なお、鉛筆にて「セガンチニー」と書き添えられているが、児島本人の筆跡ではない。
- 185 フィンセント・ファン・ゴッホ (Vincent van Gogh, 1853-1890)。オランダの画家。

外套は裏迄水透してやつと
正午頃門内に入るを待たる時
直に閉館なるを告ぐ、午後と明日
は休みなりと折角雨に三時間
目も濡れて何の効もなし、
(ロッテルダム)
Ratterdameにて受くる事として
再びこの苦しみを見ましこの日の苦痛
は終生忘れまじ
(博物館・美術館)
午後、Muséeに趣き僅か一
枚のスケッチをなす、
夕方須田氏を訪問す、

【欄外左側（縦書き）】

発 大原
矩一、妻、松永、吉田、小林、□□□□□
辻 夫原 林、三橋、柿原、都志、
柳井、兒島、

7月25日 日曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

九時の汽車にて Amsterdam (アムステルダム) 186 を
発す、途中 Leiden (ライデン) 187 に下車、Musée (古 代)
(Musée des Antiquités)
Antiquities (博物館) を訪れむかためなり、
昼食後museeに来る、日曜なるため
午後二時より開館との事、三時迄附
近を散歩して Muse (musée) を訪る、館中
(エジプト) (蒐集)
埃及の集蒐は最も驚くほど豊□な
るものとても、Bruxelle (ブリュッセル)
(Bruxelles) 188 などの比
にあらず？三時半の列車に投せむとて
急遽 (停車場) 停車に出つ日曜にてこの列車なし
五時半迄待つ間再び Musée に引返
して参観五時半発 (デン・ハーグ) 189 La Haye 夕食前
着往年投せし停車場前に泊す

7月26日 月曜

【欄外上側】

晴

【本文欄】

朝、日本領事館に趣く ? 館員参
勤なし、Musée (美術館) 190 を観る Rembrant (Rembrandt) 191

- 186 鉛筆にて「アムステルダム」と書き添えられている。兒島本人の筆跡ではない。
187 鉛筆にて「レーデン」と書き添えられている。兒島本人の筆跡ではない。
188 鉛筆にて「ブルクセル」と書き添えられている。兒島本人の筆跡ではない。
189 鉛筆にて「ラヘー」と書き添えられている。兒島本人の筆跡ではない。
190 王立絵画館（マウリッツハイス美術館）を観覧していると考えられる。後掲注194参照。
191 鉛筆にて「レンブラント」と書き添えられている。兒島本人の筆跡ではない。

の作品は往年より一層の光輝
(Potter)192
を發したる如見ゆ、Potteyの
牛と羊の大絵は先年甚だ感心
せさりしか其左下部の羊と
(シャヴァンヌ)193
草花のあたりはシヤンバンヌ以
上の裝飾的効果を得てしかも、
其の麗氣愛すべきものあり、
194
〔ヒザ〕(ロッテルダム)195
Visa正午頃終る直にRoterdame
(ベルギー)196
に趣き一時半餘にしてBeliqu
のVisa終る、佛国領事館に趣し
(デン・ハーグ)197
か其必要なしとの事夜夕方La Haye
に帰る

【欄外左側（縦書き）】

198
発赤木、金山、太田、原、Duthu、疋田、

7月27日 火曜

【欄外左上】

(デン・ハーグ)199
La Haye

【欄外右上】

曇

【本文欄】

朝早起、今日出発前(メスダグ美術館)Musée Mesdag
を觀とす、やつと開館頃Muséeを
(美術館)
探し出す、前回見し時にはかくほと思
200
さりしかMilletの作品油絵三点内
一枚の静物、パステル式枚あり、(セガ)
ンニーの(セガ)パステルはさほどの佳品に
201
あらず、(バルビゾン)派の集蒐は欧州
(蒐集)
にても有数なるものと云ふべし、
(アントワープ)202
正午過ぎの列車にてAnversに向ふ、
(停車場)
七時頃着停車前に宿し河岸の日本
飯屋にて夕食す、

7月28日 火曜

【欄外右上】

曇

(アントワープ)
Anvers

【本文欄】

朝散髪に趣き(博物館・美術館)Muséeを觀る、後
(Steen?)203
St□□□のMuséeを觀る余には始め
てなれと見るもの殆となし、
(大聖堂)
Catedralの前にて昼食を濟せ
(cathedrale)204

- 192 パウルス・ポッテル (Paulus Potter, 1625-1654)。オランダの画家。なお、鉛筆にて「ポッター」と書き添えられているが、児島本人の筆跡ではない。
- 193 ピエール・ピュヴィス・ド・シャヴァンヌ (Pierre Puvis de Chavannes, 1824-1898)。フランスの画家。
- 194 次の作品について述べたものと考えられる。
パウルス・ポッテル《牛》マウリッツハイス美術館蔵
- 195 鉛筆にて「ロッテルダム」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
- 196 鉛筆にて「ベルギー」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
- 197 鉛筆にて「ラヘー」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
- 198 赤木萬二郎か。赤木は児島と同郷で、平壤中学校校長、平城師範学校初代校長を務めた人物。児島が1918年に朝鮮を旅した際、現地で世話になっている。
- 199 鉛筆にて「ラヘー」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
- 200 ジャン＝フランソワ・ミレー (Millet, Jean-François, 1814-1875)。フランスの画家。
- 201 鉛筆にて「チ」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
- 202 鉛筆にて「アンベルス」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
- 203 ステーン城 (Het Steen) のことか。
- 204 鉛筆にて「カテドラル」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

〔ブリュッセル〕
(Bruxelles)205
三時の汽車にてBruxelleに趣

〔ヴィールツ美術館〕
(Musée Wirtz)
き直にMusée Wirtzを觀る往
年見たるほどの深き感しを與へ
ず、書籍店と写真機屋に出つ何
も買物をせず、六時過の汽車にて
〔ゲント〕
ガンに歸る、
この日一日なかゝに馳廻り
たり和蘭旅行も終り再びBrux
elles)206
Elleに出る必要なし、

205 鉛筆にて「ブリュッセル」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

206 鉛筆にて「ブリュッセル」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

7月29日 木曜

【欄外右上】

曇

【本文欄】

〔Pycke〕
朝Pyike君の家を訪問す姉出て
ゝ君の不在を告げ町余の氏の画室に
〔ホッフェンボム(画材店)〕
(Hoffenbom)
来る、尚外出中にて不在余はHoffenbome
〔カンヴァス〕
に趣き絵具カンパスを求む
〔Pycke〕
昼食後再びPyike君の家を訪れ
君已に家に在り同道して画室に
趣く、なかゝ大作尠からず然し在校
中に比して其の内面的進達を見さる
は残氣なり、夕食を共にし夜半
散歩して帰宿明日は再びブルー
〔ブルー
ジュ〕
ジに趣くべき哉

7月30日 金曜

【欄外右上】

曇

【本文欄】

〔ブルーージュ〕
朝九時過ぎの列車にてブルーシに
向ふ、朝来陰鬱なり、再び旧
寓に一週餘日振にて歸る、壁に
貼したる写生絵は未だ充分乾
き居らず、〔カンヴァス〕〔白〕
ならむ、午後小雨仕方なしに
宿の臺所に在りてこの宿の老人
の働きつゝある、と室内を写生し
終る
〔ゲント〕〔ブルーージュ〕
ガンに居ればブルージ迄来るのか嫌
になってガンで描て見たくなり、
ブルージに来て見れば今少し長く居

て何か大作を試みて見たし、

【欄外左側（縦書き）】

(Angèle?)
発 Angeles

7月31日 土曜

【欄外右上（縦書き）】

半晴

【本文欄】

午前朝寝したるため九時過より、郊
外に写生道具を運(十字)ふ Porte St
の門) Croix の側の風車を描く、空曇
りて風あり、風車幾星霜すてに
廃せられて風あるも用をなさず、
午後、宿の廊下より岸を眺めたる
写生を始む
夜久しく音信せさる知友にはかき
を発せんとて夜半迄筆をと
る、日記及重要なる手紙など旅行
中(意?)忘り居りて一晩位の事にてはは
かきさへ終らず

8月1日 日曜

【欄外右上（縦書き）】

来信
(Angèle?)
Angeles

半晴、

【本文欄】

朝早起、陰鬱なる空にて殆と
何所をも写生する氣持せず、
Anna を室に導きて三号の
カルトンに顔だけ写生した
かなり面白く出来た様だ今度の
旅での最もよい作品かも知れ
ぬ、午後昨晚からの日本への
はかきを書く、四時頃より昨日夕
方描き始めた、裏の廊下より岸
に撃きたるボートをと水とを望
みたものと画きつゝ、夕方都合よく日輝く、

【欄外左側・翌日の欄外左側（縦書き）】

(Pyike)
発 Pyike

金山、黒田、河原、今関、伊藤、草野、林、Duthu、長原、
藤島、有島、山下、山本、山内、上田、田邊、富永、
笹川、須藤、坂田、皿井、斉藤、妹尾、関、乙骨、岡崎、

- 207 次の作品について述べたものと考えられる。
児島油彩画総目録No.397《少女の像》
27.0×22.0cm、油彩・厚紙、大原芸術財
団 大原美術館蔵（所蔵品登録No.4077）
モデルのAnnaについては、7月17日欄
および前掲注178参照。
- 208 今関天彭（いまぜき・てんぼう、1882-
1970）か。漢詩人・中国研究家。児島の
住所録に本名（今関壽磨）がみえる。
- 209 長原孝太郎（ながはら・こうたろう、1864-
1930）か。洋画家・東京美術学校教授。
- 210 有島生馬（ありしま・いくま、1882-1974）。
洋画家。
- 211 山本森之助（やまもと・もりのすけ、1877-
1928）か。洋画家。
- 212 山内愚僊（やまうち・ぐせん、1866-1927）
か。洋画家。
- 213 田辺至（たなべ・いたる、1886-1968）か。
洋画家。
- 214 富永勝重（とみなが・かつしげ、1884-
1958）か。洋画家。
- 215 笹川慎一（ささがわ・しんいち、1889-
1937）か。建築家。児島の住所録に名前
がみえ、「大阪住友建築部」と記されて
いる。
- 216 須藤祐七であろう。児島と同郷の友人。
上海で須藤洋行を営んでいた。
- 217 皿井立三郎（さらい・たつきぶろう、
1870-1945）であろう。岡山市出身の医
師で、大阪で医院を開業していた。児島
家の親類（虎次郎の従兄正田直太郎の妻
は皿井の妹）にあたること。
- 218 関五夫か。児島の住所録に名前が見え、
住所は東京、葉山、大連（大連運輸、満
鉄用度課）、ロンドン、ドンカスターほ
かとなっている。

岡本、松原²¹⁹、松尾²²⁰、小野、三原、正木²²¹
森田²²²、満谷、矩一、切山、妻、大原、原、武内、柿原得、柿²²³↙
原政、林、奥島、柳井、三宅専²²⁵、
小林、三橋、石井、虻一郎

8月2日 月曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

(愛の湖)
朝Lac d'Amourの写
生をなす、只絵具にての
デッサンに終りたるも、其の
印象かなり現る、²²⁶
午後朝早く、室より(鐘)
Carillon²²⁷
の塔の絵を改作す、
午後廊下の構図について
(種々?)²²⁸
種思考す
夜手紙数多を認む²²⁹

8月3日 火曜

【欄外上側】

曇

【欄外上側～本文欄】

(愛の湖)
朝来曇にてLac d'Amourの写生できず
(野菜市場)
朝Marche aux Legumesの小写生をなす、
(ブリュージュ)
昨午Bruges引揚を決心
(如)
す、幾何程望み案したりとて
なかゝに廊下の構図定まらず、
偶然昨日隣の画家の
廊下にて写生しつゝあるを思出
て幸に此の朝出會して其由を²³⁰
語りたるに昼すき表てポーズ
する事を話せられて一時間ほ
と写生す、遂に日光を見す終る、
夜荷物の支度をなす、

【欄外左側(縦書き)】

発輪 原、平塚、柿原 小林、林、堀、柳井、加藤
柳井はかき 原田、原田、橋本、都志、松尾

8月4日 水曜

【欄外右上】

曇

【本文欄】

- 219 松原三五郎(まつばら・さんごろう、1864-1946)であろう。洋画家、岡山市出身。
- 220 松尾哲太郎か。第六高等学校教授を務めた人物。
- 221 正木直彦(まさき・なおひこ、1862-1940)であろう。官僚、東京美術学校校長。
- 222 森田恒友(もりた・つねとも、1881-1933)か。洋画家。兄島とは東京美術学校の同期入学。
- 223 柿原得一(かきはら・とくいち、1881-?)。倉敷紡績で重役を務めるほか、大原孫三郎の手がけた各種事業を補佐した人物。
- 224 柿原政一郎(かきはら・せいいちろう、1883-1962)。倉敷紡績をはじめ中国民報社などで大原孫三郎の右腕を務めた。のちに代議士、宮崎市長、宮崎県高鍋町。
- 225 三宅専一か。大原孫三郎傳刊行会編『大原孫三郎傳』(大原孫三郎傳刊行会、1983年) p.75に、明治40年倉敷紡績入社者として名前がみえる。
- 226 次の作品について述べたものと考えられる。
児島油彩画総目録No.381《恋が沼》55.0×66.0cm、大原芸術財団 大原美術館蔵(所蔵品登録No.4057)
同作はブリュージュのミネワール湖(別名「愛の湖」)を描いたもの。
- 227 7月19日欄および前掲注179参照。
- 228 「廊下の構図」は、次の作品について述べたものか。
児島油彩画総目録No.387《人物 ブリュージュ舟宿》53.0×65.1cm、倉敷紡績株式会社蔵
同作品は、同目録No.388《ブリュージュ舟宿》の習作にあたる。
- 229 前日欄参照
- 230 鉛筆にて「幸」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

朝九時^{〔ブリージュ〕}ブルージュ発、^{〔ゲント〕}ガン

に向ふ

Pycke²³¹を直に画室に訪ぬ

不在なりHoffenbomeに趣

きて~~トワル~~を求む午前中、同道

して宿を求む、公園下のHotel^{〔ホテル〕}

Trocadero^{トロカデロ?}に定む

午後、町中を廻りて散歩す、

方々写生に都合よき所少からず、^ず

少しては写生もして足を止め

たく巴里にも早く帰らざるべか

らす心定まらず^ず

8月5日 木曜

【欄外右上】

曇雨

【本文欄】

朝来Pycke²³²を訪ねて外出

す、

午後雲と雨つゝきにて外

出さへ嫌なり

Pycke画室にて同氏の

肖像²³³写生を始む、

日暮迄かけて夕方より

外出す、

8月6日 金曜

【欄外右上】

曇雨

【本文欄】

午前散歩に費す、午後Pycke

の宅に趣きて昨日の肖像をつ

ゝく、夕方迄

雨よく降りつゝく、

肖像はなか^{*}くに面白く出来

たり

この如く雨つゝけは此地に滞

在したりとて、何のなす事も

なし今少し何か一枚位

製作始め得らるゝ^{ママ}れは結

構なるにと思ふ

- 231 鉛筆にて「ピカ」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
- 232 鉛筆にて「ピカ」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
- 233 鉛筆にて「肖像」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

8月7日 土曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

朝Pycke君と氏の姉の宅に趣
き姉の宅の近くなる、庭に趣き
て小さなVillaの建物の入
口を室内より描く、テーブル
の側に数脚の椅子ありて
(Pycke)
Pyike氏の甥と読書し
つゝある所を写生す、²³⁴
昼食後午後も写生をつゝけて夕
方終る、

8月8日 日曜

【欄外右上】

晴、

【本文欄】

早朝より庭園に趣きてPyike^(Pycke)
と同君の甥との鉛筆写生を
なす、
午後、Angele及Margeritte^(Marguerite?)
来る、Angeleの肖像を描く^{ママ²³⁵}
始む、僅か一時間ほどにて
明日を約して止む

8月9日 月曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

朝来園内の鉛筆写生をなす、
(Angèle?)
午後Angele来る、昨日の
(画布)
トワルを續く、四時帰、
宅を約しありとて早く帰る、
夕方、迄一人にて写生を修
む
夕方Pycke来りて散歩に
出づ
毎日の如く明日は帰ち巴塞むかと
思ふ、

234 次の作品について述べたものと考えられる。

児島油彩画総目録No.393《お茶時 習作》58.2×68.5cm、大原芸術財団 大原美術館蔵（所蔵品登録No.4100）

同作品は、同目録No.394《お茶時》の習作にあたる。これ以降8月14日までгентにて《お茶時》のための各種習作に取り組んでいることが確認できる。《お茶時》については、後掲注260参照。

235 「Angele (アンジェル)」(正しくは Angèle か) については7月11日欄参照。児島が第一次滞欧(1908~1912年)の際にモデルとしていた女性であることが同日欄に記されている。翌12日にアンジェルらと会食、30日に書簡を発信、8月1日に受信していることが各日欄に記されており、児島が制作に先立って彼女にモデルを依頼していたものと推察できる。

8月10日 火曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

朝来晴天なり、園に趣く Pycke
の姉〔モデル〕モテルとして来る、Rose〔ローズ〕
アンティーク色のワンピース²³⁶にて美し
AntiqueのRobeにて美し
色々とポーズを求むやつと
昼前に僅か写生す、
午後庭の鉛筆写生に水彩
にて着色す、夕方逆筆をとる、
夜Pycke〔映画〕と活動を見る、

8月11日 水曜

【欄外右上】

曇

【本文欄】

朝来曇天なり雨降る様子なけ
れとも、になか^{*}く太陽の出そふにもなし
園に出かく、Pycke未着、絵具
屋に〔画布〕とトワルト紙を求めに出かく
モテル〔モデル〕来るも陽光出てす、昼食後、
も式時間写生太陽の光に會
せず、終る
明朝出発、帰巴の筈なりしも尚
一日太陽を待ちて滞在する事
となす、夕方宿に帰る、町に新
聞を求めに出て早く帰宿 日記を書く、

【欄外左側～翌日欄外左側（縦書き）】

◎

来吉田、日本より「買てよし金送る」との電報来着の由吉田
君より通知し来らる²³⁷

8月12日 木曜

【欄外右上】

曇

【本文欄】

午前園に趣く、
Mr Robert^{ママ}?か Maurice
のバイオリンを奏するを写生
す、構図の中に置かむか
ためなり、

236 鉛筆にて「ロビ」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

237 児島が前年来大原孫三郎に依頼していたフランス現代絵画をはじめとする美術品の収集について、大原より承諾と送金の旨を知らせる電報がパリの留守宅に届き、これを吉田苞が旅先の児島に知らせてきたという意。

8月13日 金曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午後園に趣きて庭の写生をなす、
油にて

8月14日 土曜

【本文欄】

園に趣く、
毎日の如く太陽を待つ、
今日は巴里に帰らむか、と毎日
一日廿一日と日延す、
然し此地にて大作を始むる
ほと腰落付かず、又持帰る
事など考へて矢張巴里にて製作
する方好都合なるべし考て
見る□此度の旅行にては習作の
み試みる事とし愈々明日
出発の事に決し夜荷造を
なす、

8月15日 日曜

【本文欄】

此日朝九時、^(Gent)Gand 出発巴里への帰途に
就く、^(Tourcoing)Turcoing 及 ^(Muscron)Mouscron
の乗換に時を要し巴里に着したるは、
夕方、六時頃なりし、
吉田君と夜を深して語る、
車中、祭日なりしたため、²³⁸乗客多かりし、
国境沿道、戦場の跡を
過く原野市街の破壊のめ^{ママ}
様悲惨を極む、

【欄外左側・翌日欄外左側（縦書き）】

留守中の
来信 ²³⁹炭谷、²⁴⁰疋田 福島 原、平塚廣瀬阿藤須田、吉田、青
山
Duthu
小林、²⁴¹三宅克小林、岡本、林、^(岡崎、矩一)岡崎矩一、柿原、妻、

- 238 同日8月15日は聖母被昇天祭にあたる。
239 炭谷小梅（すみや・こうめ、1850-1920）
であろう。キリスト教の布教師。児島の
岳父石井十次による岡山孤児院の活動
を支えた人物。
240 阿藤秀一郎（あとう・しゅういちろう、
1888-1972）か。洋画家。現岡山県浅口
市出身。
241 三宅克己（みやけ・こつき、1874-1954）
であろう。洋画家。

8月16日 月曜 (記入なし)

8月17日 火曜

【本文欄】

午後、
〔モデル〕
モデル来る、二十号に写生を始
む、上衣を悦して腰据たる図
なり、

8月18日 水曜

【本文欄】

ラモレルに注文したる百号のキャンバ
ス〔カンヴァ
ス〕来る、
〔プリュージュ〕²⁴²
Brugesの構図を始む
午後モデル写生、

8月19日 木曜

【欄外上側】

『◎此の午後、²⁴³ 日我母の上に変事ありたるには
あらずや、^(ざる) 日面白からさ印象を受く

【本文欄】

〔プリュージュ〕^(モデル)
Brugesを午前 午後モデル

8月20日 金曜

【本文欄】

〔プリュージュ〕^(モデル)
Brugesとモデル

8月21日 土曜

【本文欄】

〔プリュージュ〕^(かかり)
Brugesの作にかりて日曜も外出
の暇なし、午後^(モデル)もモデルの写生に
追はる、帰朝も近づき夏の
製作も急かされば秋にせまらる、
心忙しき事限りなし、

8月22日 日曜

【本文欄】

〔プリュージュ〕
終日Brugesの製作

8月23日 月曜

【欄外右上】

晴

【欄外左側 (縦書き)】

- 242 児島が「プリュージュ (の構図)」と呼んでいる作品は次に該当すると考えられる。
児島油彩画総目録No.388《プリュージュ舟宿》130.0×162.5cm、高梁市成羽美術館蔵
7月から8月初旬にかけてのプリュージュ滞在時の取材と習作 (7月13~17日、8月2日、3日各欄および前掲注175、176、177、228参照)をもとに100号大のタブローをまとめようとしていることがわかる。10月24日まで本作の制作に関する記述がみられる。
- 243 児島雪 (こじま・ゆき、1856-1937)。児島虎次郎の実母。

来 林、矩一、Duthu

8月24日 火曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前中、Bruges(ブリュージュ)の作画、午後(モデル)モデル

来りて写生夕方頃齊藤君迎氏

を同道して来る齊藤君は借屋[?]

探し迎氏は下宿屋探しなり

吉田君と齊藤君と三人にて

支那飯に夕食し帰宅、

白耳義(ベルギー)より帰寓以来夜は勞

れて殆と筆とる暇なし日

本へ送るべき書信及通書

怠り^{*}て日過ぐ

日記も怠りたり

【欄外左側 (縦書き)】

来、須田

8月25日 水曜 (記入なし)²⁴⁴

8月26日 木曜

【欄外左側 (縦書き)】

発矩一、三宅、小林、山下、福島、林、

妻、齊藤、阿藤、岡崎、岡本

8月27日 金曜 (記入なし)

8月28日 土曜 (記入なし)

8月29日 日曜

【欄外左上】

Mariette²⁴⁵

Duthu

(Pycke)

Pyck

? ?

Porre

【欄外左側 (縦書き)】

来、佐藤

発原小林、妻兒島

244 8月25～31日欄は「デヴァリエール訪問記」に充てられている。各日の日記は記されておらず、受発信記録のみ各日の欄外に記されている。「デヴァリエール訪問記」については、10月26日欄および後掲注282参照。

245 マリエット・ド・ブライン (Mariette De Bruyn) であろう。兒島の住所録に名前がみえ、住所はгентとなつている。第一次滞欧時にしばしば兒島のモデルをつとめた人物と考えられる。

8月30日 月曜

【欄外左側（縦書き）】

癸来乙骨、矩一、柳井妻岡崎矩一

迎、□□より 三宅

癸三宅、東京三宅

8月31日 火曜

【欄外左側（縦書き）】

来加藤、関

9月1日 水曜

【本文欄】

午前旧作を引出して修製す、

午後〔モデル〕モテル来る、

昨日 Bon Marches 〔ボン・マルシェ百貨店〕にて求め

シアラブの上衣と支那の Jupe 〔スカート〕

を着さしむ美し、

昨日よりのデッサンを僅か

改むるのみにて大な□変化なく

描く事とす、

夕方、處用に外出、夕食後帰宅、

書信十数通を書くため夜を

深ふす

【欄外左側（縦書き）】

> 来妻： 林：、 矩一： 柳井、上田

藤島、金沢、

9月2日 木曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前中 〔ブリュージュ〕 Bruges の製作す

なかゝ半日位筆をとったのでは

如何ほとも描く事出来ず 〔モデル〕 午後モ

テルをつゝくるため当分仕方

なき哉

午後モテル来る、昨日よりのデッサ

ンをつゝく

夕方 Belle Jardinière 〔ベル・ジャルディニエール百貨店〕 に洋服の

假縫に趣く、

今夜 Lilas 〔クロズリー・デ・リラ〕 の會合あるも

少し勞れたる様なれば、欠席す、

早く床に就く、

【欄外左側（縦書き）】

発

金沢

三宅、佐藤、乙骨金沢上田、炭谷

疋田、柳井、加藤、妻、虻一郎林

(矩→)

矩、藤島、岡崎柳井兒島

9月3日 金曜

【欄外右上】

細雨

【本文欄】

朝来寒し瓦斯ストーブに点火す、

午前中少し (ブリュージュ)
Bluges の絵を

描く、午後 (モデル)
モテル来る、

夕方、三越の伊藤氏を (ホテル)
Hote

ル・ムーリス
Le Meurice) Meurice に訪、十分□會談

夕食後帰宅、

今朝より頭痛す、

松永氏宛の電報着 Bruges

に廻送す、

十時就床、

うまく発汗せず

【欄外左側（縦書き）】

来三宅、松永 山田放天の著書着 ²⁴⁶ Pycke

発加藤、福島木内松永三宅

9月4日 土曜

【欄外右上】

曇

【本文欄】

午前 (モデル)
モテル来る五十号の顔

面を描く、

午後先週約束せし ~~モテ~~

(マドモワゼル)
Mlle 来る、近側通の ?
プレテ

? (箱?)
ルタンの Pension ?) に在る

Mlle より顔美しからされとも

氣品あり

(肘掛け椅子)
Fautoille

に椅子で読書しつ

ゝあるを描く、

夕方 須田氏、独逸旅行よ

246 山田放天は当時國民新聞の記者で、のちに政治家として活動した山田毅一（やまだ・きいち、1887-1953）のこと。1919年に兒島が渡欧する際、同じ船に乗船していた。この日、兒島が山田から受領したのは次の著書と考えられる。

山田毅一『戦後の欧米漫遊記』放天義塾、1920年

同書は第一次世界大戦直後の欧米の状況をレポートしたものであるが、渡欧の船中や寄港地の様子についても多く字数を割いており、船中での兒島の談話も収録している。なお、兒島文庫中に同書1冊が確認できる（大原芸術財団 大原美術館蔵）。

りの帰途なりとて立寄らる、
齊藤君来訪夕食を共にす

【欄外左側（縦書き）】

来 Mariette

9月5日 日曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前中昨日午後の^{〔モデル〕}モテルを描

く尚一回^{〔ポーズ〕}poseを要す、

午後、先週日曜午後描き始めし

^{〔管理人〕}Conciergeの娘と其友を描

きつゝく やつと四時に三人

来室、今日は朝から仕

事の休みなかりしと、^{〔？〕}

心氣老の労れを覚たる事甚たし

夕方吉田君と夕食かてら

散歩に出て中川氏と三人

會食す、夜半就床

【欄外左側（縦書き）】

発松永、福島

9月6日 月曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

朝来天候よし昨日の終日の働きのにて

今朝は何となく労れを覚ゆ

ロンドンより来巴中の三越の伊藤氏を

案内すべく^{〔ホテル・ル・ムーリス〕}Hôtel Mauriceに出か

く（九時）^{〔ベルネーム〕}Bernehaime、^{〔ジョルジュ・プティ画廊〕}Jauge Petit

^{〔グラン・プールヴァール〕}Grand Bl.などを歩き廻つ^{ママ}支那

飯にて昼食す、午後同道して

帰寓、夕方まで話す、

夕食外出

天氣の晴日朗なる日には室内

にこもりて製作するの愚なるを

思ふ郊外に散歩てもすれはと

度々思ふ

9月7日 火曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

(ブリュージュ)
(Bruges) 朝の中Blugesの製作午後モデル来る、
(モデル)
齊藤君訪問し来る、
五時モデルを終へて 夕食かたゝ散^{*}
歩に出て十時帰宅
一日中朝から夜迄殆ど頭の休
養する暇なし帰朝の近づきたるた
めに心賑しきに哉 (ベルギー) 白耳義より
帰りて早く製作を終へて何れ
へかへ旅行する筈なりしも不得、
この□青高なる天空を望みつゝ毎日同
し様の事をして室内に暮さねはならぬ

9月8日 水曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

(ブリュージュ)
午前中、Brugesを描く、少し氣
(ゲント)
抜したる氣持早く Gandの
作にかゝりたし
(モデル) 午後、モデル来る、来客、(スベ) 西班
(イン) 牙行の事につき問合され
しと四時新井君の来訪とにて
(描く)
モデルを描暇なく過く、
夕方吉田君と三人連にて
(ベル・ジャルディニエール百貨店)
(Belle Jardinière) Bel Jardinierに趣く
夕食を新井君の宅にて受く
須田氏をHôtel Grandに[?]
訪問夜深して帰室

【欄外右側（縦書き）】

来村上松永

【欄外左側（縦書き）】

◎

発 大原、加藤
青山君の事
申し送る

9月9日 木曜

【欄外右上】

◎

晴

【欄外左上（縦書き）】

◎発夫豚、松永

Aman Jean

【本文欄】

朝吉田君と Petit Palais に趣く、余の

白耳義滞在中に開館せるもの

戦前と館内の装置を異にし尚数多の

新らしき作品を集□したり、Luxembourg

のそれに比して遜色なきものなり

午後モデル写生、夕方、佐藤氏

旅行より帰らる同氏のために

Grand Homme に室を求むべく

同道す、夜 Lilas に出席す、

9月10日 金曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前中、Bruges を描く、午後モデル

写生、先般日本より英国に来学

中なりし太田君の友人羽田氏、訪

問さる、(森川智徳氏、京都仏大) と共に

夕方岡見君来訪

夕食に外出吉田君と活動

に入りて帰る、

五十号の午後描きつゝあるもの殆ど

終了す、

日記を一ヶ月間程と書き□れ

終る事怨念にたへず

【欄外左側（縦書き）】

○ 矩一にムニエールの作品写真七葉を送□、

発妻、矩一

9月11日 土曜

【欄外上側（縦書き）】

快晴

【本文欄～欄外右側】

朝、日佛銀行に趣き3000受取

Beaux Arts に趣く通知状と大蔵省

への引出切手を引更へらる、

大蔵省にて3000受取

248 森川智徳（もりかわ・ちとく、1880-1970）。僧侶。のちに龍谷大学学長。

249 岡見富雄（おかみ・とみお、1890-1965）であろう。洋画家。

250 コンスタンタン・ムーニエ（Constantin Meunier, 1831-1905）。ベルギーの画家・彫刻家。

午後、^{ママ} ^(モデル) のモデル来る、僅か三十分

ほと写生し得、

新井君来り吉田君と共に又

^(ベル・ジャルディニエール百貨店)

Belle jardinièreに洋服の

仕立のため趣く、

夕方吉田君と散歩す、

◎廣瀬氏より、黒田氏に計りて一九二二年展覧會の事決定の²⁵¹↙

旨申来る、

【欄外左側（縦書き）】

来 Pycke 廣瀬 矩一、伊藤、柿原

◎

9月12日 日曜

【本文欄】

^(裝飾美術館)

(Musée des Arts Décoratifs)

午前 musee decorative

に趣く、昨日午後の^(モデル)モデルを

今朝約せしも差支ありしか来

らず、午後のモデルも差支

の由、昼食後吉田君と須田

氏を宿に訪ひ、藤岡氏と

^(植物園)

Jardin des Planteに遊ぶ

夕食後、カフェに時を過して

帰宅、

^(ブリュージュ)

Brugesの絵はなか^{*}思ふ様

に纏らず郊外に写生に出べ

くも其時を不得、

【欄外左側（縦書き）】

来 Pyck 矩一、加藤

発吉田小松太田、柳井

9月13日 月曜

【本文欄】

^(ブリュージュ)

午前中 Brugesを描き午後^(モデル)モデル

写生夕方散歩夕食に外出す、

此の春より買い求め度く切望せし

^(イスラーム美術の陶磁器)

(Céramique dans l'art musulman)

Ceramique dans l'art Musulaman

^(裝飾美術館)

ママ (Musée des arts décoratifs)

を昨 Musée l'art decorative

^(フラン)

にて2200frsにて買求む甚た

の高價なりしか古物は一層の高

價らしく、此の一部にて買切との

話なりしたため遂に買ふ事としたり

印刷の精良^(堪)嘆賞に絶たり、

【欄外左側（縦書き）】

発羽田、須田

9月14日 火曜

【欄外右上（縦書き）】

快晴

【本文欄】

午前外出散髪など、
午後^{〔モデル〕}モテル写生、夕方中川君
来訪夕食に外出
カフェに立寄り十二時帰寓

【欄外左側（縦書き）】

発 Mariette、廣瀬、
来 羽田、福島、高杉

9月15日 水曜

【欄外上側】

晴

【本文欄】

午前^{〔アリュージュ〕}Bruges 午後^{〔モデル〕}モテル
毎日の如[?]して変化なし
Brugesはな^{*}か終末を期
せず、午後[?]の写生もさほど
興乗[?]なくなる、

【欄外左側（縦書き）】

発 Tardy²⁵² 自宅、妻
三橋

9月16日 木曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

朝、日佛銀行に金の引出に趣き
途中寄[?]なとして正午帰寓、
午後^{〔モデル〕}モテル写生
夕方、^{〔ロダン美術館〕} Musée Rodin に^{〔Bénédict〕} Benedit
氏を訪問 Beaux Artsより
受取たる3000を渡す、
夕方散歩、夕食後^{〔クローズリー-デリラ〕} Cofe Lilas^{〔Café Lilas〕}
の會食に夜を深す

【欄外左側（縦書き）】

来、辻

252 児島の住所録に「Tardy」という名前が
みえ、住所は児島と同じエルネスト・ク
レソン通り18番地となっている。児島
が利用した貸しアトリエに関係する人物
であろう。

9月17日 金曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

(ボン・マルシェ百貨店)
(Le Bon Marché) (スカート)
朝、Bon marches に支那の jupe
を買求めに出かく絵具屋などに寄り
昼食後帰寓 (モデル) 午後モテル、支那の
赤き jupe を着けたる絵殆と
完製す首の colie なか (首飾り)
(Collier) *
うまく落付かず 色は全体に於
て美しくなり来れり、顔の描き方
未満なれとも此の上描けは折
角の感しを屠すべし 253
夕食後シネマに寄りて帰寓

【欄外左側 (縦書き)】

発

奥田 目

9月18日 土曜

【本文欄】

(モデル)
午前モテル来る、百号バイオリン
(スカート)
の絵の jupe を先日買った支那の
黄色な jupon と描き改めた (ベチコート?) 254
矢張この方か調和が面白い
様である、 255
午後前週のモテル来る夕方迄
にてこの式十五号描終りの
事となす
夕食後帰寓青山君又□か□
吉田君と外出して中川君を
訪ふ
帰朝迄三ヶ月を余すにみなる事に
氣つく、

【欄外左側 (縦書き)】

来信加藤、

9月19日 日曜

【欄外上側】

快晴

【本文欄】

午前中始めてのモテル来る、目昨日描き (モデル) ママ

- 253 次の作品について述べたものと考えられる。
児島油彩画総目録No.406《手鏡を持つ婦人》116.0×90.0cm、高梁市成羽美術館蔵
この日「殆ど完製す」と記されていることから、午前のプリュージュの絵、即ち《プリュージュ舟宿》の制作と並行して、9月4日以来毎日午後モデルを用いて本作品に取り組んでいたものと推測できる。
- 254 「jupe (スカート)」の誤りか。
- 255 次の作品について述べたものと考えられる。
児島油彩画総目録No.412《寓憩》168.8×132.0cm、大原芸術財団 大原美術館蔵 (所蔵品登録No. 4073)
同作品は6月に制作が進められていたもの(前掲注144参照)。これ以降9月21日まで同作品の修正に関する記述が確認できる。

²⁵⁷
〔マドモワゼル〕
Mlleの友人なり丈高く丈夫そふな
Mlleなり外套を手に持ちたる立姿を
写生す²⁵⁶、^(blouseブラウス)目ブルズの桃色と形かよ
く肉満たる体格に調和す顔
美しからされと温雅の味なきに非
ず、²⁵⁷午後吉田君と折角の快晴なれ
^(ブローニュの森)
^(Bois de Boulogne)
はと Bois de Blougneに出かけ林
中三時間余散歩す、夕方巴里に帰り
夕食後七八名の友人と會食カッフ
エにて腰を休む

【欄外左側（縦書き）】

来斉藤、伊藤、発斉藤、松永 ^(Meulemeester) 258
Mermeester

9月20日 月曜

【欄外上側】

晴

【本文欄】

午前須田氏来訪、同道して[?]絵具屋に
出かく、午後、ホテル来る、黄な^{ママ}
^(スカート)
jupeを修作す、
午後五時須田氏^(スペイン)西班牙に向
け出発のため^(駅)Gareに見送り
に急行す五時半過くるも列
^(プラットフォーム)
車フラットボームに入らず須田
氏の姿見へず、
買物なとしつゝ、夕食後ホテルに
須田氏を訪ふ切符賣切の
ため明日に出発を延され
し由、

【欄外左側（縦書き）】

発斉藤

9月21日 火曜

【欄外上側】

目

曇晴

【本文欄】

午前中在室、何かと、修作に時を過す
午後^(モデル)ホテル来り^(黄色いスカート)jaun jupeの
絵をつゝく 靴下と靴を
□色のものに改む これにて殆
と全体落付たり、

256 「25号」の意であろう。

257 次の作品について述べたものと考えられる。
児島油彩画総目録No.400《(婦人)》83.3
×59.2cm、個人蔵
以降、9月22日、25日(ただし消字あり)、
11月1日に同作品の制作に関する記述が
確認できる。

258 G de Meulemeester。児島がプリュージュ
で滞在したカフェ兼宿。観光船も運行
していた。

夕方にこの頃例の如く安支
那飯屋に趣^く
八時半帰宅、吉田君と話す、
日本より返信来^ずらす

9月22日 水曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前中、先日主曜日に写生した~~、~~
女の立つる絵の背面へルタ
サンブールの庭と噴水を
描き加²⁵⁹へた(ルーヴル美術館)ルーブル行
午後モテル来る、五十号の絵の
首と肩の辺をつゝけた、
これから明日からモテルを休め
て愈^(ゲント)ガンの製作を始め
る事にしよう帰る事を思出せ
は氣か非常に忙しくなつて
来た様である、

【欄外左側（縦書き）】

来 miette 奥村

9月23日 木曜

【欄外上側】

曇

【本文欄】

午前中、少しかたつけをして、百号大の^(カ)カ
ンヴァス^(ゲント)にガンの製作の構図を
始めた写生の時は武人の人物
であるか今四人を置く事にしたそれ
にて面倒か生²⁶⁰しるらしい、
午後、吉田君の外套注文に関し
て^(ベル・ジャルディニエール百貨店)
Belle jardinièreに出かけた、
夜、^(クローズリー・デ・リラ)Café Lilasの會合に趣く
留守中又齊藤君か来訪して
居った、

【欄外左側（縦書き）】

来松永、

259 消字されているが、前掲注257の作品に
ついての記述と考えられる。アトリエで
描いたモデルにリュクサンブール公園の
風景が組み合わされていることがわか
る。

260 次の作品について述べたものと考えられ
る。

児島油彩画総目録No.394《お茶時》162.5
×152.8cm、大原芸術財団 大原美術館蔵
(所蔵品登録No.4076)

ゲントでの取材と習作(同年8月7~14日
欄および前掲注234参照)をもとに100号
大のタブローを制作しようとしているこ
とがわかる。以降、10月24日まで本作の
制作に関する記述がみられる。

9月24日 金曜

【欄外右上】

細雨

【本文欄】

午前中^(ゲント)Gandの構図をつゝく、
午後も夕方迄、大体の^(デッサン)デッサンに

下塗の色彩を施した、
^(ブリュージュ)Brugesの如く手古摺すに

出来上らせたい

白い布の上にとれたけの構

図を描いて何か自分の表現

を試み得られた時而して尚

未試の仕事を希望しつゝ布面

のデッサンを眺めて居る間は

実に何とも云ない愉快さである

こんな^う會心の思いこの頃やつと

味ふ事が出来そめた

【欄外左側（縦書き）】

来佐藤

発 妻、石井

◎上田君へ^{(ポ ー ト サ イ}ポ ー ト サ イ
^{ド)}
ト鈴木店員の事申送る²⁶¹

9月25日 土曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午後^(モデル)モテル来る、前週日曜日のつゝき

の外套持て立たる図をつゝく、

午後正午前散歩を兼ねて昼食に外

出す、午後

午前中^(ゲント)Gandの作をつゝく人

物の配列やゝ佳なれとも、各人

物の比較となか^{*}うまく

行か^ず

夜吉田君と^(コメディ・フランセーズ座)Comdie Francais
^(Comédie-Française)

に^(『ドゥミ・モンド』)Le Demi mondeを

観る²⁶²

【欄外左上】

発 Mariette、

【欄外左側（縦書き）】

来三宅、疋田、柳井、斉藤、須田、目木内

261 「在ポ ー ト サ イ ド の 鈴 木 商 店 の 店 員 」 の 意 か 。 児 島 の 住 所 録 に 「 神 谷 徳 重 鈴 木 商 店 」 と し て 、 ポ ー ト サ イ ド の 住 所 が 記 さ れ て お り 、 こ れ に 関 連 す る も の と 推 測 可 能 。

262 アレクサンドル・デュマ・フィス (Alexandre Dumas fils, 1824-1895) 戯曲による演劇『ドゥミ・モンド (半世界)』。

9月26日 日曜

【本文欄】

午前中齊藤君来訪を約したるため
待つ、昼前来る、三浦氏と、
昼食に同道して、Musée
(Musée
美術館)
Guimet
ClunyにGuimeを観る、
(シャトーダン通り)
ママ
(Rue de Châteaudun)
齊藤を案して rue Châteaudun
方面の古董屋の方を廻つた
日曜日にて皆閉店なり、
夕方より日本倶楽部に夕食
に出来かく、夜十時頃次の
(サンジェルマン)
(Saint-Germain)
木曜日に Saint Geremain
行を約して別る、

【欄外左側（縦書き）】

来、

9月27日 月曜

【本文欄】

朝沢山日本より書信来る、午前中
殆と手紙読と新聞を観る、
午後、都鳥来訪、夕方迄談
合 夕食に外出、
廣瀬氏より、黒田先生にサロン出品
の事を相談したるに非常に近て
(欣?)
承諾の旨通信し来らるこれ
263
からこの用事か忙しいのと大原
よりの送金で絵の買入れもなかく
264
忙しいことである、

【欄外右上・右側（縦書き）】

発太田、山下、廣瀬三宅、柿原
発電
着為替の
事柿原
君へ

【欄外左側（縦書き）】

来柿原、大原、福島、金沢、原田昌、三橋
? 265
妻、矩一、林、藤島
疋田、廣瀬
大原よりの一九六五〇〇来る

- 263 鉛筆にて「瀬」と書き添えられている。
児島本人の筆跡ではない。
- 264 前掲注136、139参照
- 265 原田昌平か。児島の住所録に名前がみえ、住所は倉敷となっている。倉敷紡績で重役を務めた人物。

9月28日 火曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

天気も両三日曇かちてあつたか又再び

快晴の日に帰った

午前中、^(ゲント)Gandの絵をつゝく、

午後も夕方迄、中川氏夕方来訪

羽田氏も

夕食に外出、Belfortの御祭に

遊ひて夜半帰る、

Gandの今度の作は^(ブリュージュ)Bruges

の方□無難に行きそふである、

早く済せないで大原の用事かう

んとあるし展覧會日本出品の

件もあるし、

【欄外左側（縦書き）】

来矩一、柿原

9月29日 水曜

【欄外上側】

快晴

【本文欄】

午前十時^(サンラザール駅?)Gard St Azar^(Gare Saint-Lazare?)より、齊藤

吉田、三浦氏と共に^(サン=ジェルマン)St Germai^(Saint-Germain)□□

に遊ぶ 折悪しく^(美術館)muséeは

閉館、昼食前後、附近を

散歩し 町内の各古道具屋

をうろつき廻りて帰巴す、

各廃物様のものゝみを買求む

この中両眼鏡を買求む、

松永氏、^(ブリュージュ)今午後Brugesより帰

寓せりとて夜深く迄談合す、

【欄外左側（縦書き）】

^(柿原、矩一)発松永、柿原矩一

来関近藤

9月30日 木曜

【本文欄】

午前中製作 午後吉田君と日佛

^(ベル・ジャルディニエール百貨店)銀行、Belle Jardinier^(Belle Jardinière)に趣く

夕方、帰寓夜^(クローズリー・デ・リラ) Cafe Lilas

に出かく、
一日蒸^し暑く夕方より降雨、

今朝、帰朝費不足らしければ
送金の旨申送り置たるに電
報為替にて送金さる、

【欄外左側（縦書き）】

◎リオン正金²⁶⁶より送金、一四、
日本より電報為替のもの

10月1日 金曜

【本文欄】

午前中手紙など書く、昼前^{(ラモレル(画材店))} Lamorelle
に寄りて帰る、午後夕方迄^(ゲント) Gandの
製作、
夕方、書籍店廻り、ルクサンブ
ール^(リュクサンブール公園)の庭を散歩す秋葉
秋草秋色を競ふ昨年の
此頃はよく、写生に出かけ
たるに今年の夏秋は毎日室
に籠るの外なし、

【欄外左上】

来Marianne

【欄外左側（縦書き）】

リオン
正金²⁶⁷
発、大原、

10月2日 土曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前~~午後~~^(ゲント) Gand製作、
午後前週土曜日のモデル来
る、小さきものに顔の写生
をなす、
夜神戸西村氏夫妻、新井君
来訪さる、

Gandの絵の左方の三人は
先描た右の^(Pycke) Pyckeを濟せは大
体人物は終り風景の方にかゝ

266 横浜正金銀行リオン支店を指すと考えら
れる。

267 前掲注266に同じ。

れる早く済せねば
【欄外左側（縦書き）】
来加藤

10月3日 日曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前中^{〔ゲント〕}Gandの作
午後四時頃ロンドンより
加藤氏、来訪、
六時頃より^{〔フォントネー〕}Fontenay
に吉田君と三人連にて出か
く、
八時半頃巴里に帰り會食し
て帰る

【欄外左側（縦書き）】

発柿原近藤柳井疋田、関、金沢三橋、須田

10月4日 月曜

【欄外右上】

快晴

【本文欄】

午前午後^{〔ゲント〕}Gandの製作
左方の□花より空の目辺
を描く
夕方頭痛を催す外出、
加藤君来訪を約されて待
ちたるも来られず

【欄外左側（縦書き）】

来有賀、^{〔石井母、伊藤〕}石井母伊藤、岡崎、金沢
²⁶⁸柿原氏より復証来る

10月5日 火曜

【欄外右上】

快晴

【本文欄】

午前中、^{〔ゲント〕}Gandの製作僅か描きたる
のみ午後前週約したる^{〔モデル〕}モデル来る、
夕方より^{〔ベル・ジャルディニエール百貨店〕}Belle Jardinière
^{〔グラント・ホテル〕}きGrand Hotelに加藤氏を
訪問し十時過帰寓

268 復証とは、送金指示の内容を受取側で再確認・照合するするために、送金元銀行が発行する書類、またはその手続きを指す。

10月6日 水曜

【欄外右上】

晴、夕雨

【本文欄】

午前外出、銀行、C.N.P.

に趣く、書籍店などに寄り

昼過帰寓、

午後〔モデル〕モテル来るクロッキーを

試む

夕方散髪、散歩、

昨夕アマンシヤン氏、〔アマン=ジャン〕 C.T.²⁶⁹より

巴里に來られ余の留守中

來訪さる、先日来C.T.に訪問

すべかりしたため、幸に今朝先生

の宅を訪れて面談するを得、

日本より Salon 出品の件申傳ふ

【欄外左側（縦書き）】

來アマンジヤン

10月7日 木曜

【欄外右上】

晴

【欄外上側】

午後出かけ、Am

【本文欄】

午前中 Gand、〔гент〕 の製作

午後、Alard〔J.アラール画廊〕 に Cotte〔Allard〕 の²⁷⁰

作品を尋ぬ、作品の佳良

なるものなし、La Touche²⁷¹

に観るべきものあり

大原氏より依頼されし品

物などの買入に廻る此

日何物をも買すず、

夕方、Musée Rodin〔ロダン美術館〕 に

Benedit〔Bénédite〕を訪ふ

10月8日 金曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

正午の汽車にて Chateau Thierry〔シャトー=ティエリ〕
〔Château-Thierry〕

269 アマン=ジャンの居住地であるシャトー=ティエリ (Château-Thierry) を指すと考えられる。

270 鉛筆にて「コッテ」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

271 ガストン・ラ・トゥシュ (Gaston La Touche, 1854-1913)。フランスの画家・彫刻家・版画家。

に向ふ汽車延着三時頃
 Aman Jean氏の宅につく
 折悪しく先生不在、
 四時過迄家人と話合して
 帰途につく 午後七時着巴、
 此の日天気快晴秋色鮮
 美、幾何ほとにても写生出
 来そふなり
 夜深く迄日本への返事
 十数通をかく、

【欄外左側（縦書き）】

来伊藤、三宅、岡崎、柳井

10月9日 土曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

〔リュクサンブール〕
〔Luxembourg〕 〔美術館〕
 朝LuxembourgのMuséeを
 観 附近散策
〔モデル〕
 午後ホテル来りクロッキーを
 なす、
 夕方より写真器店に趣き
 折畳み1,580fを買求む
 小林、上田、柳井、青の吉田の諸
 兄よりの餞別にて1,000、²⁷²

【欄外左側（縦書き）】

発疋田、柳井、近藤、柳井、岡崎、原田、金沢、矩一、
〔柿原、妻〕
 三宅、柿原妻、石井、林、伊藤、有賀、藤島、
 山田

10月10日 日曜

【欄外右上】

晴 来Aman Jean、

【本文欄】

午前中殆ど何事をもなさす
〔ルーヴル美術館〕
 午後、久し振にLouvreを観る
 退出後昨日求めし写真器
〔チュイルリー公園？〕
〔Jardin des Tuileries？〕
 の試写を、Jardin T□□□1□□
 になす、
 夕方迄散歩して夕食後帰宅
 す、
 Aman Jean氏より来信

(La Touche)

La Toucheの作品は買ふ

べきものならむと□

10月11日 月曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

^(Gent)
午前中Gandを描く、

午後斉藤君来訪 日佛銀行にて

金を引出し ^(J. アラー ル 画 廊)
^(Galerie Allard)
Galarie Arard

に趣き ^(Cottet) ^(セゴビア)
CotterのSegovia

の百号大の夕景と、^(海 の 国 の)
^{(Dolleur au}

Pay de la mer ^{悲 し み}
^{pays de la mer)}の習作二十五号大

のもの式枚と La Touche

の六十号位のもの一枚 (窓側

に女子の座せるもの) と都合三枚

を買求む ^(カレブジャン 古美術店)
^{273 (Kalebdjian)} ^(エトワール)
Karberjian (etoil)

に趣く、

【欄外左側 (縦書き)】

来福島 ^(アマン = ジャン)
アマンシヤン

10月12日 火曜

【欄外右上】

晴、

【本文欄】

^(Gent)
午前中、Gand 製作午後、

^(モデル) ^(クロッキー)
^(croquis)
モデル来り croquie を試

む、夕方、外出、散歩して夕食

帰寓、手紙を書く、

【欄外左側 (縦書き)】

発長谷川

10月13日 水曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

毎日快晴にて暖かく此の節の気

候と思はれ^ず

^(Gent)
午前中、Gand 製作、午後

外出、両三軒 ^(古美術商)
^(antiquaire)
antiquir

を廻る大原より注文されし

273 次の3作品に該当する。

シャルル・コッテ《セゴビアの夕景》121.0
×190.5cm、大原芸術財団 大原美術館蔵
(所蔵品登録No.1061)

シャルル・コッテ《老婦と老漁夫》54.5
×73.5cm、同所蔵 (同登録No.1062)

ガストン・ラ・トゥシュ《赤い部屋》173.7
×100.6cm、同所蔵 (同登録No.1046)

後掲注277参照。ラ・トゥシュ作品の購入
については、10月7日および10日欄参照。

買物を集むるになか^{*}の苦心
なり、

【欄外左側（縦書き）】

来加藤 Desvallières²⁷⁴
(Marianne)
発 Mariette

10月14日 木曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前中、^(アント)Gandの製作殆と終了

に近からむか

午後、^(ベルネーム・ジュヌ画廊)
(Bernheim) Berneheimに趣きSimon

の祭の絵を9000にて購入

を約す²⁷⁵ Barone、^(ジョルジュ・)
(Georges) George

^(フティ画廊) Petitを廻り夕方、^(グラン・)
(Grand) Grand

^(プールヴァール) Baの活動に憩ふ
(Bds.) (映画) *

頃買物のため、非常に頭脳

の労れを覚ゆ、

^(オペラ大通り) Av d'Operaにて杖を求む

夜Cafe Lilasの會合に寄る
(クローズリー・テリラ)

【欄外左上】

来

10月15日 金曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

朝^(グラン・パレ) Grand palaisに昨日より開會の

^(サロン・ド・オートヌ) Salon d'Automの参観す、
(Salon d'Automne)

点数に就て多数を極むれ

とも、佳品の比較的尠少

なると思ふ

午後、^(パレ・ロワイヤル) Palais Royalの古董屋
(骨)

にて一通陶器を點検す主

人留守なり

夕食後帰宅、

10月16日 土曜

【欄外右上】

晴、

274 ジョルジュ・デヴァリエール (Georges Desvallières, 1861-1950)。フランスの画家。

275 次の作品に該当する。
リュシアン・シモン《曲馬場》134.5×182.0cm、大原芸術財団 大原美術館蔵 (所蔵品登録No.1063)

領収書(大原芸術財団 大原美術館蔵)により、「Berneheim」はベルネーム・ジュヌ画廊を指すことがわかる。後掲注277参照

【本文欄～欄外上側】

^(アント)
午前中Gand製作、今日にて
筆を止むべき？

午後、加藤氏来訪、昼食を共
^(オペラ大通り)
にして、余のみ Av d'Opera

の写真屋に機械の修繕に

寄り、午後四時、手紙にて約せし

Desvalliere氏の宅を14

^(サン=マルク通り)

Rue St. Marcに訪ふ□丈高□

□の人何所かBeneditz氏に風
^(Bénédite?)

彩態度の似たるものあり子息と共に

余のために数多の作品を示さる、

^(待ち時間)
^(L'Attente)

La Attente百号大のものと同立長の^(縦?)

^(キリストとマドンナ)
^(Christ et Madonna)

Sacre Criste et Madonna □

の忒点を買求□ 5000 4000共に旧作にて

1903と1905のもの²⁷⁶

残念なれと近作一つも

なし

夜加藤氏来り日本食をなす

【欄外左側（縦書き）】

来、林、笹川、加藤柳井、矩一、三宅

10月17日 日曜

【欄外右上（縦書き）】

終日終夜

雨、風

【本文欄】

朝早く、三浦氏来訪、松永氏、午後、青山

落合、及斎藤君など終日来談、

夕食を吉田、松永の諸と共^{ママ}に日本

食炊事、

今朝五時頃、腹痛を催す、

下痢せず、多分廻蟲ならむか^(回)

正午、も朝も食事せず^ず、気分悪し

からされとも衰弱を覚ゆ

終日筆とらず^ず、今日は大に

^(ブリュージュ)
Brugesを修製すべかりしに、！[?]

【欄外左上】

来

276 次の2作品に該当する。

ジョルジュ・デヴァリエール《ミュージック・ホール》153.0×138.5cm、大原芸術財団大原美術館(所蔵品登録No.1055)。原題は「L'Attente (souvenir de Londres)」。

同《キリストとマドレーヌ》241.5×99.8cm、同所蔵(同登録No.1056)

同日付のデヴァリエールの領収書(大原芸術財団大原美術館蔵)により購入内容が確認できる。

10月18日 月曜

【本文欄】

(ブリュージュ)
午前中、Brugesの製作

夕方より吉田君中川君の伊太
利旅行のため、種々手傳なとす、
夜、九時十五分(ミラノ)ミラン經由にて
吉田中川両君発車さる

【欄外左上】

来 Pycke

10月19日 火曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

(ブリュージュ)
午前中 Brugesの製作、
(モンマルトル)
午後、Montmartreの古道具
屋に寄り日佛(日仏銀行)にて支拂金として

50000受取

(J.アラール画廊)(ベルネーム・ジュヌ画廊)
(Allard) (Bernheim)
AlardとBernehaime

に各残金の支拂をなす、²⁷⁷

夜加藤氏来訪

10月20日 水曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

朝、加藤氏を宿に訪ね、(サロン・ドートンヌ) Salon d'
(アティ・パレ) AutonとPetit Palaisを

観る、午後、齊藤君を訪問

夕方迄話し夕食後、帰宅、

明日 Monet氏を訪問の約²⁷⁸

をするため、

夜加藤氏来訪、夜半頃、

加藤氏の肖像を八号に

写生す、

【欄外左側 (縦書き)】

来加藤静

10月21日 木曜

【欄外右上】

晴

277 J. アラール画廊およびベルネーム・ジュヌ画廊への支払い内訳は現存する領収書 (大原芸術財団 大原美術館蔵) で確認できる。ただし、ベルネーム・ジュヌ画廊の領収書は前日の10月18日付となっている。購入作品については前掲注273および275参照。

278 クロード・モネ (Claude Monet, 1840-1926)。フランスの画家。

【本文欄】

午前中、何事もな^す 午後^{〔ジヴェルニー〕}一時の
汽車にて Giverny に Monet 氏を
齊藤君と訪問す、^{〔ヴェルノン〕} 式時半 Vernon
着、自動車にて五キロの道をたどり
Monet 氏を訪ふ三つの画室を見
庭園を見廻る、茶の御馳走になる、
氏は一個大なる画室を新築して殆
と終生の如き大作に従事す、
式メートルの高さにて巾四メートル
の^{〔panneau パネル〕}パノ一式三十枚悉く氏か庭園
の一部を描きしもの、写真沢山撮
夕方、六時半の汽車にて八時半帰巴、

【欄外左上】

Mariette

【欄外左側（縦書き）】

来原
林氏より郵便為替
四〇〇来着
天晴れて秋色美しく
セーヌの水静かなり

10月22日 金曜

【本文欄】

朝柿原君より何時立つかとの電文来る、
何か変事の起りしには非ず哉
柿原君へ返電す、尚此地に一ヶ
月滞在の予定なる旨
午前中^{〔ブリュージュ〕} Bruges の製作今日は
うんと描き改む昼迄静かにして
氣が乗て製作した
正午過長谷川潔君来訪、
午後<sup>〔デヴァリエール〕
〔Desvallières〕</sup> ラモレルに Devallière の作
品を検す損所を生せり、
夕方^{〔グラン・ブールヴァール〕} Grand Bld に出て□と皿を求む
<sup>〔パレ・ロワイヤル？〕
〔Palais Royal ?〕</sup> Palais Lyal にて皿^{〔三枚〕}三枚を、
夜深く迄手紙数多書く

【欄外左側（縦書き）】

来、原氏より^{〔一五〇五〇六〕}一五〇五〇六
一五一六買物代来る
金山、山田、矩一、三宅、
加藤

◎柿原氏より来電、発電柿原

10月23日 土曜

【本文欄】

午前中製作する筈なりしも何事をもな^ずす、
外出して古道具の用達に費す、
午後Sara Bernard(サラ・ベルナール) 279のAtelie(稽古場)を
観る尚高齢に達したれと尚其のArt
は鮮なるもの何所となく調子の高き
ものなり、其の齒切のよき発音は力あり
て格あり、彼れは[?]目隻脚たる故殆と
座したるまゝなるも、如何にもよく其の
雙手の働きによりて其の感しを現すに
遺憾なし、夕方帰宅後珍らし
く早く就床、

【欄外右上（縦書き）】

発妻、加藤
笹川金山
柳井三宅
矩一、山田
柿原、原
都志

10月24日 日曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前中、Bruges(ブリュージュ)の製作殆と完結を
告ぐ午後少し筆とる、
夕方、散歩に出て写真をとる
先日 Monet の所にて影せし写
真の総ては、不注意によりて
殆と駄目らし何とも申訳のなき
事をしたり、
今日から時計か原の如く
一時間遅れた時間となる、²⁸⁰
夜手紙をかく、

10月25日 月曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

279 サラ・ベルナール (Sarah Bernhardt, 1844-1923)。フランスの舞台俳優。

280 サマータイムが終わったという意。

午前九時半の列車にて Aman Jean
〔シャトー＝ティエリ〕
氏を Chateau Thierry に訪ふ、正午
着、駅前にて昼食、写真機を携へたる
ため戦跡を撮る Aman Jean 氏、幸
在宅午後四時の列車迄、話す、
サロン出品の日本出品の件、
など、写真数葉をとる、
この日秋晴、澄み渡りて、外
套不要なる位の暖さなり、
もう写生する暇なくなりたるは残
念この上なし

【欄外上側】

発 mariette

【欄外左側（縦書き）】

来、大使館、関、吉田、矩一
太田

10月26日 火曜

【本文欄】

午前中日本に発送すべき書籍の
荷造をした、午後一時過の列車
〔セーヌ＝ポール〕 〔デヴァリエール〕
〔Seine-Port〕 〔Desvallières〕
にて Sein Port に Devallier
〔セーヌ川〕
〔Seine〕
を訪ふ停車場より Sein を渡りて
向岸の氏の住宅に趣く、丁度
氏か散歩に出かける、戸口の所
にて會遇す、氏は再び向岸
の画室に導かれた今製作
中の大作は寺院の壁画
たるべきもの先日巴里にて画稿
を見たるもの再度氏の宅に帰り
茶の饗応を受け六時半の列車
にて帰巴す、

【欄外左側（縦書き）】

〔Desvallières〕 〔8月25日〕
Devallier 訪問の事²⁸¹ Aout の餘白²⁸² に記す

【8月25日欄の欄外右上】

十月廿六日
〔Desvallières〕
Devallier

訪問
記

【8月25日欄の欄外左上】

十一月四日
記

281 後掲注284参照

282 この日デヴァリエールを訪問した際のことと、「デヴァリエール訪問記」と題した文章にまとめ、空欄となっていた8月25日～31日欄、8月備忘欄、1月2日～16日欄に記している。

【8月25日の本文欄】

此夏殆ど暑を覚へなかつた^(なかつた)巴里の生活は何時の間にか夏か過ぎて秋に入った秋に入つても夏の間と殆ど同じ温度で毎日日々快晴か、
続て雨の日は此の世から去つた様である、
出発か次第に天氣か変化なく、何日と延へ続くので其の期日の早く過ぎるには驚く位である、
昨日はChateau Therry^(シャトール＝ティエリ)にAman Jean^(Château-Thierry)氏を訪 今日約してDevallières^(Desvallières)氏をSain Port^(Seine-Port)に訪問したのである
Devallières^(Desvallières)に先達て巴里で始めて會見^(初)

【8月26日欄の本文欄】

してその風格の崇高なると其生活の質素さを好愛した、今日始めて^(初)其の郷里のSain Port^(Seine-Port)²⁸³に趣く
事は一方ならぬ快事である、
朝出かけて昼飯のテーブルにつく事をすゝめられたか余は、
午後一時の列車でGard de Lyon^(リヨンの駅)にMelun^(ムラン)に出発した、
行く、鉄道すして、Corbeil^(コルベイル)の少し先きである、
此の日も朝からの快晴である、
郊外に出かけるには適好な和い

【8月27日欄の本文欄】

日である列車の客は皆附近から巴里に用達に通ふ人々の客である、一時間余て^(Seine-Port)Sain Portに下車した
Montigny Bauron^(モンティグニ)^(ブロン)などの駅も小さな
駅で乗降の客か稀たか此の停車場は格別である、下車したのは余と他に只一人の淋しそふな客であつた、停車場にも、駅員らしいのは見へない妙齡の^(マドモワゼル)Milleか切符を受取つて居る諸種
兼目化の駅員らしい、このMilleに^(Desvallières)Devallier氏の住宅を尋ねたアトリエ

【8月28日欄の本文欄】

は駅の前の庭の中に在つて住宅^(Desvallières)は河向なりと云ふDevallièresは今朝画室に来て居つた様である

283 デヴァリエールはパリの生まれ。1890年に結婚して以来、家族とセーヌ＝ポールで夏を過ごすようになったとのこと。

との話

踏切の柵を押通つて□□について数間少し
坂道を下つた左手の粗末な鉄
こふしの門かある、ベルも何にも[?]
ないから呼ぶ事は出来ないか鉄
の鎖てしはつた扉には錠か下し
てたので不在であると思はれた
十数間下をつゝ、^(セーヌ川)
^(Seine) Sain
の川岸に出た其所に一軒の淋□

【8月29日欄の本文欄】

Cafeかあつた店女に[?][?] Devallierの^(Desvallières)
宅を尋ねた傍の横渡し舟に乗つ
て向に渡るのたとの事、
恰も渡守の小舎に近づいた時河
の中央迄漕出した舟を後に引
返し出した中の一人の婦人客は何たか
^(おつぷつ)
ふづゝ云ふて居る
小さなこの横渡し舟の翁はゆるゝ静^{*}
かな水を漕て向岸に近付た再び
この渡守に^(Desvallières) Devallierの宅を^(尋ねると)尋ねと
又再び□よりも前方に進て居る
この乗合なりし婦人に声かけてこの

【8月30日欄の本文欄】

^(jeune homme) ^(Desvallières)
Jene Hommeか Devallier 氏の
宅迄行くのたから道を共にしやつて
呉れと乞ふて居る、婦人は道すから
^(Seine-Port)
Sain Portのよい所である事を自慢
して自分は今朝巴里に行つて帰り□
ある事をも話して婦人と辻の所で
別れて[?] 教て貰た^(Desvallières) Devallier の宅の
目呼鈴を引いた小門に近づいた
時恰度其の小門から出かけ^{ママ}
人かある、瘦軀偉大の人は^(Desvallières) Devallier
氏であつた氏は突然で驚たらしい
半すぽん^(ズボン)を穿て指のない手袋をはめて

【8月31日欄の本文欄】

何れへか出かける所らしい来意を告げた、
来意と云ふて只氏の生活とアトリエか
見物したい為であつた、
氏は、この両三日、頭痛して製作
に親しめないから今散歩に出かける
所であると云はれた、

一寸氏の宅へ導れて入つた、先達
巴里[?]て會た親孝行らしい息子さんは
全く見違へる様に仕事服を着て
本職の鍛冶屋さんに汗を流し
て居る、一式枚写真を乞ふた
(Desvallières)
Devallier 氏に向岸の自分の
〔アトリエ〕
Atelier に見て呉れとの事

【8月備忘欄】

最前の道を再び氏の色々の話
しを聞きながら川岸に出た
白ペンキで塗た渡舟に導れた
氏自身、オールをとつて川を横
切りそめた
氏は此の地に産れて此地に育て
られ此地を守つて早六十路に
も近きに盛に製作に親て居らる、
毎日この川を式三度往復すると
の事夕方、^{ママ}の日光は川岸の秋
色の森に影して居る川の流れ
は実に静寂である、よい心地か
する何たか見る旧の国にても旅して

【8月備忘欄の欄外右側（縦書き）】

一月二日の所へつゝく △

【1月2日欄の本文欄】

(Desvallières)
Devallier 氏訪問の事

八月三十日よりつゝく、
兩岸の森や林や丘か何たか不思議なほど優れて見へる崇高の念
か何所からか湧て来る様である
美しい鮮かな秋景かこの^{(Des}De
vallières)
vallier 氏の舟に乗せられ
て一層其の感しか□度になつ
た様[?]である、
向岸に上つて直傍の先に目付た
□□に□□□れた

【1月3日欄の本文欄】

画室は門を入れば直正面に見へる
半分[?]ほど[?]落葉したこの庭の樹木は
淋しそふに並列して居る、
落葉は一度も秋に入て掃て入
れられた跡も見へぬ、
或樹幹の下に雨晒しになつた
一脚の机と一脚の籐椅子か

置れてある、
氏は余に一寸この椅子に椅つて見
る事をすゝめられた、余を腰^{ママ}をおろした
前に在る机の上には数本の絵筆と

【1月4日欄の本文欄】

常に雨露に濡ればなしの水
彩絵具とか乱雑に置れてある、
氏は『自分は仕事に勞れた時、
この椅子によって冥想^(瞑)に耽ける
のである、其時何か胸に浮たもの
を直に画構に描くのであると』
其机と絵具について説明
された、
画室は入口の方も内部も実に
乱雑に取乱されてあつた

【1月5日欄の本文欄】

天井は高いかあまり、廣い画室では
ない其の入口の向奥に窓かある
窓から^(Seine)Seinの岸か夕日に輝
て見へる
入口横と両側壁に大きな
四メートル位の高さのトワル^(画布)
か一面擴けられてある
それ^(コバルト色)へ全部にcobaltの
デッサンか描かれてある、入口
左側のトワルは殆ど完き迄
に絵具で描上けられてある、

【1月6日欄の本文欄】

この^(パネル)panneauは或寺院の裝飾
絵であるそうた、今度大戦を²⁸⁴
画題としたので其左方の殆ど
□[?]から終つたものは
恰度、中央に位する、平和の
神か置れてある、
其左か人か死から榮に生きる
所て右方か人か生から死に
逝く所である、其の右方は戦
場の災禍を充分描き現さるゝ
積りらしい其平和の神の

【1月7日欄の本文欄】

直ぐ右方に天使か一人の斃た青い
兵士を腕にかゝへて神に近づい

284 制作時期とこの後に続く兎島の記述から、サン＝プリヴァア礼拝堂（ヴェール＝ボン＝デュ＝ガール）の壁画を指していると考えられる。

て居るこれは其氏の次男の
十八才になれる親父の後をついて
画家となるべき有望であつた愛子
が戦場で不帰の客となつた所
であるそふな
其の息子さんの死た所は或松林
の岳であつたそうふた其を記念する
ために其傍に樹葉か置れてあつ
た、氏に乞ふて其の筆をとられて
居る所を一式枚写真にとつた

【1月8日欄の本文欄】

少し急ぎ勝ちの氏は再び余を
導て氏の向岸の住に帰られた□
奥さんか来た茶の支度か出来ぬ
からとの事、て其娘さんか村
の娘達を集めて学校をして居
られるほど遠さに立派な屋敷に
趣た十人位の村娘か集つて
刺繡をやつて居られた なかゝ面白
いものか出来て居る様であつた、

【1月9日欄の本文欄】

此所ても一兩枚の写真をとつた
氏の宅へ帰つて茶を御馳走になつ
た汽車迄には尚時間もあるのて
色々日本の話しなど聞かると
まゝにした 三四人の女の子供さん
か居られた皆可愛□□子供さん
であつた
何所の間にかランプか運れ
て居る、其中に息子さんも室に入
つて来られた、皆親しく打解

【1月10日欄の本文欄】

けて話しをして呉れられる実に
氣持のよい家庭である、
外には月明かして居るらしい川岸
に夕霧か立そめて居る様である
このサロンの庭に面した両側
は大きな硝子窓であるか外
の光景か座してよく見へる、
氏は又余の帰りを舟て送るとて
同導して出かけた今日はよい心地
かした、先達 Monet の宅を訪れ
た時よりも、

【1月11日欄の本文欄】

四回目に渡るSain^(Seine)の流れは
日夕暗に一層静である、
氏は都の生活かつく^{*}嫌て
ある事を話された、自分の様な
年輩ては巴里に住む必要も
ないこの里に心静かに製作する
事か何よりの親しみと楽しみて
ある事を語られた
停車場に出たか汽車の時間
には尚少し間がある、

【1月12日欄の本文欄】

氏は宗教上の事について種々
話された、画室の中ても散歩
の道ても話され多くの美は
宗教の問題である、祈りか
氏の製作の生命である事は只画面
に表されて居る位の浅薄の
もので日はないらしい
今少し自分か仏蘭西語か
進むたなれはこの氏の尊い[?]
話をすつかり聞味□事か
出来るのであろう

【1月13日欄の本文欄】

自分等の様の弱輩には氏の話は
あまりに高遠な様な気がする
然しこの氏の態度に敬けん
の念の生する事は全く氏の値の
到す所であらうと思ふ
この停車場から乗客は一人もな
い其内に汽車か着た
氏はAu revoirとBon voyage^{(さようなら) (良い旅を)}
を告られて別れた

【1月14日欄の本文欄】

汽車の窓から静かな^(Seine) Sein
の岸と澄た満た月光か鮮に
眺められる、
あゝ、美しき夜の光と美しき
高き人の光は今此所て
一刻合和の高調を味
ふ事か出来たのである
氏の作品は今一般にはあ
まり好評てはないらしいそ□て

【1月15日欄の本文欄】

繪商人などの相手にするほど流
行見てもないらしい、
生活の生活の素^マなる其辺
から生して居るらしい
然し氏の製作と人生に
は実に無限の榮がある、
氏の作は何所迄も眞剣て
ある、全くの□他てあろう
其品格の高調なる事は

【1月16日欄の本文欄】

或は現代其比を画壇に
見る事は出来まい、

10月27日 水曜

【欄外右上】

快晴

【本文欄】

午前中、書籍の小包と製作をな
した、午後、散髪、写真店と、
^(ラ・ベ通り) ^(古美術店)
Rue de la PaixのAntiquere
に寄り大使館に山中氏を訪²⁸⁵
れサロン日本出品の成行の
事を話す 夕食後帰宅、

【欄外上側】

^(Pycke)
Pyck

Ar□□sse

来加藤

【欄外左上（縦書き）】

来三宅、
発加藤、大使館

10月28日 木曜

【欄外右上】

快晴

【本文欄】

^(アトリエ・ダール・サクレ)
^(Ateliers d'Art Sacré) 286
午前中外出、Atelie d'Art Sacré
^(Desvallières)
にDevallierの作品を観に出か
くさほど、ものものならざる様感ず
^(ベル・ジャルディニエール百貨店) ^(衣類)
^(Belle Jardinière) ^(habit) 287
Belle JardinièreにてHaditを
注文す、正午帰宅、午後Cottet
の宅を訪問不在、掃除の婆

285 山中千之（やまなか・かずゆき）か。外交官。児島の住所録に名前がみえ、住所はパリおよびアントワープとなっている。

286 アトリエ・ダール・サクレ（聖なる芸術工房）。ジョルジュ・デヴァリエールとモーリス・ドニによって1919年11月に設立されたアトリエ、芸術家グループ。

287 この時の注文書が現存しており（個人蔵）、その記載内容から「habit（衣類）」であることが確認できる。

さんに會談なるため歸寓、
(北 駅)
五時四十分 Gard du Nord
(Pycke)
着の Pay Pycke 君を出迎に
(オテル・デ・グランズ・オム)
趣く、Grand Homme に
(クロズリー・デ・リラ)
導く、夜 Lilas の會合
に出づ、松永氏の所にて
朝三時迄話す 不平談

【欄外左側（縦書き）】

発 齊藤、
来

10月29日 金曜

【欄外右上】

快晴

【本文欄】

午前中十一時四〇分の列車にて齊藤君と
(サン＝ジェルマン＝アン＝レー)
St German に Denie 氏を訪問す、
(Saint-Germain) (Denis) 288
昼食頃にて幸在宅来意を告ぐ
此日差支あるため、来週の水曜を
(サン＝トノレ)
約さる、三時巴里に帰り St Honore
(ラ・ボエシー)
Boelie の通りを散歩して、
(Boétie)
(marchand de tableaux)
方々の Marchan d'tablau に寄る、
(Ottmann) 289 290
Ottoman のもの一枚を買求む
昨夜睡眠不足なりしたため
(Pycke)
早く帰る、Pycke を訪ふ筈なりしも
見合す、

【欄外左側（縦書き）】

三宅
発
来 吉田

10月30日 土曜

【欄外右上】

快晴

【本文欄】

午前、Cotte 氏を訪問、画室の
(Cottet)
作品を直接に譲りてもよけれ
はとの事、先日大原よりの
(フラン)
電報にて十萬法送金する絵を
買へとの事、若し着金すれば
買求める筈、を約す、

- 288 モーリス・ドニ (Maurice Denis, 1870-1943)。フランスの画家。
- 289 アンリ・オットマン (Herin Ottmann, 1877-1927)。フランスの画家。なお、鉛筆にて「オットマン」と書き添えられているが、兎島本人の筆跡ではない。
- 290 次の作品に該当する。
アンリ・オットマン《風船売り（夏の頃）》、53×71cm、大原美術館旧蔵、現所蔵先不明
販売元はオスマン画廊。同日付領収書（大原芸術財団 大原美術館蔵）により購入内容が確認できる。

直に Menard²⁹¹ 氏訪問不在、
午後齊藤君三浦氏[?]来訪、[?]画室
の事にて外出、夕方、Belle Jardinier^(ベル・ジャルディニエール百貨店)
に趣く、夜都鳥氏^(Pycke)
と Pycke 氏来談

【欄外左側（縦書き）】

来、矩一、柿原、太田、Menar^(Menard)
武内、上田

10月31日 日曜

【欄外右上】

快晴

【本文欄】

午前十一時、大使館に天長節の遙拜式
に趣く、無慮式百名の集りにして、軍人
の海陸の将士、半数をしむ
大使館の祝賀式に集参したるは今
回^(初)始めてなり大使より晚餐に招せ
られしも、不参を答ふ
日本倶楽部にて昼食を辻、岡田氏
と共にす
午後帰宅、夜松永氏と夕食
会を催す

【欄外左上（縦書き）】

M'
来 原

11月1日 月曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前中、先般描きかけた、女の手袋を
手にした立た姿の背面とルクサンプール
の庭に描きかけたもの²⁹²を午前中に
描きつゝけた、
午後、臺所に女と子供の絵を少し
修製した²⁹³
秋冷か催しそめて絵具が少しも乾
かなくなつた、今日は瓦斯ストーブ
を傍に置いて暖めた、
夕食に外出して Pycke^(Pycke)を訪ね、
Grand Boul.^(グラン・ブールヴァール)に散歩した、

291 鉛筆にて「メナール」と書き添えられて
いる。兎島本人の筆跡ではない。

292 前掲注257および259参照

293 前掲注134参照

【欄外左側（縦書き）】

来岡本吉田、松尾、^[柿原、矩一]発柿原矩一、岡本
松尾、林圭母

11月2日 火曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前 Menard²⁹⁴氏を訪問風景画一点
を²⁹⁵求む、午後、Lebasque²⁹⁶氏を訪問
して来意を告ふ氏、風邪にて
画室に入るを不得と再来を約し
て帰る、^[ジョルジュ・プチ画廊]Georges Petitに展覧會
を観る、写真屋によりて帰寓
夜、辻氏来談、

Menard氏より小品を贈らる

【欄外左側（縦書き）】

発、上田、武内太田、関、妻
来
小包²⁹⁷1.2.3.を出す

11月3日 水曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

朝日佛銀行より30000受取²⁹⁸
十一時の汽車にて^[サン=ジェルマン=アン=レー]齊藤君と St Germa^[Saint-Germain]□ t
に^(denis)Denie²⁹⁹を訪ふ画室に作品稀にして
やつと、海³⁰⁰の絵を150000にて買求む
帰途^[オテル・ドルーオ]巴 Daurort^(Drouot)へ立寄りて^(Denis)Denie
及^(Flandrin)Flandrentなどの作品を
見る、
夜、辻加藤、^(Pycke)Pyck、[?]新井、住田
の諸氏来訪

【欄外左側（縦書き）】

来
小包、³⁰¹4.6.7.を出す、

11月4日 木曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

- 294 鉛筆にて「メナール」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
- 295 次の作品に該当する。
エミール=ルネ・メナール《森の嵐（雷雨到来）》83×121cm、大原美術館旧蔵、現所蔵先不明
同日付のメナールの領収書（大原芸術財団 大原美術館蔵）により購入内容が確認できる。
- 296 アンリ・ルバスク（Henri Lebasque, 1865-1937）。フランスの画家。なお、鉛筆にて「ルバスク」と書き添えられているが、児島本人の筆跡ではない。
- 297 数字のみ横書きとなっている。
- 298 鉛筆にて「受取」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
- 299 鉛筆にて「ドニ」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
- 300 次の作品に該当する。
モーリス・ドニ《波》100.0×124.0cm、大原芸術財団 大原美術館蔵（所蔵品登録No.1066）
同日付のドニの領収書（大原芸術財団 大原美術館蔵）にて購入内容が確認できる。領収書によれば、購入金額は正しくは「15000」フラン。
- 301 数字のみ横書きとなっている。

午前齊藤、三浦氏来訪、画室の
事にて外出、
正午前の汽車にて三人にてVersaille
にLe Sidaner³⁰²氏を訪問す、
一式枚の作品はあれども、
George Petit^{ママ 303}へ全分作品の
特約しありて直接売渡す事
不可能なりとの事、
近作にて百号以上の大の夕景の
海港、美しく見ゆ³⁰⁴
夕方の汽車にて帰巴、
【欄外左側（縦書き）】
小包、8. 9. 10 11 12 13. 14. 15 16.

11月5日 金曜

【欄外右上】

晴

後雨

【本文欄】

朝少し荷物の支度なとす、松永氏
の用事にてルーブル^(ルーヴル美術館)に趣く、銀行
Credit Lyonnais^(パリ国際銀行)
international^(internationale)にて電送を乞たる
100000fを受取る、写真屋により³⁰⁵
て夕方帰宅、Menard氏の所に
辻君か買ったスケッチの金を支拂に
行きLamorelleに寄る、
夜、藤岡、工藤³⁰⁶氏来訪、
小包郵送、5. 18. 20. 21. 22. 23. 24. 25
26. 27. 30. 32. 34. 35

【欄外左側（縦書き）】

◎

来 Duthu

発 柿原君へ十萬法着金の事を送電す、

11月6日 土曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前本の荷造なとした、松永君の
ために今日もルーブルに趣く
午後帰途セン^(セーヌ)の河岸の古道具屋の
前て三宅氏と會遇三宅の宿に

- 302 アンリ・ル・シダネル (Henri Le Sidaner, 1862-1939)。フランスの画家。なお、鉛筆にて「シダネル」と書き添えられているが、児島本人の筆跡ではない。
- 303 鉛筆にて「(部)?」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
- 304 後掲注380参照
- 305 鉛筆にて「メナール」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
- 306 工藤三郎(くどう・きぶろう、1888-1932)であろう。洋画家。

導れ昼食を支那飯に共にす
午後三浦齊藤氏来訪、所用の
ため外出
夕方、写真屋にて埃及〔エジプト〕のコレクション
ンを三十枚ほど求めた
夜三宅氏来訪されて夜半
に到る、

【欄外左側（縦書き）】

小包発36 17 24 33 39 40 37 30、

11月7日 日曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

〔管理人〕
今朝Conciergeの娘を描きつゝける事を
約して置たか何か³⁰⁷都合て不可能と
なる十一時頃から両三日前に買て来た
果物を卓上に置て菊の花を少し買て来
て式十五号に写生した、久しく絵筆を
握る事か雑用のために出来なかつたので
何たか非常に興か湧た午後三時頃
迄に終た、夕方散歩に出てPyck〔Pycke〕
氏を訪れ夕食を共にして同導、夜半迄
話合す、

【欄外左上】

来Marianne

11月8日 月曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前中、荷物支度、午後、Belle Jardinier〔ベル・ジャルディニエール百貨店〕
(Belle Jardiniere)
及、写真店に趣く、
夕方前Cottee〔Cottet〕氏を訪問不在、
Lebasque308氏を訪れ、式時間余ほど
談合す、
昨日より少し風邪の氣味早く
床に就く、

【欄外左側（縦書き）】

小包28. 31 41 42.

発妻、

307 鉛筆にて「かの」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

308 赤鉛筆で下線が引かれ、鉛筆にて「ルバスク」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

11月9日 火曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前中外出し不得、何かのた□つけ

午後前後Bd Sant denieにて化粧図の

衣類一着を求む夜製作を試る

つもりA日本郵船、約特約の

Ageanseに趣きて送荷の事を

問合す昼食後、夕方前Cottet氏

の処に趣きてMilleの肖像と馬の

絵を買求めた20000 10000 外にエッチング

二十五枚を求む1000、

夜三宅氏辻氏来訪三宅氏明朝

マルセーユに向へ出発の筈、なる由

【欄外左側（縦書き）】

発柿原

来、三浦

11月10日 水曜

【欄外右上】

晴深霞

【本文欄】

午前昨日買て来た(コスチューム)

着さしてクロツキーを試む、

Lamorelleに趣きHotel Grand

Hommnesに到着の永地及

小松氏を訪問不在

午後、陶器を買求めに

Grand Boulに出づ

夕方、Cotte氏より紹介され

たるVueiller氏をBd

Maresherbeに訪問不在

夜、辻、永地氏に會見

夜約束せしホテル来らず電燈を

直しつゝ、終にスイッチを損し滅燈となる

【欄外左側（縦書き）】

来加藤、斉藤

Davallière

Aman Jean

発三浦

309 次の作品およびそれらの習作等関連作品について述べたものと考えられる。

児島油彩画総目録No.433《祭の夜》161.3×114.2cm、大原芸術財団 大原美術館蔵(所蔵品登録No.4071)

同総目録No.435《祭の夜(カーニバル)》162.4×114.2cm、同所蔵(同登録No.4103)

同総目録No.434《祭の夜(タンバリン)》、162.4×114.2cm、同所蔵(同登録No.4101)

以上3点は、仮装した女性像を描いた100号大による組作品として制作されたもの(12月19日欄参照)。これ以降12月19日まで、これらの制作に関するものと思われる記述が見られる。

310 次の作品に該当する。

シャルル・コッテ《J. L. B. 嬢の肖像》195.3×97.2cm、大原芸術財団 大原美術館蔵(所蔵品登録No.1058)

同《荒地の老馬》69.7×93.7cm、同所蔵(同登録No.1059)

シャルル・コッテによる版画作品19点、同所蔵(同登録No. 1554~1572)

同日付のコッテの領収書(大原芸術財団 大原美術館蔵)により以上の作品が確認できる。ただし、領収書本文には「un lot de 24 épreuves gravées à l'eau-forte (エッチング24点一組)」とあり、一方、領収書中の作品一欄にあげられている版画作品は19点である。いずれも児島の日記にある「エッチング二十五枚」とは数が合わない。

311 鉛筆にて「ホテル グランド」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

312 永地秀太(ながとち・ひでた、1873-1942)。洋画家。

313 エドゥアール・ヴェイヤール(Édouard Vuillard, 1868-1940)。フランスの画家。なお、鉛筆にて「ヴェイヤール」と書き添えられているが、児島本人の筆跡ではない。

11月11日 木曜

【欄外右上】

霞

【本文欄】

午前中在宅、正午前 Aman Jean 氏
を訪問しサロン日本出品の事を計る、
今日は革明五十年記念を Ganbeta^(命)
のバンテオン遺葬、及び其他、無名の^(移)
戦死者のために国祭たり、
午後 Cotte 氏宅を訪れ数刻談合、
Cotte 氏より先日の支拂受取書と eaufort^(Cottet)
を受取帰る³¹⁵
Cotte の小スケッチを一枚買求む^(Cottet)³¹⁶
夜 Cafe Lelas に趣く、
^(クローズリー・デ・リラ)

【欄外左側（縦書き）】

発加藤、

11月12日 金曜

【欄外右上】

霞

【本文欄】

朝、平瀬、永地氏来訪 正午前
Aman Jean 氏を訪ふ不在、
午後夕方にかけて Zingg³¹⁷ 氏を
訪問し、風景画5000を求む³¹⁸
夜モデル来る筈なるも余の^(モデル)
帰宅を後れたるため帰る
Pyck 来談、
^(Pycke)

【欄外左側（縦書き）】

来斉藤、

11月13日 土曜

【欄外右上】

霞

【本文欄】

午前中、百号の構図、午後昼前
Aman Jean 氏を訪れ日本サロ
ン出品の事につきて今少し不決
定の件あれば日本にぞ見合せの事申
出す、
午後、夕方百号のデッサン

- 314 レオン・ガンベッタ (Léon Gambetta, 1838-1882)。フランスの政治家で共和国政府の樹立を宣言した人物。この日、無名戦士の遺骨の凱旋門への移葬とともに、ガンベッタの心臓がバンテオンに移葬された。
- 315 11月9日欄および前掲注306参照。
- 316 鉛筆にて「小」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
- 317 ジュール・エミール・ザング (Jules Émile Zingg, 1882-1942)。フランスの画家。なお、鉛筆にて「ジング」と書き添えられているが、児島本人の筆跡ではない。
- 318 次の作品に該当する。
ジュール・エミール・ザング《オーヴェルニュの風景》95×128cm、大原美術館旧蔵、現所蔵先不明
同《ピカル風景》31.5×47.8cm、大原芸術財団 大原美術館蔵 (所蔵品登録No. 1552)
同《ピカル風景》31.5×47.5cm、同所蔵 (同登録No. 1553)
同日付のザングの領収書 (大原芸術財団 大原美術館蔵) にて購入内容が確認できる。

夜、日本人倶楽部に余
都鳥、小倉氏のために送別會
催され出席、
夜半すきて写真現像、
【欄外左側（縦書き）】
来斉藤、

11月14日 日曜

【欄外右上】

細雨

【本文欄】

朝都鳥氏来訪約せし如く吉田
君と美術学校に趣く、午後
より開門との事^(ルーヴル美術館) Louvreに行く
午後、參觀^(モンパルナス 駅)
午後斉藤君と Gard Montparnasse
に出會を約したるありて共に Serusier
氏³¹⁹を画室に訪問す、
L'oiseau Bleu^(青い鳥)を7000にて
買求む³²⁰
夕方、斉藤君及 Madame³²¹ 三浦³²²
氏来訪、
夜佐々木氏の宅に招かれ夕食
に伊太利料理に出つ、

【欄外左側】

来
(Desvallières)
Devallier

11月15日 月曜

【欄外右上】

細雨

【本文欄】

朝早く、Zingg³²³氏来訪五六人への
紹介状を持参さる、
昼前より、Madrin^(マドレーヌ寺院?)の附近に
道具屋を見物に行く
Musée L'arts Décorativ^(裝飾美術館)
に^(Musée des Arts Décoratifs)
Alsacien^(アルザス地方)の exposition^(展覧会)を見る
写真屋に寄り帰る、
夕方モデル^(モデル)写生、大体の色を塗
る、
夜 Pycke^(Pycke)来談

- 319 ポール・セリュジエ (Paul Sérusier, 1864-1927)。フランスの画家。なお、鉛筆にて「セルエジエ」と書き添えられているが、児島本人の筆跡ではない。
- 320 次の作品に該当すると考えられる。ポール・セリュジエ《二人のブルターニュ人と青い鳥》64.7×80.0cm、大原芸術財団 大原美術館蔵 (所蔵品登録No.1027) 同作品は領収書が現存する (大原芸術財団 大原美術館蔵) が、日付が記されていない。
- 321 鉛筆にて「及び?」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
- 322 鉛筆にて「環」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
- 323 鉛筆にて「ジング」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

【欄外左上】

(Marianne) 324
Marianne

【欄外左側 (縦書き)】

来、矩一、三原、

11月16日 火曜

【欄外右上】

曇、晴、

【本文欄】

午前 Flandrin 氏を訪、外出の処

午後の往訪を約す、

昼前大使館に趣き松田道一

氏を訪ふ、³²⁶ (エジプト) 埃及行の旅券を

済す、

日本人倶楽部にて昼食す、

午後四時前 Flandrin 氏を

訪れ今春サロン出品の

(聖母の歌)
(Chanson de la Vierge)

Chansson de Vierge の作

を買ふ³²⁸ 6000、

夕方より^(仮)化粧の図を作る、

【欄外左側】

来

11月17日 水曜

【欄外右上】

曇

【本文欄】

朝、写真屋と Madren の傍の Antiquier
(マドレーヌ寺院?) (古美術商)
(La Madeleine?) (Antiquaire)

に趣く、昼前 Flandrin 氏を訪ひ

Madame Marval の画室に

て Petite Cleopatra を求む
(小さなクレオパトラ)

5000、Marquet 氏の画室

□も観る、一

(ベル・ジャルディニエール百貨店)
(Belle jardiniere)

午後、Belle Jardinier に寄り帰

路 Aman Jean 氏を訪問、

夕方モデル写生、

夜辻君来談、

朝 Allard にて Menard の作
(J. アラール画廊)

を買ふ^{334 335} 7650、一

【欄外左側 (縦書き)】

来加藤、原、岡本

小笠原

324 欄外左側と同じく来信の記録と考えられる。

325 鉛筆にて「フランドラン」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

326 松田道一 (まつだ・みちかず、1876-1946)。外交官。

327 鉛筆にて「フランドラン」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

328 次の作品に該当する。
ジュール・フランドラン《聖母によせる頌歌》114.2×162.4cm、大原芸術財団 大原美術館蔵 (所蔵品登録No. 1070)
同日付のフランドランの領収書 (大原芸術財団 大原美術館蔵) により購入内容が確認できる。

329 鉛筆にて「フランドラン」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

330 ジャクリーヌ・マルヴァル (Jacqueline Marval, 1866-1932)。フランスの画家・版画家・彫刻家。ジュール・フランドランのパートナーであった。なお、鉛筆にて「マルバル」「= (画家)」と書き添えられているが、児島本人の筆跡ではない。

331 鉛筆にて「の」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

332 次の作品に該当する。
ジャクリーヌ・マルヴァル《小ききクレオパトラ》97.1×137.7cm、大原芸術財団 大原美術館蔵 (所蔵品登録No.1076)
同日付のマルヴァルの領収書 (大原芸術財団 大原美術館蔵) により購入内容が確認できる。

333 アルベール・マルケ (Albert Marquet, 1875-1947)。フランスの画家。なお、鉛筆にて「マルケ」と書き添えられているが、児島本人の筆跡ではない。

334 次の作品に該当する。
エミール・ルネ・メナール《アフロディテ》83×61cm、大原美術館旧蔵、現所蔵先不明

同日付のJ. アラール画廊の請求書および領収書 (いずれも大原芸術財団 大原美術館蔵) により購入内容が確認できる。

335 以上2行は引き出し線で本文4行目と5行目の間あたりへの挿入が指示されているが、挿入すべき場所が明確でないため、そのままとした。

11月18日 木曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

(J. アラール画廊)
朝 Allard より為替の事にて来て呉れ
との事趣く、
Bonnard 氏を ³³⁶ Auteuil に訪ふ
在宅なりしも今直に見せるものなし
との事昼食後、昨日約せし
(Matisse) 337
Matiss の宅を訪ふニースにある
氏に電報し置きしもまた返事
なしとて (Mlle Matisse) 338 M^{lle} Matiss より数冊
後来らるべ返事あり次第、通知
するとの事、
(野生?) (Sauvage?) 339
夕方、Sovage の製作

11月19日 金曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

朝 ³⁴⁰ Martin 氏の宅を訪ふ不在、
Guerin 氏を訪ひ画室を見て、
伊太利の女の作を求む10000
(ラモレル(画材店) 343)
Lamorelle の Atelier にて到来の
絵を見る、
(ジョルジュ・プティ画廊)
午後 (Georges Petit) George Petie にて (Le Sidaner) 344 Sidanel
の價を聞きに寄る、
(仮装した?) (déguisé?)
夕方、Degurge の作をつゝ
く、

【欄外左側 (縦書き)】

発 小笠原岡本
原、
来斉藤

11月20日 土曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

(Agence?) ??
朝 Ageans Straus に趣き
(アントワーブ)
船のアンベルス代理店の宛名を
(ベルネーム・ジュヌ画廊)
聞く Berneheim と Allard に
(J. アラール画廊)

- 336 ピエール・ボナール (Pierre Bonnard, 1867-1947)。フランスの画家。
- 337 アンリ・マティス (Henri Matisse, 1869-1954)。フランスの画家。なお、鉛筆にて「マチス」と書き添えられているが、児島本人の筆跡ではない。
- 338 マルグリット・デュテュイ＝マティス (Marguerite Duthuit-Matisse, 1894-1982)。アンリ・マティスの娘。
- 339 三部作として制作が進められている100号大の仮装の女性像のうち、《祭の夜(カーニバル)》を指すか。前掲注309および後掲注361参照。
- 340 アンリ＝ジャン＝ギヨーム・マルタン (Henri-Jean-Guillaume Martin, 1860-1943)。フランスの画家。なお、鉛筆にて「マルタン」と書き添えられているが、児島本人の筆跡ではない。
- 341 シャルル・ゲラン (Charles Guérin, 1875-1939)。フランスの画家。
- 342 次の作品に該当する。
シャルル・ゲラン《タンバリンを持つイタリアの女》116.5×89.3cm、大原芸術財団 大原美術館蔵 (所蔵品登録No.1068) 同日付のゲランの領収書 (大原芸術財団 大原美術館蔵) により購入内容が確認できる。
- 343 鉛筆にて「ラモレル」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
- 344 鉛筆にて「シダネル」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

て荷物発送の事を依頼す、
(Phs. ファン・オメレン) 345
Mrs Ph. Van Ommeren
(アントワープ海運商会)
Comptoir Matitime Anversois
(アントワープ、ヨルダネス河岸25番地)
25 Quai Jordaens Anvers
??(フラン)
原氏書籍購入費1516fcs、銀

行にて受取る、

夕方、製作

夜、吉田、松永、Pyckの
(Pycke)

諸氏とCasino de Parisに行く、
(カジノ・ド・パリ)

【欄外左側（縦書き）】

目来 藤島、金沢

11月21日 日曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前室内整理、午後、松田氏藤岡君
346

同道にて来訪、夕方迄話合ふ

夕方モデル遅れ来る、製作
(モデル)

せず、
ず

夕食に出てシネマに寄りて帰る、
347 348

【欄外左側（縦書き）】

発加藤、柿原、大原、

11月22日 月曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

朝Doro□□eにMarquetの展覧会を
(ドリュエ画廊) (D r u e t) 349

見る、bohet□□の絵商にてOttoman
(ラ・ボエシー通り?) (Boétie?) (Ottmann) 350

の絵をラモレルに送る様申つく
351

午後Belle Jardinierに洋服
(ベル・ジャルディニエール百貨店) (Belle jardiniere)

の終りのessayageをなす、
(試着) (essayage)

夕方製作、

夜、外出せず辻君来る、
352

今日Academie d'Art Sacre
(アトリエ・ダール・サクレ)

に再びDevallierの作を
(Desvallières) 353

観る、如何にもよき作品なり

【欄外左側】

来matiss
(Matisse)

発matiss
(Matisse)

345 オランダの海運代理店フィリップス・ファン・オメレン。児島の住所録には、「Mrs PH. Van Ommeren」としてアントワープの住所が記されている。

346 鉛筆にて「整理」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

347 鉛筆にて「シネマ」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

348 鉛筆にて「寄」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

349 この日から12月3日までアルペール・マルケの個展が開催されていることから、同展会場のドリュエ画廊を指すと判断。

350 鉛筆にて「オットマン」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

351 オットマン作品の購入先は、現存する領収書（大原芸術財団 大原美術館蔵）により、オスマン画廊であることが確認できる（前掲注290参照）。同画廊の住所はオスマン大通りであるが、領収書には画廊の住所の他に、「G. DANTHON, PEINTRE EXPERT, 29, RUE DE LA BOÉTIE, PARIS」という印字があり、このことから、この日児島はラ・ボエシー通りにオスマン画廊の代表者G. Danthonのもとを訪ねたと推測できる。

352 鉛筆にて「田」が挿入されている。児島本人の筆跡ではない。

353 鉛筆にて「デヴァリエ」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

11月23日 火曜

【本文欄】

午前中宅に在り

(サン=ラザール駅)
(Saint-Lazare)

午後一時St Azarより齊藤、

354 (ジヴェルニー)

黒木氏とGivernyにMonet

(フラン)

氏を訪問す、予定の壹萬法にて

はあまり楚々たる小品なれば、

(睡蓮)
(Nymphaea)

遂に20000法にてNymphaeaを

求む30号

(ヴェルノン) (停車場)

Vernon夕方停車前を出て六時半の列

車を待ち八時半巴里着

前回訪問の時より僅かの間にモネ

氏、数多の大作を尽し居れり、

【欄外左上】

355

Allard

【欄外左側 (縦書き)】

(文部省、松田) 356

来、文部省松田

11月24日 水曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

(日仏銀行)
午前日佛より、30000引出により、

(ジョルジュ・プチ画師)

George Petitに寄りてシダネ目

の豫約の事を計る

(Matisse)
午後Matisseの所にて肖像を求む

357
10000前回見し作品に好みしも

のありしも売却を欲せず

(Marquet) (Marseille)
Marque氏の所により□Marsaill

358
の作を求む7000、

夕方製作

(Pycke)
夜三浦氏Pycke来談、

【欄外左側 (縦書き)】

来加藤、松田原、発松田、

11月25日 木曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

朝辻君来訪、手紙を書く

昼前Aman Jean氏を訪問

し昼食の御馳走になる、

354 黒木三次(くろき・さんじ、1884-1944)。のちに伯爵・政治家。美術コレクターとして知られる。

355 欄外左側と同じく来信の記録と考えられる。

356 「文部省の松田から来信」の意ともとれるが、この時期児島が外交官の松田道一と(おそらく東久邇宮稔彦王の絵画教師の件や旅券の件で)頻繁にやりとりしていることから、「文部省と松田からそれぞれ来信」の意と解釈するのが適当であろう。

357 次の作品に該当する。
アンリ・マティス《マティス嬢の肖像》72.9×53.9cm、大原芸術財団 大原美術館蔵(所蔵品登録No.1030)
同日付のマティス夫人の領収書(大原芸術財団 大原美術館蔵)により購入内容が確認できる。

358 次の作品に該当する。
アルベール・マルケ《マルセイユの港》65.0×81.0cm、大原芸術財団 大原美術館蔵(所蔵品登録No.1037)
同日付のマルケの領収書(大原芸術財団 大原美術館蔵)により購入内容が確認できる。

午後、^{(Lebasque) 359} Lebasequ 氏を訪ふ不在

夕方製作、

^(クローズリー・デ・リラ)
^(Café Lilas)

夜 Cofe Lilas に趣く、

今日は春の如く南の風にて

暖かし、夜月光澄み渡り

て氣持よし、

【欄外左側（縦書き）】

発 加藤

^(アントワーブ)
^(Anvers ?)

Averes

代理店

11月26日 金曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

^{(ラモレル(画材店))}

朝 Lamorelle に趣き荷造の事を依

頼す、午後諏訪に旅券の事を

依頼に行く、³⁶⁰

^(サント・ドニ通り)
^(Saint-Denis)

St Dini にてペルシヤの假

装を求む

夕方より百号の新なるものに

製作を始む、

前回の百号と對作となる

べきもの、³⁶¹

【欄外左側（縦書き）】

^(Matisse)

来 Mlle Matiss 齊藤、加藤、 発、齊藤、

11月27日 土曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

^(野生 ?)
^(sauvage ?)

朝 Sobage の作に修作、後、外出青山君の所にて大原氏

へ乞目ふべき作品弐点500

^(フラン)

法にて求む、

昼食後、M^{lle} Matisse ³⁶²より

受Mr Matisse より何か申来たる用

事あれとて来信ありしたため出かく

日本の書籍店にて50 Dessins de

Matisse の賣方を依頼したけれとて

^(住所)
^(adresse)

adresse を聞かる 余に一部贈らる、³⁶³

359 赤鉛筆で下線が引かれている。また、鉛筆にて「ルバスク」と書き添えられているが、見島本人の筆跡ではない。

360 「諏訪」は諏訪ホテルまたはその主人の諏訪秀三郎のこと。諏訪は出入国などの手続の代行も請け負っていたようである。

361 次のいずれかの作品について述べたものと考えられる。

見島油彩画総目録No.433《祭の夜》161.3×114.2cm、大原芸術財団 大原美術館 (所蔵品登録No.4071)

同総目録No.436《祭の夜 習作》161.3×114.2cm、同所蔵 (同登録No.4081)

また、これにより11月9日に着手した作品は、仮装した女性像3点(前掲注309参照)のうち、《祭の夜(カーニバル)》または《祭の夜(タンパリン)》であることが推測できる。

362 鉛筆にて「マチス」と書き添えられている。見島本人の筆跡ではない。

363 同年にマティスが私費刊行した画集 *Cinquante dessins* について述べたものと考えられる。見島文庫中に同書が確認できる(大原芸術財団 大原美術館蔵)。

夕方製作昨日のデッサンに下
塗の彩色をなす

【欄外左側（縦書き）】

来矩一、岡崎、諏訪満谷堀

11月28日 日曜

【本文欄】

朝、十時過 Aman Jean 来訪
夫人共、百号大の作のみ示す
三枚程、明年サロン出品を勧
めらる、吉田松永遠山氏³⁶⁴
も作品の批評を受らる、
午後 Lebasque 氏³⁶⁵を訪問、
先般見た絵、あまり進行せず^す、
小作式点を得かと考へつゝ次回
の来訪を約して帰る
夜モデル^(モデル)来る筈なりしも不参
夜 Pycke 来訪夜半を過く、

【欄外左側（縦書き）】

来 Mariette

11月29日 土曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前中、Lebasque を訪問の筈なりしも、
少し製作改修中、瓦斯ストーブにて
冬洋服の上着の背を焼て式寸位の
穴を作る外出するに春服を着るの外
なし正午 Lebasque 氏³⁶⁶を訪問不在
家人に托して7000法^(フラン)³⁶⁷にて式寸30号
を求むる事とす、午後 Belle Jardinier^(ベル・ジャルディニエール百貨店)
^{ママ}³⁶⁸ (Belle jardiniere)
にて外套を注文し冬服の焼穴の事
を計る^(共)友布賣切との事、
夕方帰宅、冬服^(共)の友布をトランクより見出
す夕方製作新なるキャンパス^(キャンパス)に昨日迄の図作画
始む

【欄外左側（縦書き）】

発加藤、

- 364 「遠山」のあとに鉛筆書きにて「五郎」と挿入されている。児島本人の筆跡ではない。
- 365 赤鉛筆で下線が引かれている。また、鉛筆にて「ルバスク」と書き添えられているが、児島本人の筆跡ではない。
- 366 鉛筆にて「ルバスク」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。
- 367 上書きされており、数字の1、2文字目が判然としないが、領収書（大原芸術財団大原美術館蔵）に記載された購入金額より「7000」と判断。翌日欄に、金額が訂正された旨が記されていることから、日記の金額も書き換えられたものと推測できる。
- 368 次の2作品に該当する。
アンリ・ルバスク《二人の水浴女》79.5×92.8cm、西宮市大谷記念美術館蔵、大原美術館旧蔵
同《サナリー風景》73.2×92.3cm、大原芸術財団大原美術館蔵（所蔵品登録No.1069）
翌日付のルバスクの領収書（大原芸術財団大原美術館蔵）により購入内容が確認できる。

11月30日 火曜

【本文欄】

(ベル・ジャルディニエール百貨店)
(Belle jardiniere)

朝 Belle Jardinir に布片を持行

く昨日 Lebasque に支拂たる³⁶⁹6000

(フラン)
法は千法不足にて7000法なりし由に

て来信のまゝ、昼前持参支拂、
午後、吉田君と布買に町を散歩
夕方製作、

藤岡君松田氏より太田君より

托送の^(カンヴァス)カンパス代金159□法

持参さる、

夜藤岡、吉田、^(と)工藤氏を支那飯

に行く、

【欄外左側 (縦書き)】

来 松田 Aman Jean

12月1日 水曜

【欄外右上】

快晴

【本文欄】

午前中、旧作の加筆す、

午後 Aman Jean 氏を訪れ、て

余の作品三点を贈る

小スケッチ

ルクサンブール

(シャティヨン)

Chatillon 式十号

花、紙に描きたる

氏の十五号位の

女の座せる習作を与へらる³⁷⁰

齊藤君か求めを乞ひ Aman^(アマン=ジャン)

(フラン)氏の作を1500法にて譲受て

持行く齊藤風邪にて少し

閉口、中、

夕方製作、夜十一時頃

より二時頃迄^{マネキン?}ma□□quinにて

作をつゝく

【欄外左側 (縦書き)】

発松田、

12月2日 月曜

【欄外右上】

細雨

369 赤鉛筆で下線が引かれている。

370 次の作品に該当するか。

エドモン=フランソワ・アマン=ジャン

《女性の肖像》油彩・画布、67.5×54.8cm、

児島虎次郎旧蔵

【本文欄】

〔ボン・マルシェ百貨店〕
朝、Bon marcheにトランクを買に行
く、貳個の大なるトランクと籠一

個を求む

〔Aman-Jean〕
午後A□□ Jeanを訪れて新
〔ソロボンヌ〕 ソロボン化学教室に張付たれ

たる氏の壁画、風火水土の
作を観る、³⁷¹ Aman Jean氏自ら

同道さる、

〔クローズリー・デ・リラ〕
夕方製作 夜Lilasの會

合に出席、

〔エジプト〕
埃及旅行を中止せんかと

〔種々〕
種思考す、荷物のためなり

【欄外左側（縦書き）】

発三浦

12月3日 金曜

【欄外右上】

細雨

【本文欄】

〔オテル・デ・グランゾム〕
朝、Grands HommesにPyckeを訪問
他に転宿したる由、一式古道具屋を
〔ベル・ジャルディニエール百貨店〕
廻りてBelle Jardinirに外套の
仕立合せに趣く、昼食後帰宅
夕方製作夜Pycke来談、

日本に送るへき買入れたる作品の持
運び等に関してなかゝの懸念に不
〔エジプト〕
堪一層、埃及旅行を中止して
平安に荷物の供をして帰るべき
事に決心し加藤君に丹波丸乗船の
事を断る

【欄外左側（縦書き）】

発電加藤

発黒木加藤、 来加藤

12月4日 土曜

【欄外右上】

雨

【本文欄】

〔カレブジャン古美術店〕
〔Kalebjdjian〕
朝、Karberjianに趣く正午後
迄皿參枚と壺を求む³⁷²4900

371 アマン＝ジャンによるソロボンヌ大学化学講堂のための壁画《四大元素》（パリ市所蔵）を指している。

372 同日付のカレブジャン古美術店の領収書（大原芸術財団 大原美術館蔵）の記載内容と作品に貼付けられているラベル、購入品リストほか関係資料との照合から、購入品4点のうち2点は次の作品に該当すると考えられる。

《刻線花文碗》イラン、サファヴィー朝、大原芸術財団 大原美術館蔵（所蔵品登録No.6069）

《ラスター彩糸杉文皿》イラン、サファヴィー朝、同所蔵（同登録No.6059）

午後諏訪に旅券を受取る
書籍店にて建築書を求む、独
逸書店に注文したる Segantiny^(Segantini)
の本を受取に行く賣目すてに
他の日本人に賣渡したりとの
事、
夕方製作右方のマドリンの^(マンドリン)³⁷³
女を描く、³⁷⁴
夜少しかたつけをなす、³⁷⁵

12月5日 日曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

^(セルヌスキ美術館)
朝 Musée Cernuschi を観る、重に
支那唐代の陶銅多し、漢周の
名品も少からず^す
午後、^(サン=ジェルマン)
^(Saint-Germain) St German の附近にて陶器
数点を求む
夕方前帰宅、旧作を修作す、
^(モデル)
モデル来らす^す
夜 Pycke 氏来談、明後日
伊太利に向て出発との由
始末終日多忙を極めしため折角
の来巴も氏のために尽す所尠少なりしを
怨む

【欄外左側（縦書き）】

発黒木、
来 Aman Jean

12月6日 月曜

【本文欄】

朝室内の少し整理をして³⁷⁶
昼前 Lamorelle に行く
午後弐時半、都鳥、永地、松
永氏を導きて Aman Jean
氏を訪問す、
夕方製作
夜、黒木氏来訪、

【欄外左側（縦書き）】

来加藤 書留にて郵船切付着^(符)

- 373 鉛筆にて「マンドリン」と書き添えられて
いる。児島本人の筆跡ではない。
374 児島油彩画総目録No.433《祭の夜》の画
面右奥に描かれたマンドリンを持った女
性のことを指していると考えられる。前
掲注309参照。
375 鉛筆にて「かた」と書き添えられてい
る。児島本人の筆跡ではない。
376 鉛筆にて「整理」と書き添えられてい
る。児島本人の筆跡ではない。

12月7日 火曜

【欄外右上】

曇

【本文欄】

朝、銀行にて20000引出し

(カレブジャン古美術店)
(オイラー通り) (Kalebdjian)

EulerのKarberjianに趣

(か、)
き正午過ぎ迄かりて、数

点の陶磁器を求む12000³⁷⁷

(ベル・ジャルディニエール百貨店)
(Belle jardiniere)

午後Belle Jarenirに

寄りて帰宅、

夕方製作

夜陶磁器の荷造をなす

Pyckeの伊太利出発を

送る、

【欄外左側（縦書き）】

来電加藤書留にて加藤君に

船切符を送る、斉藤

12月8日 水曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

(ベルネーム・ジュヌ画師)
(Bernheim)
朝、Belnechainにシモンの

(アントワーブ)
作品アンベルスより通告

なきため、取検を求めに行く

378
Petit、セザンヌの展覧会を

(ジョルジュ・ブティ画師) (Le
Sidaner) 379
観る PetitにてLe

(フラン)
Sidanelの豫約金、5000法

380
を渡して賣約をす、

(デュラン・リュエル画師)
(Durand-Ruel) (Renoir) 381
DuranにてLenoirs

の陳列を観るなかゝに

見るべきものあり

夕方製作、

夜黒木氏来訪

【欄外左側（縦書き）】

発加藤、来加藤、

12月9日 木曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

朝早く三浦氏来訪同道してGeord<sup>(ジョルジュ・
Georges)</sup>

377 同日付のカレブジャン古美術店の領収書
(大原芸術財団 大原美術館蔵)の記載内
容から、この時の購入品10点のうち1点
は次の作品と同定できる。

《青釉獸形双把手壺》イラン、12世紀後
半～13世紀前半、陶器、大原芸術財団
大原美術館蔵 (所蔵品登録No.6011)

378 ポール・セザンヌ (Paul Cézanne, 1839-
1906)。フランスの画家。

379 鉛筆にて「シダネル」と書き添えられて
いる。児島本人の筆跡ではない。

380 次の作品に該当する。
アンリ・ル・シダネル《漁舟》165×201cm、
大原美術館旧蔵、現所蔵不明

同日付のジョルジュ・ブティ画廊の予約
金領収書 (大原芸術財団 大原美術館蔵)
により購入内容が確認できる。同作品に
ついては、11月4日欄参照。

381 ピエール＝オーギュスト・ルノワール
(Pierre-Auguste Renoir, 1841-1919)。
フランスの画家。

プチ(画廊) (サン=ドニ)
Petit) (Saint-Denis)
Petitに趣く、帰途St Denieに

(販)
て化装衣、ポルトガル、セルビヤ、ペ
ルシヤ三着を求む⁶²⁰、
午後製作、先日来のキャンパス
を續く、
夜松永、織田氏の送別會
に日本人倶楽部に趣く

【欄外左上】

(アントワープの代理店)
(Agence)
Ageans d'Anvers
(バイクの友人)³⁸²
Ami de Pycke

12月10日 金曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

(ベル・ジャルディニエール百貨店)
(Belle jardiniere)
朝、Belle Jardinir
に趣く、
昼前所用数多[?]をなす、
午後夕方より、製作、
新なるトワルに始める筈
(画布)
なりしも Lamorelle^{(ラモレル(画材店))}より送りし
トワル粗悪なりしたため見合
す、
午後 Aman Jean 氏宅に寄
りて、黒木氏の所用を
傳ふ、
夜早く就床

12月11日 土曜

【欄外右上(縦書き)】

晴寒氣強し
黒木氏
午後二時半[?]
来訪

【本文欄】

(ぐずぐず?)
朝少しくづつして昼前町に出
づ構図に必要な楽器を求
むるため、^{383 (エジプト)} | 埃及の木偶を
購ふ
午後二時黒木氏来訪同道して Am
Jean)^{(Aman-} (Demeurisse)³⁸⁴
Jean 氏を訪問、Demolise 氏
と共に東伯爵³⁸⁵を訪ふ東伯爵、

382 後掲注390参照。

383 縦線が書かれている。内容の区切りを示していると考えられる。

384 ルネ・ドゥムリス (René Demeurisse, 1894-1962)。フランスの画家。

385 東久邇宮稔彦王 (ひがしくにのみや・なるひこ、1887-1990)。皇族・軍人、のちに内閣総理大臣。身分を隠すため「東伯爵」と通称されていた。

の絵画の教師として Aman Jean
(Demeurisse)
氏より Demorice 氏を撰定さ
れたるなり 東伯爵に拝謁す³⁸⁶
夜僅か一時間新なるデッサン
のため描く夜松田氏の夕食に招かる、

【欄外左側（縦書き）】

発坂本
佐々木、斉藤 Lebasque
来信太田、平野、斉藤
(Phs. ファン・オメレン)
(Van Ommeren)
Van Ommeron

12月12日 日曜

【欄外右上】

晴強寒

【本文欄】

(仮装した?)
(déguisé?)
朝、Digije の絵を修作、新井君
来訪、[?]正午過日本人倶楽部
にて松田氏と昼食を共にし
後、^(サロン・)
(Salon d'
ドートンヌ)
Automne)
Auton を観る、
(モデル)
帰宅モテルを約せしも来
らず、
三浦氏来訪、
夜深く荷造を始^{ママ}しめ、
書籍を詰込む、

【欄外左側（縦書き）】

来信太田—来信関、加藤
発溝口大佐

12月13日 月曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

朝 Aman Jean 氏を訪問、
明後日東伯爵来訪の旨を
告ぐ
午後吉田君と日佛^(日仏銀行)に趣き
(60000フラン)³⁸⁷ (オイラー通り)
□0000法引出 rue Euler
(ラゼス)³⁸⁸
(Rhazes)
にて Rages8200 と外に壺を
求む、
百目ポンドの為替を組む[?]て船

- 386 以上2文字を鉛筆で囲い、「拝謁」と書き添えられている。兎島本人の筆跡ではない。
- 387 金額を示す最初の数字はインク汚れにより判読不能。巻末の12月分出納ページの13日欄に「日仏より5935□」、同ページ欄外右上に「十二月十三日引出五九三五〇」とあり、これらのことから「60000法」と推測できる。
- 388 この当時、陶器の産地名と認識されていた。イランのテヘラン近郊の古代都市レイにあたる。

賃取替を支拂ふ

夕方製作

夜取かたつけ荷造をなす

【欄外左上】

発

12月14日 火曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

朝、〔ラモレル(画材店)〕 Lamrelle〔額縁〕に趣く額椽と

絵の荷造殆と終へんとす、

午後都鳥氏、帰朝の途

〔リヨン駅〕
〔Gare de Lyon〕
を Gard Lyon に送る

夕方製作、

夜一時過迄マズール

を人形にて描く、³⁸⁹

【欄外左側 (縦書き)】

来 Pycke Prils³⁹⁰

発加藤氏へ百ポンド

送る

12月15日 水曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前中取かたつけ、

午後一時半東伯爵邸

に趣き、Aman Jean

氏宅に同導し 後

〔Demeurisse〕
Demorisse 氏と四人に

〔ルーブル美術館〕391
てルーブル参観をな

す

夕方、製作、

朝荷物箱造にて午前中

〔ラモレル(画材店)〕392
多忙、Lamorelle の男来り手傳

【欄外左上】

発

〔Phs. ファン・オメレン〕
Van Ommeren

389 「マズール」はポーランドの民族音楽・舞踏のMazur (マズルカ)を指すか。その場合、児島が人形(マネキン)を用いて制作している作品は次に該当すると考えられる。

児島油彩画総目録No.434《祭の夜(タンバリン)》 前掲注305、356参照。

390 オスカー・プリルス (Oscar Prils) であろう。児島の住所録に名前がみえ、「Pyckeの友人」と記されている。住所はアントウェルペンとなっている。

391 鉛筆にて「ルーブル」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

392 鉛筆にて「ラモレル」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

12月16日 木曜

【欄外右上（縦書き）】

強寒○、四
晴

【本文欄】

〔ラモレル(画材店)〕
朝 Lamorelle の男来りて
箱造りの手傳をなす、
夕方より製作
夜、藤岡、393 — —
氏の饗応を支那飯店
に受く
〔クローズリー・デ・リラ〕
夜 Lilas の夕会に、

12月17日 金曜

【欄外上側】

○ 朝自宅より四個 〔ラモレル(画材店)〕
Lamorèlle より
六個 及松永氏
〔トラック輸送業者?〕
(camionneur ?)
の托一個を Camoner をして
〔リヨン 駅〕
(Gare de Lyon)
速達便にて Gard Lyon より送る

【欄外右側（縦書き）】

強寒○・四、
晴

【本文欄】

朝荷物かたつけ、午後 〔J. アラール(画師)〕
Allard
〔カレブジャン(古美術店)〕
と Kalebdjian に趣く
両者不在、所用不達、
夕方前買物して帰る、
〔モデル〕
夕方モデル写生、
何たか元氣なく製作に
氣乗せず、
夜夕食を羽田氏と
支那飯に共にす
室内荷物木箱にて四個、運送
店をして速達にて発送せしむ

【欄外左側（縦書き）】

来電、〔代理店〕
Agians 〔アントワープ〕
Anvers
発電
〔Desvallières〕
発 Devallier
小包にて錦絵□□送す
○○。

393 あとで出席者の名前を書き入れようと下線を引いておいたものと推測される。

12月18日 土曜

【本文欄】

朝 Aman Jean 氏を訪問す、明日
 来宅するとの事、
(ボン・マルシェ百貨店)
 午後 Bon marche に買物に趣く、
(モデル)
 夕方モデル来りて製作を
 つゝく
 夜吉田君と Belle R□ste を
(シャンゼリゼ座)
(Champs-Élysées)
 観る、Champs Elisées

12月19日 日曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前中新作をつゝく、十一時
 Aman Jean 氏来訪新作に
 つき批評を乞ふ
 ペルシヤ風俗をしたる女を中心と
 して三枚つゝきとして出品する筈な
 りしも左右の式枚のみにしたる方
 よからむとのとの事³⁹⁴
 午後三浦氏来談、
(リヨン駅)
 夕方松永氏を Lyon 停車場に
 送る、夜中原氏来談、
 深夜荷物のかたつけをなす、

12月20日 月曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

午前中少し取かたつけ、
 大使館に旅券の事目て出か
 ける、山中氏に面会松田氏
 不在
(装飾美術館)
(Musée des Arts décoratifs)
 午後、Museum L'art Decorative
 に Le□□s□□s の展覧會を観る
(ベル・ジャルディニエール百貨店)
(Belle jardiniere)
 Belle Jardinier にて買物し
 五時帰宅、製作
 夜、松田氏来談、
 新井氏、松永氏の跡に引越
 来る、
 夜深く荷かたつけをなす、

12月21日 火曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

(J. アラルール画廊)

朝、Allardに荷造箱代の支拂か

(ベルネーム・ジュヌ画廊)

Berne (Bernheim) 同様に余の方より

支払 (カレブジャン古美術店) 必要なき事を話して

承諾さる (Kalebddjian) Karbdiantにて

大原の指環式個を求む

午後、帰宅、夕方製作と

かたつけ頃日毎夜の如く

朝式時頃迄吉田君を

煩して荷造をなす

【欄外左側（縦書き）】

来松田、395 榎藤

坂本鍵造

12月22日 水曜

【欄外右上】

快晴

【本文欄】

(ラモレル(画材店))

朝、Lamorelleに出かけ絵具を

買求む _____

絵具屋 olive Frère N°150

Bou l. _____ に訪る、昼

過ぎて閉門

午後帰宅、数点の修作をなす

三時半より光線弱し、今日

は新春の如き快晴にて日光

鮮明なるに、

夕方、工藤、一 両氏来訪、

深夜迄荷物かたつけ

【欄外左側（縦書き）】

発、斉藤、加藤、

12月23日 木曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

朝、書信数通をかく、昼前日佛

銀行に趣き、10000引出す、

395 児島の住所録に坂本鍵造という名前が
みえ、「三島丸機関長」と書かれている。
住所は神戸。

午後、Bon Marche〔ボン・マルシェ百貨店〕に古布

を求む、

〔リヨン 駅〕
(Gare de Lyon)

Gard de Lyonにて切符

月曜夜八時半Marseille〔マルセイユ〕³⁹⁶

行の切符を求む

午後荷物たつけ、

夜松田氏を案内して支那

飯に趣き Theatre Cluny〔クリュニー 座〕を觀

朝四時明日発すべき荷造をなす

【欄外左上（縦書き）】

来矩一、

12月24日 金曜

【本文欄】

朝早く荷物を運搬すべく

運送人来る、

六個差出す、

日佛銀行に引出しに趣く

大原、余の分共に全部残

共引出す

〔ラモレル(画材店)
(Lamorelle)³⁹⁷

Lamorelleにて支拂なす

6901— 午後齊藤来

訪 Aman Jean 氏を

同導して訪問す、

【欄外左側（縦書き）】

発電

Young³⁹⁸

発信

Dei□

〔Malette〕

Marrette

〔Lebasque〕

Lebasque

12月25日 土曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

昨夜半より夏洋服の修繕にて

遂に夜□□す朝となりて

床に就とするも不能

林氏原氏の書籍の買物に出

す、午後不睡のため精神

明快ならず

396 鉛筆にて「マルセイユ」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

397 鉛筆にて「デヴァリエール」と書き添えられている。児島本人の筆跡ではない。

398 マルセイユにある日本郵船の代理店と思われる。

夜も何事もせず^早早く眠に就く

【欄外左上】

来

12月26日 日曜

【欄外右上】

快晴

【欄外右側（縦書き）】

暖かく春四月頃の如し

【本文欄】

朝、^(Bartholomé)Barthorome 氏を訪問す、

正午過 Aman Jean 氏の所

にて展覧會の件につき相談

に行く

午後、少し諸作に加筆す、

夕方より荷造をつゝく、

如何ほとたかつけてもかたつか

ぬと荷物の次第に益すのみ

にて閉口、

夜式時迄吉田君を煩して

荷造をなす、

【欄外左側（縦書き）】

発齋藤

12月27日 月曜

【欄外右上】

200

晴

【本文欄】

朝ラモレルに趣き荷物発送の受

取を得、絵具の不足を求む

午前中習作をつゝく、

午後齋藤君来る、Aman Jean

氏を訪問 Mr. Jzack 来談

話[?]サロン日本画出品の事に及ぶ

四時帰宅、少し荷かたづけを

つゝけ六時愈々画室引揚

七時頃^(リヨン 駅)Lyon 停車場に趣く、

八時三十分発、

【欄外左側（縦書き）】

来電

[?]Young

12月28日 火曜

【本文欄】

昨夜はうと^{*}かなり睡^マ睡^マされ
たり汽車は六人詰の所五人にて^(リヨン)Lyon
より三人となる、
十時半着のもの延着して十一時
半頃となる、Hotel Geneve
泊す、午後直横のYoungの
店に訪る 荷物は都合
よく運ふらしとの事、
夜少し買物と散歩して
帰る、

12月29日 水曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

朝十時の電車に投して^(エクス=アン=プロヴァンス)Aixに
向ふ車上式時間なれとも谷の
奇景なか〜にあかず
正午Aix着昼食をなし、^(博物館・美術館)Musée
を見る、あまり見るほどの所も
なし、^(アロヴァンスの古都)Ancien Captal de Provence
たけありて古風なる雅趣ある
都なり、空晴れて土色したる、
伊太利風の建築なか^{*}くに美し
式時発四時、帰宿、夕方買物
に町を廻る、

【欄外左上（縦書き）】

発吉田、

12月30日 木曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

松永氏と昨夜會遇す、
朝、^(博物館・美術館)来訪Muséeを觀る、
午後、市中を散歩す、
日本及、巴里への通信をなす、

加藤君よりの送金するべき筈の
書留待たれと来^すらす

12月31日 金曜

【欄外右上】

晴

【本文欄】

今朝早暁三島丸入港して

今午後発船の筈なりしか

通信出来ず入港未定と

の事

遠方に出かける訳に行かず

市中に暮す、

午後Hali□□の古街を散歩す、

夕方に至り船は明暁にあら

されは入港せずとの事、

【欄外左側～12月控え欄外左側（縦書き）】

発吉田、加藤、辻、自宅、柿原、

上田、

来信加藤来電田代

人名索引

- ・本表は、児島虎次郎日記（1920年）に登場する人物の名前・呼称と日付をまとめたものである。
- ・各欄について

「日記に記された名」

- ・日記に記された名前・呼称を五十音順に示し、続いて、欧米人のみ姓のアルファベット順に示した。
- ・欧米人の名前については、姓が不明、または姓、名、あるいはその他の呼称のいずれかであるか不明なため、漢字で記された名前については、読みの誤りのため、いずれも正しい順に配置されていない可能性があることをご了承いただきたい。
- ・「氏」「君」などの敬称は人物の特定に役立つ場合があるため、敬称が用いられている名前は敬称もあわせて示した。なお、「鈴木・佐藤君」のように敬称が複数の人物に係っている場合、敬称が直接係っている名前については「佐藤君」のように直接敬称をつけて示し、それ以外については「鈴木（君）」のように敬称を（ ）内に入れて示した。
- ・「鈴木一郎の姉」のように続柄で示された人物については、児島虎次郎との続柄で示された児島の親族と一部の例外を除き、名前の示された人物（例の場合は「鈴木一郎」）の情報として取り扱った。

「氏名等」

- ・日記の記述や関係資料から得られた情報をもとに人物の特定・推定を試み、「氏名等」欄に示した。なお、これらは更なる精査を要する段階のものであることをあらかじめご了承ください。
- ・該当する可能性のある人物が複数考えられる場合は、特定を避けて空欄とした。ひとりの人物であるが氏名がわからないものは「不明」、空見出しの場合は「-」とした。

「日記の日付」

- ・名前・呼称が記されている箇所を日記の日付で示した。「備忘」とあるものは該当月末の備忘欄を指している。

「参照先」

- ・本文の脚注に人物についての情報を掲載している場合は、「参照先」欄にその脚注番号を示した。

日記に記された名	氏名等	日記の日付	参照先
青野			
青野	青野俊一郎	6/ 備忘	注39
青野兄	〃	6/14, 6/19	
青の	〃	2/6, 2/25, 2/29, 3/18, 3/24, 4/20, 4/26, 5/3, 5/21, 5/24, 6/11	
青の（兄）	〃	10/9	
青の（氏）	〃	4/26	
青山			
青山	青山熊治	8/15	注45
青山君	〃	2/8, 3/9, 9/8, 9/18, 11/27	
青山（君）	〃	2/9, 10/17	
青山（氏）	〃	4/5	
赤木	赤木萬二郎？	7/26	注198
足立	足立桂次？	3/31, 4/11	注106
阿藤	阿藤秀一郎	8/15, 8/26	注240
兄上	-	→児島徳太郎	
姉	-	→谷田タキ	
アマン＝ジャン	-	→ Aman-Jean, Edmond-François	
	アマンシアン氏／アマンジャン／アマンシヤン／アマンシヤン氏／アマンジャン／アマンジャン氏		
新井			
新井完氏	新井完	6/ 備忘	注153
新井	〃	6/19	
新井君	〃	9/8, 9/11, 10/2, 12/12	
新井氏	〃	6/20, 6/23, 12/20	
新井（氏）	〃	11/3	
有賀	不明	10/4, 10/9	
有島	有島生馬	8/1	注210
井川	不明	2/8	
石井			
石井	石井家	3/18, 3/24, 3/29, 6/11, 7/3, 8/1, 9/24, 10/9	注93

日記に記された名	氏名等	日記の日付	参照先
石井母	石井辰子	10/4	注138
日向の母	〃	6/3	
伊藤			
伊藤	不明	5/5, 8/1, 9/11, 9/19, 10/4, 10/8, 10/9	
伊藤氏	不明 (三越関係者)	9/3, 9/6	
井上	不明	7/17	
今関	今関天彭?	8/1	注208
上田			
上田	上田喜平?	3/18, 6/5, 9/1, 9/2, 10/30, 11/2, 12/31	注94
上田	〃	8/1	
上田 (兄)	〃	10/9	
上田氏	〃	9/24	
上田 (氏)	〃	4/26	
遠藤	不明	2/25, 3/14	
太田			
太田	太田喜二郎	2/14, 3/8, 3/14, 3/28, 4/2, 6/11, 7/3, 7/26, 9/12, 9/27, 10/25, 10/30, 11/2	注57
太田君	〃	3/14, 3/26, 3/27, 3/30, 3/31, 4/1, 7/11, 9/10, 11/30, 12/11	
大原			
大原	大原孫三郎	1/2, 2/11, 2/13, 2/18, 3/29, 4/3, 4/7, 4/21, 6/17, 7/6, 7/24, 8/1, 9/8, 9/27, 9/28, 10/1, 10/3, 10/30, 11/21, 12/21, 12/24	注2
大原氏	〃	4/17, 10/7, 11/27	
岡崎	岡崎常太郎?	3/2, 3/31, 4/2, 6/5, 6/17, 6/25, 7/11, 8/1, 8/15, 8/26, 8/30, 9/2, 10/4, 10/8, 10/9, 11/27	注75
小笠原			
小笠原	小笠原長丕	2/21, 2/23, 4/28, 4/29, 7/3, 11/17, 11/19	注60
小笠氏	〃	5/7, 5/8	
岡田			
岡田君	岡田毅	2/24, 3/19, 4/14	注49
岡田 (君)	〃	2/9	
岡田氏	〃	10/31	
岡見君	岡見富雄	9/10	注249
岡本	不明	8/1, 8/15, 8/26, 11/1, 11/17, 11/19	
奥島	不明	8/1	
奥田	不明	9/17	
奥村	不明	4/20, 5/16, 5/23, 9/22	
小倉			
小倉氏	不明	11/13	
小倉 (氏)	不明	4/5	
織田氏	不明	12/9	
落合 (君)	不明	10/17	
乙骨	乙骨安昌	2/22, 2/29, 8/1, 8/30, 9/2	注63
小野	不明	8/1	
小野田	小野田鉄弥?	4/14, 4/21	注115
柿原			
柿原政	柿原政一郎	8/1	注224
柿原得	柿原得一	8/1	注223
柿原	柿原政一郎または柿原得一	2/18, 3/18, 3/24, 4/1, 4/5, 6/28, 7/21, 7/24, 8/3, 8/15, 9/11, 9/27, 9/28, 9/29, 10/3, 10/9, 10/22, 10/23, 10/30, 11/1, 11/9, 11/21, 12/31	注223, 224
柿原君	〃	10/22, 11/5	
柿原氏	〃	10/4, 10/22	

日記に記された名	氏名等	日記の日付	参照先
加藤			
加藤	加藤虎之助	2/11, 2/13, 2/23, 3/8, 3/9, 4/6, 4/9, 6/9, 6/13, 6/19, 6/25, 7/2, 7/3, 7/11, 7/17, 7/21, 8/3, 8/31, 9/2, 9/3, 9/8, 9/12, 9/18, 10/2, 10/13, 10/16, 10/22, 10/23, 10/27, 11/3, 11/10, 11/11, 11/17, 11/21, 11/24, 11/25, 11/26, 11/29, 12/3, 12/6, 12/7, 12/8, 12/12, 12/22, 12/31	注51
加藤君	〃	2/24, 2/25, 3/1, 3/2, 6/13, 6/20, 10/4, 12/3, 12/7, 12/30	
加藤氏	〃	2/19, 2/26, 2/28, 2/29, 3/3, 3/4, 6/21, 10/3, 10/5, 10/16, 10/19, 10/20, 12/14	
加藤静児君	加藤静児	6/8	注141
加藤静	〃	10/20	
加藤(氏)	加藤静児?	6/12	
金沢	金沢巖	3/31, 4/1, 4/6, 4/11, 6/28, 7/11, 9/1, 9/2, 9/27, 10/3, 10/4, 10/9, 11/20	注105
金山	金山平三	3/14, 6/5, 7/26, 8/1, 10/22, 10/23	注90
Kawaguchi氏	川口軌外	2/7, 2/8	注44
河原君	河原賀市	3/3, 8/1	注77
木内	不明	9/3, 9/25	
木村			
木村	木村半蔵	2/6, 4/9	注40
木村氏	〃	2/12	
切山	切山篤太郎?	2/23, 2/24, 8/1	注64
矩一	—	→児島矩一	
矩一／矩			
草野	不明	8/1	
工藤氏	工藤三郎	11/5, 11/30, 12/22	注306
久保田	不明	2/6, 2/13	
クラウド	—	→Claus, Emile	
クロス／クロス先生			
黒木			
黒木	黒木三次	12/3, 12/5	注354
黒木氏	〃	11/23, 12/6, 12/8, 12/10, 12/11	
黒田			
黒田	黒田清輝	2/23, 2/24, 6/8, 8/1	注67
黒田氏	〃	9/11	
黒田先生	〃	6/6, 9/27	
嶋一郎	—	→児島嶋一郎	
郡	郡虎彦?	6/25	注155
児島／児島			
児島	児島家 (児島徳太郎)	7/24, 8/29, 9/2	注173
成羽	〃	7/11	
矩一	児島矩一	2/22, 2/26, 2/29, 3/24, 3/29, 3/31, 4/2, 4/23, 4/27, 5/16, 5/21, 6/11, 6/28, 7/3, 7/11, 7/24, 8/1, 8/15, 8/23, 8/26, 8/30, 9/1, 9/10, 9/11, 9/12, 9/27, 9/28, 9/29, 10/9, 10/16, 10/22, 10/23, 10/25, 10/30, 11/1, 11/15, 11/27, 12/23	注62
矩	〃	9/2	
嶋一郎	児島嶋一郎	6/3, 8/1, 9/2	注137
兄上	児島徳太郎	3/14, 4/11	注89
妻	児島友	2/24, 2/29, 3/14, 3/18, 3/23, 3/24, 3/25, 4/11, 4/20, 4/23, 5/3, 5/24, 6/3, 6/5, 6/11, 6/25, 7/3, 7/6, 7/11, 7/17, 7/21, 7/24, 8/1, 8/15, 8/26, 8/29, 8/30, 9/1, 9/2, 9/10, 9/15, 9/24, 9/27, 10/9, 10/23, 11/2, 11/8	注70
直平	児島直平	2/29, 4/22, 5/5, 5/16, 6/11	注72
廣子	児島廣子	3/6, 6/4	注81
広子	〃	3/24	

日記に記された名	氏名等	日記の日付	参照先
母	児島雪	8/19	注243
ゴッホ	—	→Gogh, Vincent van	
ゴッホ			
小林			
小林	小林寿美太	2/12, 2/13, 2/26, 3/18, 4/22, 5/16, 5/21, 6/5, 7/21, 7/24, 8/1, 8/3, 8/15, 8/26, 8/29	注52
小林君	〃	2/26	
小林(兄)	〃	10/9	
小林(氏)	〃	4/26	
小松			
小松	不明	9/12	
小松氏	不明	11/10	
近藤	不明	2/23, 2/24, 5/5, 6/5, 6/25, 9/29, 10/3, 10/9	
斉藤			
斉藤	斎藤豊作	2/14, 8/1, 8/26, 9/19, 9/20, 9/25, 9/26, 9/29, 10/28, 11/10, 11/12, 11/13, 11/19, 11/26, 12/1, 12/7, 12/11, 12/22, 12/24, 12/26	注58
斉藤君	〃	8/24, 9/4, 9/7, 9/23, 9/26, 10/11, 10/17, 10/20, 10/21, 10/29, 10/30, 11/3, 11/14, 12/1, 12/27	
斉藤氏	〃	11/6	
斉藤(氏)	〃	11/4, 11/23	
坂田	不明	8/1	
坂本			
坂本鍵造	坂本鍵造	12/21	注395
坂本	不明	12/11	
笹川	笹川慎一?	8/1, 10/16, 10/23	注215
佐々木			
佐々木	不明	12/11	
佐々木氏	佐々木信造?	2/13, 11/14, 12/12	注56
佐藤			
佐藤	不明	8/29, 9/2, 9/24	
佐藤氏	不明	9/9	
皿井	皿井立三郎	8/1	注217
下田			
下田将美	下田将美	5/8	注130
下田		6/13	
シモン	—	→Simon, Lucien	
シモン/シモン氏			
シャヴァンヌ	—	→Chavannes, Édouard	
シヤバンヌ			
鈴木	不明	3/28, 4/10, 4/14, 4/15	
須田			
須田	須田国太郎	3/11, 3/16, 4/12, 4/20, 7/21, 8/15, 8/24, 9/13, 9/25, 10/3	注88
須田氏	〃	6/23, 6/24, 6/27, 6/28, 7/1, 7/3, 7/7, 7/9, 7/22, 7/23, 7/24, 9/4, 9/8, 9/12, 9/20	
須藤	須藤祐七	8/1	注216
住田?	不明	11/3	
炭谷	炭谷小梅	8/15, 9/2	注239
諏訪	諏訪秀三郎	11/26, 11/27, 12/4	注360
セガンティーニ	—	→Segantini, Giovanni	
セガンニー			
関	関五夫?	8/1, 8/31, 9/29, 10/3, 10/25, 11/2, 12/12	注218
セザンヌ	—	→Cézanne, Paul	
妹尾	不明	8/1	

日記に記された名	氏名等	日記の日付	参照先
高杉	不明	9/14	
武内	武内潔真	3/24, 3/28, 8/1, 10/30, 11/2	注100
田代	不明	12/31	
田邊	田辺至	8/1	注213
谷田			
姉	谷田タキ	6/27	注157
都志	都志太郎	2/6, 7/24, 8/3, 10/23	注41
辻			
辻永氏	辻永	6/8	注140
辻	〃	7/11, 7/24, 9/16, 12/31	
辻君	〃	6/8, 6/13, 11/5, 11/17, 11/22, 11/25	
辻氏	〃	6/22, 11/2, 11/9	
辻（氏）	〃	6/12, 6/14, 6/23, 10/31, 11/3, 11/10	
妻	—	→兎島友	
デシャネル	—	→Deschanel, Paul	
デシャネル氏			
デルヴァン	—	→Delvin, Jean-Joseph	
テルバン先生／デルバン氏／デルバン先生			
遠山			
遠山	遠山五郎	2/13	注54
遠山君	〃	2/13	
遠山氏	〃	3/7, 4/5, 11/28	
都鳥			
都鳥	都鳥英喜	6/13, 9/27	注83
都鳥氏	〃	3/8, 4/1, 4/23, 6/9, 6/23, 10/30, 11/14, 12/14	
都鳥（氏）	〃	6/14, 11/13, 12/6	
富永	富永勝重	8/1	注214
都山君	〃	4/25	
直平	—	→兎島直平	
長尾			
長尾一平氏	長尾一平	4/27	注47
長尾	〃	2/8, 3/8, 3/10, 4/27, 4/29	
長岡外史	長岡外史	2/29	注72
中川			
中川君	中川紀元	5/24, 9/14, 9/18, 10/18	注46
中川（君）	〃	10/18	
中川氏	〃	2/8, 3/8, 6/7, 9/5, 9/28	
中川（氏）	〃	6/9	
永地			
永地氏	永地秀太	11/10, 11/12	注312
永地（氏）	〃	11/10, 12/6	
中原			
中原	中原實	3/22, 4/6	注98
中原氏	〃	4/24, 5/12, 12/19	
長原	長原孝太郎？	8/1	注209
成羽	—	→兎島家	
西村			
西村	西村磯右衛門	2/23	注66
西村氏	〃	10/2	
橋本	不明	8/3	
長谷川			
長谷川潔君	長谷川潔	10/22	注103

日記に記された名	氏名等	日記の日付	参照先
長谷川	〃	3/28, 3/29, 10/12, 10/22	
羽田			
羽田亨	羽田亨	4/8	注97
羽田亨氏	〃	3/31	
羽田	〃	4/9, 4/16, 4/20, 4/21, 5/8, 9/13, 9/14	
羽田氏	〃	3/21, 4/19, 4/20, 9/10, 9/28, 12/17	
母	—	→兎島雪	
林			
林	林源十郎?	3/18, 3/29, 4/2, 4/11, 5/16, 5/21, 6/11, 6/28, 7/3, 7/21, 7/24, 8/1, 8/3, 8/15, 8/23, 8/26, 9/1, 9/2, 9/27, 10/9, 10/16, 11/1	注92
林氏	〃	6/5, 10/21, 12/25	
原			
原	原澄治	2/8, 3/30, 4/5, 6/25, 6/28, 7/3, 7/21, 7/26, 8/1, 8/3, 8/15, 8/29, 10/21, 10/23, 10/31, 11/17, 11/19, 11/24	注48
原氏	〃	10/22, 11/20, 12/25	
原田			
原田瓊生	原田瓊生	6/17	注152
原田瓊生氏	〃	6/ 備忘	
原田	〃	7/2, 8/3, 10/9	
原田氏	〃	6/18, 6/19, 6/20	
原田昌	原田昌平?	9/27	注265
バルトロメ	—	→Bartholomé, Paul-Albert	
バルトロメ氏			
東伯爵	東久邇宮稔彦王	12/11, 12/13, 12/15	注385
疋田	疋田直太郎	4/14, 4/16, 6/28, 7/2, 7/3, 7/26, 8/15, 9/2, 9/25, 9/27, 10/3, 10/9	注116
ピュヴィス・ド・シャヴァンヌ シヤンバンヌ	—	→Puvis de Chavannes, Pierre	
日向の母	—	→石井辰子	
平瀬			
平瀬君	不明	6/15	
平瀬 (氏)	不明	11/12	
平塚			
平塚	平塚英吉	4/16, 4/29, 5/8, 7/21, 8/3, 8/15	注118
平塚氏	〃	5/10, 5/11	
平野	不明	12/11	
廣子/広子	—	→兎島廣子	
廣瀬/広瀬			
廣瀬勝平氏	広瀬勝平	3/8	注82
廣瀬氏	〃	4/1, 4/7	
広瀬哲士氏	広瀬哲士	3/10, 5/31, 6/6	注85
廣瀬	〃	4/16, 6/9, 8/15, 9/11, 9/14, 9/27	
廣瀬氏	〃	3/21, 4/11, 6/6, 9/11, 9/27	
福島	不明	8/15, 8/26, 9/3, 9/5, 9/14, 9/27, 10/11	
福田氏?	不明	6/6	
藤	藤彦衛?	3/14	注91
藤岡			
藤岡	藤岡昇	12/16	注145
藤岡君	〃	11/21, 11/30	
藤岡氏	〃	9/12	
藤岡 (氏)	〃	6/12, 11/5, 11/30	

日記に記された名	氏名等	日記の日付	参照先
藤島			
藤島	藤島武二	2/23, 2/24, 6/8, 8/1, 9/1, 9/2, 9/27, 10/9, 11/20	注65
藤島先生	〃	3/26, 6/9	
細田氏	不明	6/30	
堀	不明	7/21, 8/3, 11/27	
堀久	不明 (岡山県人)	4/8, 4/9	
正木	正木直彦	8/1	注221
松尾	松尾哲太郎?	8/1, 8/3, 11/1	注220
松田			
松田道一氏	松田道一	11/16	注326
松田	〃	11/23, 11/24, 11/30, 12/1, 12/21	
松田氏	〃	11/21, 11/30, 12/11, 12/12, 12/20, 12/23	
松永			
松永	松永津志馬	2/22, 5/7, 5/8, 7/6, 7/11, 7/21, 7/24, 9/3, 9/5, 9/8, 9/9, 9/19, 9/23, 9/29, 10/17, 11/20	注42
松永君	〃	4/14, 5/13, 11/6	
松永 (君)	〃	2/9	
松永氏	〃	2/7, 2/22, 2/27, 3/1, 3/5, 3/9, 3/11, 3/12, 3/13, 3/18, 3/20, 3/24, 3/27, 4/4, 4/18, 4/25, 5/10, 5/11, 5/21, 6/6, 6/9, 6/20, 9/3, 9/29, 10/17, 10/28, 10/31, 11/5, 12/6, 12/17, 12/19, 12/20, 12/30	
松永 (氏)	〃	6/7, 6/9, 6/12, 11/28, 12/9	
松原	松原三五郎	8/1	注219
三浦			
三浦	不明	11/9, 11/10, 12/2	
三浦氏	〃	9/26, 9/29, 10/17, 10/30, 11/4, 11/14, 11/24, 12/9, 12/12, 12/19	
三浦 (氏)	〃	11/6	
溝口大佐	不明	12/12	
満谷	満谷国四郎	2/23, 2/24, 8/1, 11/27	注68
三橋			
三橋	三橋玉見	3/2, 3/6, 4/20, 6/5, 7/24, 8/1, 9/15, 9/27, 10/3	注74
三橋氏	〃	3/6	
三原	不明	8/1, 11/15	
三宅			
三宅専	三宅専一?	8/1	注225
三宅克	三宅克己	8/15	注241
三宅		3/30, 4/10, 4/11, 4/12, 6/12, 6/13, 7/21, 8/26, 8/30, 9/2, 9/3, 9/25, 9/27, 10/8, 10/9, 10/16, 10/22, 10/23, 10/27, 10/29, 11/6	
三宅氏		11/6, 11/9	
東京三宅		8/30	
ムーニエ	—	→ Meunier, Constantin	
ムニエー			
迎氏	不明	8/24, 8/30	
村上	不明	9/8	
メナール	—	→ Ménard, Émile-René	
モネ	—	→ Monet, Claude	
モネ氏			
森川智徳氏	森川智徳	9/10	注248
森田	森田恒友?	8/1	注222
柳井			
柳井	柳井新太郎	2/24, 3/10, 4/2, 4/11, 5/16, 5/24, 6/5, 7/11, 7/21, 7/24, 8/1, 8/3, 8/30, 9/1, 9/2, 9/12, 9/25, 10/3, 10/8, 10/9, 10/16, 10/23	注69

日記に記された名	氏名等	日記の日付	参照先
柳井君	〃	4/2	
柳井 (兄)	〃	10/9	
柳井 (氏)	〃	4/26	
山内	山内愚僊?	8/1	注212
山口 (君)	不明	2/9	
山下	山下新太郎?	3/28, 8/1, 8/26, 9/27	注102
山田			
山田穆	山田穆	3/3	注76
山田氏	〃	3/3, 3/4, 3/11, 4/6, 4/7	
山田放天	山田毅一	9/3	注246
山田		10/9, 10/22, 10/23	
山中			
山中	不明	4/9	
山中氏	山中千之?	10/27, 12/20	注285
山本	山本森之助?	8/1	注211
吉田			
吉田	吉田苞	2/22, 2/24, 3/31, 4/4, 5/4, 5/16, 6/11, 7/21, 7/24, 8/11, 8/15, 9/12, 10/17, 10/25, 10/29, 11/1, 12/29, 12/31	注61
吉田君	〃	4/4, 6/12, 8/11, 8/15, 8/24, 9/5, 9/8, 9/9, 9/10, 9/11, 9/12, 9/18, 9/19, 9/21, 9/23, 9/25, 9/30, 10/3, 10/18, 11/14, 11/30, 12/13, 12/18, 12/21, 12/26	
吉田 (君)	〃	10/18	
吉田 (兄)	〃	10/9	
吉田氏	〃	4/26	
吉田 (氏)	〃	9/29, 11/20, 11/28, 11/30	
吉政氏?	不明	6/17	
ル・シダネル	-	→ Le Sidaner, Henri	
シダネル			
ロダン	-	→ Rodin, Auguste	

氏名等	日記に記された名	日記の日付	参照先
Aman-Jean, Edmond-François (エドモン=フランソワ・アマン=ジャン)			注50
	Aman Jean	9/9, 10/10, 10/25, 11/10, 11/28, 11/30, 12/5	
	Aman Jean氏	2/9, 10/8, 10/10, 10/25, 10/26, 11/11, 11/12, 11/13, 11/17, 11/25, 12/1, 12/2, 12/6, 12/10, 12/11, 12/13, 12/15, 12/18, 12/19, 12/24, 12/26, 12/27	
	A□□ Jean	12/2	
	Aman氏	12/1	
	Am Jean氏	12/11	
	アマンシアン氏	3/3	
	アマンジャン	4/8	
	アマンシヤン	5/24, 10/11	
	アマンシヤン氏	3/8, 4/6, 4/7, 4/19, 6/28, 10/6	
	アマンジャン	2/18, 3/19, 10/6	
	アマンジャン氏	4/17, 4/19, 5/31, 6/6, 6/7	
Angèle			
	Angele	7/11, 7/12, 8/8, 8/9	
	Angeles	7/30, 8/1	
Anna			
	Anna	7/17, 8/1	
Bartholomé, Paul-Albert (ポール=アルベール・バルトロメ)			注122
	Barthorome氏	12/26	
	バルトロメ氏	4/19	

氏名等	日記に記された名	日記の日付	参照先
Bénédite, Léonce (レオンス・ベネディット)	Benedit	10/7	注86
	Mr Benedit	3/11	
	Benedit 氏	9/16	
	Beneditz 氏	10/16	
Bernhardt, Sarah (サラ・ベルナール)	Sara Bernard	10/23	注279
	Bonnard 氏	11/18	注336
Carte, Anto (アント・カルテ)	Carte 氏	7/10	注172
	セザンヌ	12/8	注378
Cézanne, Paul (ポール・セザンヌ)	セザンヌ	12/8	注378
	シヤバンヌ	4/6	注109
Claus, Emile (エミール・クラウス)	Claus 氏	4/16	注114
	Claus 先生	7/6	
	クロース	4/16	
	クロース先生	4/13	
Cottet, Charles (シャルル・コッテ)	Cottet	10/28	注147
	Cottet 氏	11/9	
	Cotte	10/7, 11/11	
	Cotte 氏	6/14, 6/16, 10/30, 11/10, 11/11	
	Cottee 氏	11/8	
	Cotter	10/11	
	De Bruyn, Mariette (マリエット・ド・ブライン)	Marette	
Marrette		12/24	
Mariete		10/13, 10/21	
Mariette		8/29, 9/4, 9/14, 9/22, 9/25, 10/1, 10/25, 11/7, 11/28	
Demeurisse, René (ルネ・ドゥムリス)	Demolise 氏	12/11	注384
	Demorice 氏	12/11	
	Demorisse 氏	12/15	
Denis, Maurice (モーリス・ドニ)	Denie	11/3	注288
	Denie 氏	10/29	
Deschanel, Paul (ポール・デシャネル)	デシャネル氏	4/19	注121
	Desvallières, Georges (ジョルジュ・デヴァリエール)	Desvallières	10/13
Desvallière		10/22, 11/10	
Desvalliere 氏		10/16	
Devallier		10/26	
Devallier 氏		10/26	
Devallier		10/26, 10/28, 11/14, 11/22, 12/17	
Devallier 氏		10/26	
Duncan, Isadora (イサドラ・ダンカン)	Isadora Duncan	6/27	注156
	Duthu, Laurent (ローラン・デュトゥ)	Duthu	4/14, 4/20, 7/26, 8/1, 8/15, 8/23, 8/29, 11/5

氏名等	日記に記された名	日記の日付	参照先
Dyck, Anthony van	(アンソニー・ヴァン・ダイク) Van Dyc	7/23	注183
Eugène	Eugène Eugene	6/25 6/24	
Flandrin, Jules	(ジュール・フランドラン) Flandrin Flandrin氏 Flandrn氏 Flandrent	4/19 11/16 11/17 11/3	注123
Frédéric, Léon	(レオン・フレデリック) Frederique	7/10	注170
Gambetta, Léon	(レオン・ガンベッタ) Ganbeta	11/11	注314
Gogh, Vincent van	(フィンセント・ファン・ゴッホ) ゴッホ	7/23	注185
Goya, Francisco de	(フランシスコ・デ・ゴヤ) Goya	1/20	注28
Guérin, Charles	(シャルル・ゲラン) Guerin氏	11/19	注341
Hoffmann	Hoffmann	6/24, 6/25	
Jzack	Mr. Jzack	12/27	
La Touche, Gaston	(ガストン・ラ・トゥシュ) La Touche La Tauche	10/7, 10/11 10/10	注271
Le Sidaner, Henri	(アンリ・ル・シダネル) Le Sidaner氏 Le Sidanel Sidanel シダネル	11/4 12/8 11/19 11/24	注302
Lebasque, Henri	(アンリ・ルバスク) Lebasque Lebasque氏 Lebasqu Lebasequ	11/29, 11/30, 12/11 11/2, 11/8, 11/28, 11/29 12/24 11/25	注296
Marguerite	Margeritte	8/8	
Marquet, Albert	(アルベール・マルケ) Marquet Marque Marque氏	11/22 11/17 11/24	注333
Martin, Henri Jean Guillaume	(アンリ＝ジャン＝ギヨーム・マルタン) Martin氏	11/19	注340
Marval, Jacqueline	(ジャクリーヌ・マルヴァル) Madame Marval	11/17	注330
Matisse, Henri	(アンリ・マティス) Matiss Mr Matisse	11/18, 11/22, 11/24 11/27	注337
Marguerite Duthuit-Matisse	(マルグリット・デュテュイ＝マティス) Mlle Matiss Mlle Matisse	11/18, 11/26 11/27	注338

氏名等	日記に記された名	日記の日付	参照先
Maurice	Mr Maurice	8/12	
Ménard, Émile-René (エミール＝ルネ・メナール)	Menard	3/3, 6/13, 6/14, 11/17	注80
	Menard氏	10/30, 11/2, 11/5	
	Menar	10/30	
	メナール	6/16	
Meunier, Constantin (コンスタンタン・ムーニエ)	ムニエー	9/10	注250
Millet, Jean-François (ジャン＝フランソワ・ミレー)	Millet	7/27	注200
Monet, Claude (クロード・モネ)	Monet氏	10/20, 10/21, 11/23	注278
	Monet	10/24, 10/26	
	モネ氏	11/23	
Montigny, Jenny (ジェニー・モンチニー)	Mlle Montinie	7/6	注164
Muñoz Degrain, Antonio (アントニオ・ムニョス・デグライン)	Degrain	1/20	注29
Ottmann, Henri (アンリ・オットマン)	Ottoman	10/29, 11/22	注290
Poree ?	Poree ?	8/29	
Potter, Paulus (パウルス・ポッテル)	Pottey	7/26	注192
Poulette	Mlle Poulette	4/13	
Prils, Oscar (オスカー・プリルス)	Prils	12/14	注390
	Ami de Pycke	12/9	
Puvis de Chavannes, Pierre (ピエール・ピュヴィス・ド・シャヴァンヌ)	シャンバンヌ	7/26	注193
Pycke, Francois (フランソワ・バイク)	Pycke	5/5, 8/4, 8/5, 8/6, 8/9, 8/10, 8/11, 9/11, 10/18, 11/28, 12/3, 12/7, 12/14	注129
	Pycke 君	8/7	
	Pycke氏	12/5	
	Pyck	8/29, 9/3, 9/12, 10/2, 10/27, 10/28, 10/29, 11/1, 11/3, 11/12, 11/15, 11/20, 11/24	
	Pyck氏	10/30, 11/7	
	Pyike	8/1, 8/8	
	Pyike 君	7/29	
	Pyike氏	8/7	
	Pyke	7/4	
Rembrandt van Rijn (レンブラント・ファン・レイン)	Rembrant	7/23, 7/26	注182
Renée	Renée	6/15, 7/19	注150
Renoir, Pierre-Auguste (ピエール＝オーギュスト・ルノワール)	Lenoir	12/8	注381
Rodin, Auguste (オーギュスト・ロダン)	ロダン	3/11, 4/7	注87

氏名等	日記に記された名	日記の日付	参照先
Segantini, Giovanni (ジョヴァンニ・セガンティーニ)			注184
	Segantiny	7/23, 12/4	
	セガンニー	7/27	
Sérusier, Paul (ポール・セリュジエ)			注319
	Serusier氏	11/14	
Simon, Lucien (リュシアン・シモン)			注79
	Simon	3/3, 3/4, 10/14	
	シモン	12/8	
	シモン氏	4/17	
Sorolla y Bastida, Joaquin (ホアキン・ソローリャ)			注27
	Zorala	1/20	
Tardy			注252
	Tardy	9/15	
Velázquez, Diego (ディエゴ・ヴェラスケス)			注26
	Velasques	1/20	
Vuillard, Édouard (エドゥアール・ヴュイヤール)			注313
	Vueiller氏	11/10	
Zingg, Jules Émile (ジュール・エミール・ザング)			注317
	Zingg氏	11/12, 11/15	